
女の子になりました 改訂版

雪屋こんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子になりました 改訂版

【Nコード】

N3755X

【作者名】

雪屋こんこ

【あらすじ】

通り魔に襲われて死んでしまった高校生、小日向優は、生前友達が一人もいない寂しい少年だった。本人曰く「ぼっちには慣れる」そうだけど、ただの強がりである。そんな彼が行き着いた先は、何もない真っ白な世界。そして、そこで出会った天使を名乗る少女から転生を告げられたのだが、それが悲劇の幕開けだった。 改訂版です。

死んじやいました(前書き)

死んじやいました

ぼっちは慣れてる。もともと引つ込み思案な性格の上に、なんの特徴もない容姿。身長が高いわけでもなく、頭がいいわけでもない。いや、どっちかというと頭は悪いほうかな。

運動も苦手、というより得意なものがないから話題もない。それに自分から人に話かける勇気がないから友達もできない。

ずっと一人。ずっとぼっち。慣れてるとは言っただけど、本当は凄く寂しい。でも、それももう終わりだ。

だって死んじやったみたいだから。

思えば何もない人生だったなあ。もし生まれ変わったら、もうちょつとマシな人生を送りたいです。

真っ白な世界。周りを見渡しても何もない。上も下も右も左も後ろも前も真っ白。立っているのか浮いているのかすら分らない。

生前の最後の記憶は、えーと、あれは確か、なんだっけ？ この白い世界にいて、なんだか記憶が曖昧になってくる。

ああ、そうそう、声だ。学校からの帰り道、後ろから女の子の声

が聞こえて、振り返ろうとしたら突き飛ばされたんだ。それで何が起きたのか理解できずに混乱して、とりあえず起き上ろうとしたら、女の子が僕の上に馬乗りになってきて、それで笑顔で言われたんだ。さよならー、って。

凄く可愛い笑顔だったことと、僕に向かって手を振っていたこと。それと右手にナイフを握り締めていたことを覚えている。気づいたらここにいて、ああ、死んじゃったのかあ、と自然に受け入れられた。

生前から生きているのか死んでいるのかわからない状態だったから、特に取り乱すこともなかった。

それにしても本当に可愛い子だったなあ。身長は結構低かったから、多分小学生の高学年か中学生くらいかな？ 下校時刻なのに私服だったから、やっぱり小学生なのかもしれないなあ。

凄く綺麗で柔らかそうな金髪と、青空のように透き通った青い瞳が印象的な美少女だった。あんなに綺麗で可愛い女の子は見たことがない。ナイフを握っていたから、通り魔か何かだったのかな？

ダメだぞ？ 可愛い子がそんな危ないことをしちゃあ。でも許しちゃう。

思い出すと頬が緩んでしまう。美少女に馬乗りされるなんて、僕の人生においてあれほど華やかで煌びやかでエロティックな大事件はない。

ああ、これは恋なの？ これが恋なの？ 思い出すと胸がドキド

キする。心臓は動いていないみたいだけど。

僕は僕を殺したかも知れない女の子に恋しちゃいました。

ここに来てから結構時間が経ったけど、どうしたらいいのかわからない。

「どこに向かうといいんだろう？ 迎えに来てもらえないのかなあ」

困ったのは、どこに向かえばいいのかわからないこと。道や看板がないから、どっちへ進めばいいのかわからない。

「下手に動き回ったら遭難しそうだし、ここで待ってみようかな」

とりあえずその場に腰を下ろし、体育座りで待つてみることにした。

どれくらい時間が経ったんだろう。時計はないし、昼も夜もないから時間の経過が全くわからない。でもぼっちには慣れてるから、もうちょっと待ってみよう。

まだ迎えが来ない。あれから随分と時間が経ったような気がするけど、人の気配は全くない。でもまだいける。まだ待っていていられる。こんな所でぼちスキルが役に立つなんて思わなかった。

もうちょっと待ってみよう。

もしかして既に遭難してるんじゃないのかな？ というネガティブな考えが頭を過り、ちよつと不安になってしまった。あれからかなりの時間が経ったけど、迎えに来る気配はない。

僕は相変わらずダメだなあ。ちよつと迎えが遅れたくらいで、すぐにネガティブな発想をしてしまう。

迎えに来る人にとって都合があるんだ。わがままを言っちゃいけない。

こんなんだから、生前は友達が一人もできなかったんだ。

あれから更に長い時間が経った。もしかしたら一年くらい経った

のかも知れない。そもそも迎えなんて来るんだろうか？ 僕が勝手に決めつけていただけで、迎えなんて来ないかも知れない。

ここから動いてみようかな？ どうしようかな？ 動いちゃおっかな？ ガラにもなくちよつと冒険しちやおっかな？

だめだ。やめておいた方がいい。冒険心なんて僕とは最も縁遠い代物だ。慣れないことをすると痛い目を見るだけだ。

それにしても、お腹が減らないのがせめてもの救いだ。まだいける。僕はまだ頑張れる。僕のぼっちスキルを甘く見ない方がいい。

さっき隠れて少しだけ泣いた。誰もいないから隠れる必要はないし、そもそも隠れる場所もないけど、体育座りのまま俯いて泣いてしまった。でももう大丈夫。もう泣いてない。僕はまだまだ頑張れる。

親指はお父さん。人差し指はお母さん。それで中指が僕。薬指は……可愛い妹、だったらいいなあ、なんちゃって！ あははっ！
そ、それで小指は、小指は……か、可愛い……か、か、彼女っ！
って何を言ってるんですか僕はー！ あー恥ずかしい。

迎え来ないなあ。

は、初めまして！ 僕は小日向優こひなたゆうです！ 迎えに来てくれてありがとうございます！ え？ 迎えが遅れたことなんて全然気にしてませんよ！

うん、このくらい元気に挨拶したほうがいい。それに失礼がないようにしないと。

うー、挨拶の練習をしてたら緊張してきた。

あれからどれくらい時間が経ったのかな。やっぱり誰も迎えになんか来てくれないんだ。ん？ 迎え？ 迎えってなんだっけ？ えーと、僕はなんでここにいるんだっけ？ というより僕は誰だっけ？

えーと、えーと、こ、こ、小日向、優？ ああ、そうだった。危ない、自分の名前を忘れる所だった。

「——ん。こ——さん」

誰も来ない。ずっと待ってるのに誰も来ない。誰を待っているのか、なぜここにいるのかは忘れちゃったけど、とりあえず誰も来ない。

「お——い。きこ——ない——か？」

そう言えば挨拶の練習をしていたような気もするけど、無駄かも知れない。きつと迎えなんて来ないんだ。僕はこのままこの場所で、永遠にぼつちで過ごすんだ。

「こむ——いさん。こむかいさん」

どうせ誰も迎えに来てくれないんだ。もういいんだ。どうせ僕のことなんか忘れ去られてるんだ。慣れてるからいいもん。忘れられるのはいつものことだから慣れてるもん。

出席の点呼ですらスルーされるくらいなんだ。小学校も中学校も皆勤だったはずなのに、何故か欠席扱いの日が結構あって、皆勤賞をもらえなかったんだ。

「こむかいさん、やつほー。迎えに来ましたよー。聞こえてますかー？」

いいんだ、どうせ僕なんてどうだっていいんだ。泣いてないもん。ぼつちは慣れてるもん。泣いてなんかいないもん。

「こむかいさん？ あれ？ 聞こえてないのかな？ おーい、もしもーし、しかとぶっこいてんなよー、調子に乗ってるとぶん殴るぞ

「」

もうこうなったら迎えが来ても動いてあげない。遅れてごめんねって謝らないと動いてあげない。僕だって怒ってるんだ。僕が怒ったら凄く怖いんだから。びっくりするくらい怖いんだから。

「えいつ」

「あたっ、へ？ なにっ？ あれっ？」

いきなり頭に衝撃が走った。それもかなり凄い衝撃。あまりに凄くて首がなくなるかと思った。

「聞こえてるかって聞いてんだろー、ぼけー」

「す、すみませんっ！ 聞こえてますっ！」

聞こえてきた声に向かって咄嗟に謝ってしまった。

「お前さー、もしかして調子に乗ってるのかー？ いらつくやつだなー。ぶっ殺すぞー」

「ご、ごめんなさいっ！ すみませんでしたっ！」

謝りながら焦って顔を上げたら、目の前に満面の笑みを浮かべた女の子が立っていた。

運命を感じました

「二度目はないからな」。あたしは殺るっていったら殺る女だからな」

笑顔から放たれる棒読みで物騒な言葉。表情と言葉が噛み合っていない。

「返事はー？」

「は、はいっ！ 以後気を付けますっ！」

女の子の言葉に即座に答えてその場に立ち上がり、必死で何度も頷く。どうやらかなりご立腹みたいだ。

「次はないぞ？」

「……はい」

首を傾げて微笑む女の子。その純真無垢な笑顔の裏に、恐ろしく冷徹な何かを感じた。

反抗したら殺される。一言でも文句を言ったら確実に殺される。ガタガタと震えながら頷くしか他に術がなかった。

「遅れてごめんね」。待ちましたー？」

「いえ、まったく全然、これっぽっちも待っていません。むしろ早く迎えに来ていただいてびっくりしています。お仕事お疲れ様です

！」

女の子の質問に、斜め四十五度のお辞儀で応対する。

「よかったー。六年も待たせちゃったから怒ってるかと思ってましたー」

ろ、ろくっ？ 六年っ？ そんなに経ってたのっ？ いくらなんでもちよつと待たせすぎじゃないんですかっ？ 六年って言えば小学校に入学した子供が卒業しちゃう年数ですよっ？

一年くらいだと思ってたのにそんなに経ってたのか。僕のぼっちスキル恐るべし。

ぺろつと舌を出した女の子が、頭にコツンと手を当てて、てへつと照れ笑いしてる。

てへつで済む問題なのかな？ 一言文句を……絶対に言わない方がいいな。

「立ち話もなんですから座りましょうかー。あつ、こむかいさんは立ったままでいいですよー。てめえが座る椅子なんてないからなー」

「りよ、了解です」

えへつと笑いながら酷いことを言われた気がする。でも反抗するのが怖いから、気を付けの姿勢で敬礼した。

それにしても、さつきから気になってたんだけど、女の子は自分の体より倍以上大きな机を背負っている。木製で豪華な机、しかも

その上に木材を山のように積んで。

身長は結構低いし、小学生の高学年か中学生くらいなのかな？
体は細いし、そんなに力が強そうにも見えないけど、豪華な木製の机だけで百キロ以上はありそうだ。

その上に積まれた大量の木材を合わせると、どれくらいの重さがあるのか想像できない。それを平気な顔で背負っている。

目の届く範囲に乗り物らしきものは見当たらない。というより、相変わらず何も無い。

あれを背負ってここまで歩いて来たのかな？ それってちょっと無理があるんじゃない？

でも、それを言っちゃうと背負っているだけでもかなり無理があるし、ここは死後の世界なんだから細かいことは気にしたら負けなのかな？

そうか、きつと霊的なパワーが何かかも知れない。いや、そうに違いない。

「うんしょ、うんしょ。ちょっと待っててくださいねー。すぐにセツトしちゃいますからー」

背負っていた机を地面に下ろして（といっても地面がどこなのか曖昧だから、机が白い空間に浮いてるみたいに見えるけど）、机の引き出しに収納されていた書類を出したり、バラバラになっていた木材を組み立てたりしている。

立ったままでぼーっと眺めていたら、しゃがんで作業していた女の子が僕を見上げてにつこりと笑う。その背後からどす黒いオーラを噴き出して。

「ぼーっと突っ立ってないで手伝えよこらー。殺すぞー」

「ひ、ひいつ。す、すみませんっ！ 気づきませんでしたっ！ 喜んでお手伝いしますっ！」

あまりの殺気に悲鳴を上げてしまい、恐怖で硬直した体に鞭を打って女の子に駆け寄った。

「ちょっとそこ持っててー」

「は、はいっ」

女の子の正面にしゃがみ、手渡された短い木材を女の子の言う通りに支える。椅子はネジの類を使わないはめ込み式のように、女の子は木材に空いた穴に次々とパーツを差し込んでいく。

それにしても綺麗な子だ。余裕がなかったせいで気付かなかったけど、こうして間近で見ると物凄い美少女なのが分かる。

全体的に幼いんだけど、それが凄く可愛くて、でも何故か凄く色っぽくて、まともに顔を合わせられない。

肩より少し長い、凄く綺麗で柔らかそうな金髪。前髪はちょっと長めで、無造作に横わけているから左目が少し隠れている。

そして青空のように透き通った青い瞳は、大きくて、それでいて

ちよつとたれ目で淒く優しそう。

体の線は折れてしまいそうなほどに細くて、肌は雪のように白い。

例えるなら天使だ。穢れを知らない清純な、でもちよつとだけ妖艶な天使だ。

外国の子なのかな？ それにしては日本語が上手だ。もしかしたらハーフなのかも知れないな。

まさしく絶世の美少女っていう言葉がぴったりな子だ。こんなに綺麗で可愛い子は見たことが……あれ？ どこかで見たことがあるような？

これはもしかやディジャヴ？ 運命の出会い？ こんなに可愛い子と僕が……運命の赤い糸で結ばれている？

「ちつ、ぼーっとすんなよなー。角度がずれてるから上手く入らないんだよー。手伝いもろくに出来ないのかー？ 使えないやつだなー」

「す、すみませんっ、こうですかっ？ こうでしょうかっ？」

木材が上手くはまらずに四苦八苦していた女の子が、僕を見て笑顔で舌打ちをする。その舌打ちが、またなんとも言えないくらいに可愛い。

すぐさま女の子が持っていた木材を手に取り、穴へと差し込む。すると四苦八苦していた割にはすんなりに入った。

力が強いのか弱いのか分からない子だな。でもそこも可愛い。

さっきまで恐怖の対象だったはずなのに、一度意識してしまうとドキドキが止まらない。恥ずかしくて顔も合わせられない。もうどんな行動を取っても可愛いと思えない。

これは恋なの？　これが恋なの？　僕、恋しちゃったのかも知れません。

「へえ、なかなかやるじゃない」

「お、恐れ入りますっ！　お褒めに預かり光栄ですっ！」

「じゃあ組み立てお願いしちゃおっかなー。これ説明書ねー」

「了解ですっ！　お任せくださいっ！」

につこりと笑った女の子が、僕に分厚い説明書らしきものを差し出した。

信頼だ。彼女は僕を信頼してくれている。僕に期待してくれている。その信頼と期待に答えねばなるまい。まさに運命の歯車が回り始めた瞬間だ。

地面に片膝をつき、頭を下げて説明書を承った。

それにしても材料が多すぎる。気になって説明書をパラパラと捲ってみたら、すぐに納得できた。

分厚い説明書の最後のページにあった完成予想図。まるで王様が

座するような豪華な椅子だ。はつきり言つて玉座だ。

机も豪華だけど、玉座に比べると大人しく感じてしまう。何故こんな豪華な椅子が必要なのか？ と疑問に思つてしまつけど、そんな所もお茶目で可愛い。

「あたしねー、ふかふかで豪華な椅子に踏ん反り返つてねー、人をゴミのように見下すのが好きなんだー」

「なるほど、凄く素敵だと思います」

「でしょー」

僕の正面にしゃがんでいる女の子は、両手で頬杖をついてにこにこ微笑んでいる。

僕はどちらかというに見下される側の人間だ。だとすると、この子と僕の愛称はぴったりだ。やっぱり運命なんだ。ここで失望させるわけにはいかない。

昔から工作とかは苦手で、かなり不器用な僕だけど、彼女の期待に答えるために、誠心誠意、椅子の組み立てに専念した。

おっぱいでした

ついに最後のパーツだ。この椅子を組み立てるのにかなりの時間を費やしてしまった。感動で目頭が熱い。

涙を拭い、最後のパーツを椅子にはめ込む。完成だ、ついに完成した。

思えば学校の工作やプラモデルをともに作れたことがなかった。初めてまともに作りあげた喜びは、言葉には言い表せないほどの感動がある。

しかも今まで経験したことがない、豪華絢爛な玉座を作り上げたんだ。

至る所に施された緻密な細工と、ふかふかで座り心地がよさそうな背もたれと座面。力強く貫禄がある肘掛け。豪華だけどシックで気品がある。

はつきり言って、彼女が座るには大きすぎるけど、この大きくて豪華な椅子にちょこんと座っている彼女を想像すると、可愛すぎて死にたくなる。

ふと正面を見ると、しゃがんで両手で頬杖をついたままの彼女が、僕の視線に気が付いてにつこりと笑ってくれた。

そのあまりの可愛さに、思わず視線を逸らしてしまう。

「こついつ時ってさー、男の子がいると助かるよねー」

「あ、いや、そんな……」

首を傾げて笑う彼女の笑顔が眩しすぎる。それと、さっきまでとは打って変わった艶やかで色っぽい声が堪らない。

そんな彼女があまりにも可愛くて、どうしていいのか分からず、顔が熱くなって視線が泳ぐ。

「頼りになる男の子って……好きかも」

「た、頼りにつて、そんな、僕はそんな大した男じゃ。あの、その、僕は別に、その……」

彼女の潤んだ青い瞳が僕を射抜く。可愛い、可愛すぎる。どこを見ていいのか分からず、あたふたしながら視線を泳がせ続け、そして思いつき横を向いた。

なんだ今のは？　僕は何を、何を見たんだ？

彼女が身に着けているのはノースリーブの白いワンピース。透明感のある彼女にとてもよく似合っている。それはいい。それはいいんだけど。

どうしよう、どうしたらいいんだ。一瞬チラリと見たものは、僕の見間違いなのかな？

ワンピースは襟元が大きくはだけられていて、彼女が前かがみに頬杖をついているせいで、胸元がチラチラと見えてしまう。その奥

に一瞬チラリと見えたもの。小さいけど柔らかかそうな二つの膨らみ。

「どうしたの？」

「はっつ」

俯いてドキドキしていた僕に、肌が触れるほど近づいて来た彼女は、前かがみで下から僕の顔を覗き込んでいる。

今の彼女の姿勢は危険だ。ちょっと覗き込めばアレが見えてしまう。僕には刺激が強すぎて、そしてあまりにもいやらしい光景だ。

チラリと胸元を覗き込もうとして、慌てて視線を逸らす。

チラチラと見え隠れする膨らみ。そして気づいた衝撃的な新事実。間違いない。彼女は下着を付けていない。いわゆるノーブラというやつだ。

考えただけで顔が熱くなる。

確かに彼女は幼いけど、下着を付けてもいい年頃のはずだ。それがノースリーブのワンピースを着ているだけで、中には何も付けていない。

なんて無防備な子なんだ。これほど可愛くて無防備だなんて危険すぎる。本当は「大事な所が見えちゃいそうですよー」って気さくに注意してあげた方がいいんだろっけど、自分の中の何か黒いものが良心を掻き消してしまう。

最低だ。僕は最低だ。純真無垢な彼女に欲情し、あわよくば思い

つきりチラ見したい、そしてできることなら指でおっぱいを突っついてみたいと思っている。

ダメだ、そんな不純なことを考えちゃダメだ。それは分かっているけど、僕だって男だ。こんな可愛い子のおっぱいを見れるのなら、見たいに決まっている。

でもそれって、彼女を裏切ることになるんじゃないかな。

そう思っ、後ろ髪を惹かれながらも視線をそらした。

そんな葛藤に喘いでいる僕をまるで挑発するかのように、彼女は首を傾げて僕の顔を見ようと移動する。

またも僕の目の前に大きくはだけられた胸元が露わとなった。

見てはいけないと思えば思うほど、視線は胸元に釘付けになってしまっ。

「こむかいさん、どうしたの？ 顔が赤いよ？ 熱があるの？」

彼女は純真で可憐だ。こんな欲望にまみれた僕を気づかせてくれている。それに引き替え僕は、彼女が気付いていないことをいいことに、はだけられた胸元をチラチラとチラ見している。

もはやおっぱいはほとんど丸見えだ。先っちょだけは絶妙に隠れているけど、でも、この見えそうで見えない状態が最高に堪らない。

服の隙間から見えるおっぱいって最高にえっちな。女の子の裸を見たことがない僕が言うのもなんだけど、裸にはないえっちなさがあ

る。

このままでは危険だ。ここは僕たち二人以外に誰もいない。誰も見ていないのなら、何をやっても許される、という邪悪な思考が自制心を崩壊させるのも時間の問題だ。

いや、もう既に崩壊は始まっている。

相手は僕より一回りは小さな女の子だ。抑え込んでしまえばどうとでもなる。

僕の身長は百七十センチで決して大きくはないし、痩せてるから大した力もないけど、それでも彼女よりは全体的に大きい。

彼女の身長は、多く見積もっても百五十センチはないだろう。恐らく百四十センチ前半か中盤くらいだ。しかも体は折れてしまいそうなほど細い。

僕が本気を出せばどうとでもなる。押し倒せば抵抗すらできずになれるがまだ。泣こうが叫ぼうが、この白い世界に助けなんて来るはずがない。なにせ六年間誰も来なかったんだから。

ゴクリと唾を飲み込み、視線を下へと向ける。彼女が着ているワンピースは丈が短く、しゃがんでいるせいもあって、ふとももが露わになってしまっている。

いや、ふとももが露出しているなんてレベルじゃない。彼女のワンピースは立っている時ですらミニスカート並みに丈が短かった。それがしゃがんでいるせいで、かなり際どいことになっている。

ちょっと屈めば大切な部分が見えてしまいそう。現在はふとももを閉じているせいで、見えそうで見えない。でもほんの少し屈めば、確実に中が見える。

「ねえ、こむかいさん、どしたの？ 気分が悪いの？」

彼女の言葉に我に返る。いけない、ふとももをチラ見どころか露骨に凝視してしまっていた。胸やふとももを覗いていることがバレたら変態扱いされてしまう。

女の子に免疫がない僕にとって、今の状況は天国と地獄だ。

目の前にはおっぱいとふともも。しかも絶世の美少女の。

ああ、でもこんな近くで女の子を見たのは初めてな上に、相手が超のつく美少女で、しかも色んな所が見えそうで見えないという危険な格好で僕を見つめている。手を伸ばせば届いてしまう距離に。

そんな僕の良心と邪心が猛烈にせめぎ合っているのをよそに、あろうことが彼女は首を傾げてちよつとだけふとももを広げた。

み、見えそう。ふとももの奥の秘密の花園が見えちゃいそう。もうちよつと、あとちよつと開いてくれたら確実に見えてしまう。いや、普通なら既に見えてしまっているはずだ。

角度だ。絶妙な角度でギリギリ見えない。

「こむかいさんのえつち……」

「えっ？ あっ、ち、ちがつ、違います見てませんっ！」

不意にかかった彼女の艶のある声。目の前には頬を薄桃色に染めた彼女が、恥ずかしそうに胸元を手で隠して僕を見つめていた。

調子に乗りすぎました

驚いて咄嗟に否定したけど、どうしよう、おっばいやふともを覗いていたのがバレていた。

「うそ、絶対に見てたよ。こむかいさん、あたしのおっばいを見てた」

「ち、違いますっ！ 誤解ですっ！ 見てませんっ！ ギリギリ見えてませんっ！」

その場に尻餅をついてしまった僕は、必死に否定して後ずさる。そして彼女は潤んだ瞳で僕を見つめながら、四つん這いになって詰め寄って来る。

マズい、四つん這いは絶対にマズい。胸元からおっばいが全部見えてしまう。

見ちゃダメだ、見ちゃダメだ、見ちゃダメだ、でも見たい！

「見えてない？ やっぱり見てたんだ。こむかいさんの嘘つき」

「あっ、そ、それはっ、そのっ、ち、違うんですっ！ 偶然見えてしまっつ！ じゃなくて偶然見えそうになっつ！ でも大事な所は見えませんでしたっ！ 本当ですっ！ 本当なんですっ！ 信じてくださいっ！」

どうしよう。覗いていたことが完全にバレている。このままだと

僕は女の子のおっぱいを覗いた変態になってしまっ。

恐怖と後悔で体が震えてしまい、上手く後ずさりできない。そんな僕を見つめている彼女は、潤んだ瞳でなおも詰め寄ってきた。

もう彼女との距離はゼロに近い。桃色で柔らかそうな唇が、僕の唇に触れそうなほどに近い。そして彼女の甘い香りが僕を狂わせる。

なんて香りだ。気が狂いそうなほどに甘美な香りだ。彼女の体から放たれている甘い香りを嗅いでいると、冷静な判断なんてできなくなる。頭がくらくらして思考がどんどん狂気へと走っていく。

純粹で可憐な彼女を、壊してしまいたい衝動が抑えられない。

「ねえ、見たい？」

「え？」

彼女の吐息が僕の唇を刺激する。

「こむかいさんが見たいなら、あたし、見られてもいいよ……」

彼女の可憐な唇から紡がれる、衝撃的な言葉。

「こむかいさんが望むなら、触られたっていい。こっちも……」

彼女は四つん這いの体勢のまま、ワンピースの肩の部分を手ですらすと、小さくて柔らかかそうな膨らみが露わになる。もうほとんどおっぱいが丸見え状態だ。

しかも彼女はにっこりと微笑んで、スカートをたくし上げる。ふともみがほとんど露出し、あと数センチでその先が見えてしまう。

なんて、なんてえっちな姿なんだ。しかも彼女は僕を誘っている。見てもいいと言っている。望めば触れていいと言っている。そしてその先は……。

甘い匂い、彼女の香り。とてもいい匂いだ。頭がぼーっとする。意識が混濁していく。自分が何を考えているのかよく分からなくなってきた。

もう、どうなってもいい。

ゴクリと唾を飲み込み、揺れる視線が彼女のおっぱいとふともを交互に捉え、欲望の渦が僅かな良心を粉々に打ち碎いた。

「キミは見られるのが好きな変態なの……？」

彼女に対して僕は酷いことを言ってしまった。変態なのかと聞いてしまった。最低の質問をしてしまった。そんな最低の質問をされた彼女は、恥ずかしそうに視線を逸らす。

「……うん」

そして彼女は頷いた。肯定した。自分は変態であると認めた。ならもう、何をしたらつかまわない。

「触れて欲しいの？」

僕は今、どんな顔をしているんだろう。きっと最低な顔をしてい

るだろう。心のどこかで鳴り響く警鐘が聞こえる。それがほんの少しだけ残った良心なのかは分からないけど、これ以上はいけないと僕を止めようとする。

でもダメだ。止まらない。彼女の甘美な香りが、自分を変態だと認めた事実が、僕を完全に狂わせてしまった。

「うん、あたし、こむかいさんに苛められたい」

可憐な彼女から紡がれる卑猥な言葉。そうだ、見た目がどんなに可憐で純真でも、そう扱われることを望んでるんだ。

ならそうしてあげる。望みを叶えてあげる。

「いいよ、キミは今から僕の奴隷だ。わかったかつ！」

もう止まらない。止まるつもりもない。彼女は僕のものだ。僕だけのものだ。この白い世界で、果てしない無限の世界で、二人つきりです。

邪魔するヤツは誰もいない。

胸元をはだけ、スカートをたくし上げたままの姿の彼女は、恥ずかしそうに、でも期待を込めた潤んだ瞳で僕を見つめている。心の中は期待で一杯なんだろう。

手を伸ばし、桃色に色づいた彼女の頬に触れようとしたその時、カチリと機械的な乾いた音が響いた。

『いいよ、キミは今から僕の奴隷だ。わかったかつ！』

へ？

『いいよ、キミは今から僕の奴隷だ。わかったかつ！』

え？ なにこれ？ これ僕の声だよね？ え？ なに？ どういうこと？

『いいよ、キミは今から僕の奴隷だ。わかったかつ！』

え？ ちょっと、すみません止めてください。なんで僕の変態的な発言が繰り返し再生されてるんですか？ 凄く恥ずかしいです。お願いですから止めてください。

『いいよ、キミは今から僕の奴隷だ。わかったかつ！』

やめてえっ！ もう許してえっ！

につぱりと笑う彼女の手には、旧式の黒いテープレコーダーらしき物が握られている。でも音質や連続再生が可能な所を見ると、中身は高性能携帯型ボイスレコーダーのようだ。しかも、はだけられた胸元やたくしあげられたスカートは既に直されている。

なんだ？ 僕は何をしていたんだ？ なんであんなことを言ったんだ？ おかしい。自分が自分じゃなかったみたいだ。

気が付いたらあれほど僕を狂わせた甘い香りが消えているし、もやがかかったように混濁していた意識がすっきりしている。

『いいよ、キミは今から僕の奴隷だ。わかったかつ！』

うん、もう充分です。これ以上は勘弁してください。彼女が録音していた僕の言葉を繰り返し返し聞いているうちに、彼女が何をいいたのか大体わかってきた。

何故かは知らないけど、僕はハメられたんだ。

変だなあとは思ってはいたんですよ。生まれて一度もモテたことがない、というより女の子の知り合いすらない、というより友達が一人もない僕が、こんな可愛い女の子から誘惑されるなんて、そもそも話が出来すぎでした。

でもいい夢を見れました。たとえハメられたとしても、生おっぱいと生ふとももが見れたから、僕は十分満足です。

「こむかいさんは、こういうのは好きじゃないかー」

ちょっと困ったような笑顔で、そんなことを言う。

「え？　好きじゃないって何がですか？」

「あはは、なんでもないよー」

そして彼女はひらひらと手を振ってにっこりと笑った。なんだかちょっと残念そうで、でも嬉しそうな、そんな笑顔。

「所で、こむかいさんの犯した罪を帳消しにする方法がありますけどー、聞きますー？」

帳消し？　また随分と美味しい話ですね。僕と取り引きしたいっ

てことですか。やっぱり僕はハメられたんだ。

それに自分の身を犠牲にしてまで取り引き材料を作ったってことは、それ相応の裏があるってことですよね？　僕に危ない橋を渡れってことですよね？　わかります。

ああ、彼女の純粋な笑顔の向こう側に、暗黒のオーラが見える気がする。

まあ、彼女の策にハマった時点で選択肢は一つなんですけどね。ならば答えは決まってる。

「是非とも聞かせてくださいっ！」

これしかない。

契約させられました

「じゃあいくつか質問しますから、素直に答えてくださいねー」

机の上にあらかたの書類を出し終わった彼女は、眼鏡をかけて玉座に座り、笑顔で僕を見下している。見ているんじゃない、見下しているんだ。そこが肝心だ。

そういえば言っていましたよね、人を見下すのが好きだって。

そして、そんな彼女の正面に僕は立っている。

「返事はー？」

「はい、了解です」

「あたしが質問したら必ず返事しろー、次しなかったらぶつ殺すぞー」

「ラジャーッ！」

につこりと笑う彼女の瞳の奥に見える殺気。そう言えばすっかり忘れていた。この子はやろうと思えばやれる子だ、もとい、殺ろうと思えば殺れる子だ。気を付けよう。

それにしても、あの玉座はやっぱり彼女には大きすぎる。まあ、大人用の椅子に座る子供みたいで可愛いけど。

「その前に自己紹介をしておきますねー。あたしは美少女天使のドベちゃんです。こむかいさんの担当なんですよー」

天使？ まあ、ここはあの世なんだろうし、天使がいても不思議じゃない。それに彼女は天使と言っても遜色のない人間離れた美貌の持ち主だ。逆に。○小学校に通ってる普通の女の子です、なんて言われた方が不自然に感じてしまう。

それにしても、自分で自分を美少女って言い切るのは凄い自信だ。まあ、言えるだけの美貌を実際に持つてるんだけど、思っても普通は言わないんじゃないかなあ。

それはそうと、天使が詐欺まがいなことをしてもいいんですか？ それはあなたを襲おうとした僕が全面的に悪いですよ。スケベ根性を出した僕が悪いですよ。ですけど、そう仕向けたのはあなたですよ？

と反論した所で、どうせ切り返されるんでしょうから、何も言いませんけどね。

「あたしは天使養成学校時代から万年ドベでして、今も仕事の成績が断トツでドベなんです。だからドベちゃんなんですよー」

天使養成学校？ へえ、そんな学校があるんですか。それとドベちゃんって愛称だったんですね。本名にしては変だと思いました。

関係ないですけど、見た目は超絶美少女で中身はアホの子、そういうの個人的に大好きです。誰がなんと言おうと僕はあなたの味方です。

「まずは本人の確認をします。こむかいゆんさん、享年一八歳。家族構成は父と母と本人。性格は内気でへたれ。その他、特筆すべき事項は特になし。以上です。相違ないですか？」

実はずーと気になってたんですけど、僕の名前は小日向優です。こむかいゆんじゃありません。ていうか“こむかい”はまだいいにしても“ゆん”はないと思います。どうしたら優とゆんを間違えるんですか？

なんとなくだけど、わざとやってるような気がする。

「あの、名前なんですけ——」

「何か？」

「いえ、間違いありません」

名前を訂正しようとしたけどやめた。

眼鏡を指でクイツと上げて、につこりと笑った天使さんの瞳には、つべこべ言ったらぶっ殺す、と書いてありました。

やつぱりわざと間違えていたんですね。言い直す気はサラサラないんですね。もう“こむかいゆん”でいいです。名前なんてどうだっていいです。

「では質問を始めます。あなたは死んだことを理解してますか？」

無難な質問だ。これは速攻で答えられる。

「理解しています」

僕の答えを聞いた天使さんは、ふんふんと頷きながら書類へと何かを書き込んでいる。子供が一生懸命勉強してるようで凄く可愛い。

それとは別に、天使さんの眼鏡をかけた姿は新鮮だ。目が悪いのかな？ 天使なのに？ それとも雰囲気作り？

どちらにしる凄く可愛い。普段眼鏡をかけない子が、授業中とかに眼鏡をかけたりしているのを発見すると、普段とは違った知的な感じがして凄く興奮します。

「よろしい。では次の質問。あなたは自分の死因を知っていますか？」

死因？ 死因か。なんだっけ？ ここに来た時は覚えていたような気がするんだけど、頭にもやがかかったみたいでどうしても思い出せない。これって今にして思うと、さっき天使さんからハメられた時の感じに似ている。

誰かに自分の意志を操作されているような、そんな感じ。まあ、誰かって言っても、ここには僕と天使さんしかいないわけで、でも死んだ時の記憶が曖昧になったのは天使さんに会う前なんだよね。

もしかしてこの白い世界が原因なのかな？ だとしたら僕にはどうすることもできないし、正直死因なんてどうだっていいし、素直に忘れたって答えよう。

「忘れました。頭にもやがかかったみたいで、どうしても思い出せないんです」

「そうですか。天界には交通事故^{じふこ}ってことで上がってますね。まあ、天界の調査は信頼できますから間違いはないと思いますけど、一応本人の承認が必要なんですよ。記憶に有る無しに関わらず」

「承認ですか？」

「はい、死因^{しん}って意外と大切なんですよ。特に死の間際の記憶が欠落している人は。口頭では死んだことを理解していると言っても、実際は理解できていない人もいます。ですから一応の自覚を持ってもらうために、死んだ人全員から書類にサインをしてもらっているんです」

へえ、なるほど。死んだことを確認するための儀式みたいなものか。それとは関係ないけど、質問が始まってからの天使さんはなんだか凛々しくなっている。さっきまでは棒読みで間延びした話し方だったのに、今は淡々とした事務的な口調だ。

真面目な天使さんは非の打ちどころがない超絶美少女だ。それにこの子は本当にアホの子なのかな？ こうしていると全然アホっぽく見えない。

凛々しい天使さんも可愛いけど、あまりにも完璧すぎてなんだか話づらい。僕としてはアホっぽい天使さんの方がいいなあ。

「あの、こむかいさん？ 承認していただけるなら書類にサインをもらってもいいですか？」

話かけられて我に返ると、首を傾げた天使さんが僕を見ていた。しまった、全然関係ないことを考えていた。

「あ、はい、全然問題ないです。サインしま——？」

一歩進んで机に置かれた書類にサインをしようとしたら、書類がかなり不自然だった。

文字は読めない。きっと天界の文字なんだろう。それはどうでもいいんだけど、書類が不思議な光を発している。それだけじゃない、ただ承認するだけという割には、書類の作りが変だ。

読めない文字がびっしりと書き込まれている書類の、その中心に描かれた幾何学的な円形の魔法陣らしきもの。そして天使さんが指をさしている場所は、魔法陣らしきものの中心。

さらに魔法陣らしきものが鼓動を刻むように脈打っている。これ、もしかして生きてるの？

怪しいとか、危ないとか、そういう次元を軽く飛び越えちゃってる気がするんですけど。

こういうのは漫画やアニメで見たことがある。これって承認じゃなくて契約とかじゃないのかな？ もしかして天使さんは天使じゃなくて……悪魔さん？

それともう一つ、さっき僕は天使さんの話を聞いていなかった。それなのに天使さんは怒らなかった。今までの天使さんなら「ぶっ殺すぞー」とか物騒なことを言っていたのに。

これは絶対に変だ。

天使さんは僕に気を使っている。まるで知られるとマズイことでもあるかのように。そして書類にサインを書かせたがっている。

サインすれば、きっと僕は不利な状況に追い込まれる。そんな気がする。

でも何も言うつもりはなかった。だって天使さんは言ったんだ。僕の罪を帳消しにしてくれるって。

天使さんは無言で僕にペンを差し出し、僕はそのペンを無言で受け取った。

「その顔色を見ると気付いたようですね」

淡々とした口調で天使さんが僕に話かける。

「やめますか？」

「いえ、サインします」

「そう……ですか。じゃあお願いしますね」

ほんの少しだけ意外そうな顔をした天使さんは、僕を見てにっこりと笑った。その笑顔は今まで見た天使さんの笑顔の中でも一番綺麗で、そして可愛かった。

そのあまりの可愛らしさに呆気にとられてしまったけど、すぐに気を引き締めて書類にペンをつけ、自分の名前を書き込んだ。

『ありがとう』

サインをし終わった時、そんな言葉が聞こえたような気がした。

おっばいは正義でした

「ここまでで何か言いたいことや聞きたいことはありますかー？」

「いえ、特にないです」

「へ？」

書類を見ていた天使さんは、僕の答えを聞くと顔を上げて、少し驚いたように僕を見つめた。

「本当に……何もないの？」

言いたいことも何も、天使さんとの取引に乗った時点で僕には何も言う権利なんてない。でも、正直ちょっと不安だけど。

「変わった人ですねー」

変わってる？ うん、僕は確かに変わってるのかも知れない。

僕は自分を大切には思えない。自分の命に価値があるとも思えない。

いてもいなくてもどうでもいい存在だと割り切ってしまったって、だから死んでも特に何も感じなかったし、そんな自分が嫌いでもある。

本当は寂しくてどうしようもないクセに。

「悪いようにはしませんよ」

そんな僕の心を見抜いたのか、クスツと笑った天使さんは、とても優しい瞳で僕を見つめた。

どう見ても僕のほうが年上なんだけど、なんだかお姉さんにあやされたようで少し恥ずかしい。

「ああ、それと、こむかいさんはここがどこか分かりますか？」

ここ？　ここってこの真っ白な世界のこと？　あの世じゃないのかな？　違うのかな？

「あの世だと思ってましたけど、違うんですか？」

僕の答えに困ったような表情をした天使さんは、上目づかいで僕の顔を窺っているみたいだ。ああ、可愛い。その仕草が堪らなく可愛い。

天使さんは動物に例えると子猫だ。金色の毛並で青い瞳の子猫。ちよつと生意気そうで、そして自由で。

でも優しそうな所は子犬みたいにも思える。特に上目使いで僕を見つめる仕草はまんま子犬だ。

「怒らないで聞いて欲しいんです」

「あ、はい。怒りませんよ」

怒るも何も、あなたに反抗する気はありません。だって子猫ちゃんはおイタをする生き物です。そしてそこが可愛いんです。

それと……反抗なんかした日には、とても恐ろしいことが起きるような気がしますから。

なにせ、あなたは殺ろうと思えば殺れる子ですからね。

「えーとですねー。ここは地獄の最下層である無間地獄だったりします」

へ？ 地獄？ しかも最下層？ なんかとんでもないことをサラツと言いましたね？

僕、そんなに悪いことをしましたっけ？ まさかあなたを襲おうとしたからですか？ いやいや、あれはここに來たあとだから違いますよね？

なんだろう？ 地獄に落ちるのはまだいいとしても、さすがに最下層に落ちるほどの悪行はした覚えがない。

「ここは八大地獄の中でも特に恐ろしい地獄でして、他の地獄のようないやめによる苦痛はないんですけど、永劫の無が続くんです。それと、他の地獄はいずれ転生できますが、この無間地獄だけは別です。永劫の孤独に魂が摩耗し、いずれ完全に消滅してしまいます。痛いほうがまだマシってことですねー」

転生できない？ 魂が消滅する？ なんでまた僕はそんな危ない所に落ちてるんですか？

僕は善人ではありませんでしたけど、悪人でもなかったと思ってました。というより、生前は特に何もしてませんでした。ただ息をすって吐いていただけでした。それがいけなかったんですか？

なんだか「お前は生きていただけで超罪だったんだよ、ぼけ」って言われてるみたいでなにげにショックです。

「なんでそんな所にいるのかって疑問に思いますよねー？　そうですよねー」

いいえ、理解しました。僕は生きていただけで超罪だったんですよね。いいんです、気を使わないでください。存在自体が超罪だったんですね。

既に死んでるのに死にたいと思うのは罪ですか？

「あのですねー、それはですねー、こちらの手違いで落つことしちやっただですよー。ごめんね？　えへっ」

はい？

頭を手でコツンと叩き、ぺろつと舌を出して「間違いは誰にでもあるよね？」とか言っている天使さん。

確かに間違いは誰にでもありますよ。ですけどね。ですけどモノには限度つてものがありましてですね。それですね、あなたの間

違いはその限度を大幅に超えてしまってますね。要するにですね。要するにですよ？

ふざけないでくださいっ！　いくらなんでも酷すぎませんかそれ！　地獄の最下層ですよ？　えへ、で終わらせてもいいことなんですか？　普通ならキレますよ？　マジギレしますよ？　僕はキレませんけどね！

だって天使さんはぺろつと舌を出しながら、指で胸元を引っ張っておっぱいをほとんど露出させているんだもの。あからさまにおっぱいで誤魔化そうとしてるんだもの。「おっぱいを見せてあげるから許してちょ？」って無言で言ってるんだもの。

ええ許しますとも。僕は天使さんのおっぱいを見れるなら、いくら誤魔化されたっていいもの。

天使さん、あなたのおっぱいにはそれだけの価値があると思います。

でも、僕がここにいるのはそちらの過失みたいですし、ならちよつとだけ突っついてダメですか？　あと一度でいいから女の子のパンツを見てみたいです。

それに、これをネタに揺すれば、もしかしてあんなことやこんなことだって……する勇氣はないんですけどね。

「それにしても驚きですよねー」

うわっ、びっくりした！　天使さんの声を聞いて現実に引き戻された。すみません、妄想してたら別次元にトリップしてました。

バレてないかな？ おっぱいを露出させてる天使さんを使つて、
超いやらしい妄想をしてこと、バレてないかな？

「魂の完全消滅は数千年かかるんですけど、自我は通常一年足らず
で崩壊してしまうんです。そんな所に六年間もいたのに、平然とし
ているこむかいさんって物凄い精神力ですよー」

あー、よかった。バレてなかったみたいだ。それともサービスし
てくれたのかな？ 天使さんは僕の思考を読めるような節があるし。

あと、おっぱいしまっちゃったんですね。凄く残念です。ってそ
うじゃなくて。

いやいや、全然平気じゃなかったですよ。物凄く寂しかったです
よ。ちよつと泣いちゃいましたよ。

でも、僕って生前から無間地獄にいたようなものでしたから。：
いや、人がいるのにスルーされまくるって、ある意味誰もいない
よりつらい気がするの、は気のせいでしょうか？

それに本気を出せばあと数十年はいけたと思います。僕のぼっち
スキルを甘く見ないでください。

「しかも落下地点から全然動いてなかったですし、普通は不安で動
き回るものですけどねー」

はい、普通はそうでしょうけど、僕の場合は不安で動けませんで
した。根っからの小心者なので。

「もし動き回ってたら見つけ出すことは不可能に近かったんですよ。今までも前例が何件あるんですけど、見つけ出せたのはこむかいさんが初めてです。らっきーでしたねー」

前例が何件あるって、天界は何をしてるんですか。そんなずさんな管理でいいんですか。

ん？ まてよ？ 落下地点？ 落下地点から動いていなかったから見つけ出せた？ じゃあ落下地点は分かってたってこと？

だったらなんで僕は六年間も放置されてたんでしょうか？

聞きたい。凄く理由を聞きたい。でも聞いてはいけない気がする。聞くと最悪の答えが返ってきそうな気がする。でも、もしかしたら落下地点には誤差があって、特定するのに相当な困難を要した可能性だってある。

そして、天使さんは僕を探すために六年間もこの真っ白な世界を彷徨っていたのかもしれない。しかもあの机と椅子を背負って。

だったらお礼を言いたい。普通は怒る所だっけ言うのは分かっているし、お礼を言うようなことじゃないのかも知れないけど、でも僕を探すために頑張ってくれたのなら、やっぱりお礼を言いたい。

だって、僕にそこまでしてくれる友達なんていなかったから。僕がいなくなっても探してくれる人なんていなかったから。

「あの……天使さん」

「他人行儀ですねー。ドベちゃんでもいいですよー。なんですか？」

にへら、と笑い、やけにフレンドリーに対応してくる天使さん。

「いえ、なんでもないです」

「なんですかー。変なこむかいさんですねー」

天使さんは不思議そうに首を傾げている。

やっぱり聞くのはやめよう。天使さんは頑張っ て僕を探してくれ
た、それでいい。聞かなければそれが真実だ。

なんだか天使さんの笑顔を見ていると「落っこちたの気づきませ
んでしたー」って言われそうで凄く怖い。

質問を途中でやめてしまった僕を、何を勘違いしたのか天使さん
は「しょうがないなー」と言いながら、またもや指で胸元をはだけ
る。

いえ、別におっぱいを見たいとか言いたかったわけじゃなかった
んですけど、見せてくれるのなら是非とも見たいので、特に何も言
いません。

サヨナラを言われました

「あたしも一応悪いとは思ってまして」

一応ですか？ 一応なんですか？ そうですか。それはもういいですから、もうちょっと前屈みになってもらえませんか？ それと、できれば両腕を寄せてもらえませんか？

あなたは知らないかもしれませんが、おっぱいの谷間って夢と希望が詰まった男のロマンなんですよ。

まあ、天使さんの小ぶりなおっぱいでは、腕を寄せても谷間はできないかも知れませんが、それがいいんです！

「だから、こむかいさんを見つけることができたなら、そしてほんの少しでも自我が残っていたら、どんなに怒られても何をされてもかまわないと思ってたんですよ」

へえ、そうですか。その割には僕をハメて取り引き材料を作ってましたけどね。

「それが実際に見つけてみたら、こむかいさんは平然としてるし、怒った素振りも見せないし、ちょっとびっくりしちゃって」

そうですか？ 本当にそうなんですか？ あなた忘れてませんか？ あなたは僕を見つけて最初に何をしたか、忘れてませんか？

僕の頭を首がなくなるほど思いつきりぶつ叩いたでしょう？

「だからね、魅了と催淫の力を使って、さらに凶暴性を上げて私を襲ってもらおうと思ったんです。懺悔のつもりで……」

え？ 何を言ってるんですか？ あれは取り引き材料を作るためじゃあ？

「でもやめました。だってこむかいさんの心が泣いていたから。僕はこんなことしたくないって、そう叫んでましたから」

ちよ、ちつとわけが分からないんですけど？ はい？ 僕の心が泣いていた？ いやいや、僕は超やる気満々でしたよ？ あそこで天使さんに止められなかったら、間違いなく襲ってましたよ？ 絶対にあんなことやこんなことをしてましたよ？

「でもさー、あたしほどの絶世の美少女から誘われて嫌がるなんてさー、なんか凄く頭にきたから、ちよつと苛めてやろうかと思ってねー」

ふう、と可憐な唇から妖艶なため息をつき、頬を薄桃色に染めた天使さんは、潤んだ瞳で僕を見つめている。その姿は、僕の勘違いでなければあからさまに誘っているように見えた。

ゴクリと唾を飲み込み、心の奥底から湧き上ってくる欲望の渦を感じる。でもなんとか自制できる。頭がくらくらするけど、さっきのような意識の混濁は起きていない。

「やっぱり凄い。もう魅了と催淫に耐性がついてる。こむかいさんって何者なの？」

驚いた表情の天使さん。いや、何者って聞かれてましても。ただ者です、としか言えません。

それにしても一体どういうことなんだ？ 話がさっぱり見えない。

「どういうことなんですか？ 話がよく分かりません。さっきのアルは僕と取り引きするための策じゃなかったんですか？」

「あはははっ、違いますよー。ちょっとからかっただけです」

カラカラと笑う天使さんは、嘘をついているようには見えない。じゃあさっきの契約は？ あれが取り引きじゃなかったの？ 僕に契約させて何か企んでいたわけじゃなかったんですか？

「だってさっきのサインは？」

「言っただでしょ？ 悪いようにはしませんよ」

まただ、またあの笑顔だ。さっき僕が契約した時に見せた、凄く綺麗で凄く可愛い笑顔。

嘘は……嘘はついていないような気がする。

「それと最後に、こむかいさんはこれより転生します。生まれ変わるんです」

急に真面目な顔をした天使さんが、僕にそう告げた。

転生？ 生まれ変わる？ いや、そんなことはどうでもいい。そんなことより、今の天使さんは超凛々しくて超可愛いです。

「この度のあたしの失態は、何度お詫びを申し上げても足りなくらいです。ですからお詫びの意味も込めて、天界で準備できる最高の肉体を用意させていただきました」

ああ、凛々しい。凄く可愛いです天使さん。さっきの事務的な凛々しさとは比べものにならない美しさです。

すみません、ちょっとでいいので顔を踏んでもらってもいいですか？

「願わくば、こむかいさんの新たな人生に幸あらんことを」

そう言つて、天使さんはゆっくりと椅子から立ち上がった。

踏んでもらえるんですか？　もしかして踏んでもらえるんですか？　ありがとうございます。本当にありがとうございます。

「じゃあね、こむかいさん。短い間だったけど……凄く楽しかったよ」

天使さんは満面の笑みでそう言つと、右手を天に向かって振りかざした。

「じゃあいつてみようかつ！」

天使さんの元気な掛け声が響き、そして振りかざした右手の人差し指から一筋の光が天へと向かつて迸る。

え？　楽しかったって……そんな、そんなこと言ってもらえたの、

僕は生まれて……初めて……。

「僕も……僕も凄く楽しかったです！ 女の子とこんなに話したのは初めてだったし、それに天使さんくらい可愛い人と話せて……僕にとって天使さんと過ごした時間は……最高に幸せな時間でしたっ！」

その僕の言葉に、天使さんは照れたように頬を赤くして、そしてはにかんだ笑顔で手を振っていた。

天が裂け、真っ白な世界に輝く光が降り注ぐ。その光は僕を包み込み、そして。

生まれて初めて自分の感情を人にぶつけた。そしてその僕の不器用な感情を、天使さんははにかんだ笑顔で受け止めてくれた。

間違いない。彼女は紛れもなく天使だ。誰がなんと言おうと彼女は天使だ。

天から降り注ぐ光は、次第に逆流を始めて僕の体を浮かせる。そして一気に天へと向かって噴き上がった。

「迷惑かも知れませんが……僕はあなたのことが……好きです」

生まれて初めて女の子に告白した。

きつと後悔すると思ったんだ。生まれ変わって、もし記憶が消えてしまうのだとしても、この僕の想いを伝えなければ、絶対に後悔すると思ったんだ。

天へと昇る光輝く奔流の中、僕の精一杯の告白は天使さんには聞こえなかったかも知れない。でもそれでいいんだ。言えただけで、告白できただけで僕は十分幸せなんだ。

次第に光へと意識が溶け込んでいく。そして消えてしまう間に声を聞いたような気がした。

『またすぐに会えるよ、あたしの可愛い二号ちゃん』

そんな、天使さんの言葉を聞いたような気がしたんだ。

ん？ 二号ちゃん？ なんだそれ？

そう、この言葉はまさに、僕の新たな人生においての悲劇の幕開けを暗示していたんだ。

取り憑かれてしまいました

頭がぼーっとする。ここはどこだろう？ 確か僕は死んじやって、天使さんから生まれ変わることを告げられて、そして……ダメだ、そのあとの記憶が全くない。

目に映る見知った天井。それほど古くはなく、かといって新しくもない木目調の天井。

「これは……僕の部屋の天井だ」

ここは僕の部屋だ。でも天井だけで判断したわけじゃない。匂いというか雰囲気というか、僕に馴染んでいる空気とでも言うのかな。友達がいない僕にとって、自分の部屋はなくてはならない大切な場所だった。ここが僕の居場所であり、ここしか居場所がなかったんだ。間違うはずがない。

「夢……だったのかな？」

真っ白な世界で出会った少女。凄く可愛くて、凄く綺麗で、それでいて透き通るように純真で。なのいきなり僕の頭を引っ叩いたり、口が悪かったり、やる気がなさそうだったり、急に真面目になったり、えっちなサービスをしてくれたり。

「本当に夢だったのかな？ 夢にしてはあまりにも……」

瞼を閉じるとはつきりと思い出せる。ずっと笑顔だった彼女のこ
とを。

とぼけたような笑顔。殺気を帯びた黒い笑顔。誘うような妖艶な
笑顔。申し訳なさそうに俯いた笑顔。カラカラと笑う素直な笑顔。

そして別れ際に見せてくれたはにかんだ笑顔。

夢と言うにはあまりにもはつきりと覚えていて、だけど夢のよう
に現実味がなくて。

ここは僕の部屋だ。でもそれは、いつものように学校から帰って
きて、いつものようにベッドで眠って、いつものように目を覚まし
たことになる。

それは彼女との思い出が夢だったことを意味している。

仮に夢だったとして、いつの間に眠ってしまったんだろう。今現在、
僕はベッドに横になっている。だとすると自分で横になったんだろ
うけど、ベッドに入った記憶も寝た記憶もない。

それにあの真っ白な世界、彼女は無間地獄って言ってたけど、そ
こで彼女と過ごした以前の記憶がどうもはつきりしない。

確か普段通りに学校の授業が終わり、そして校門を出て、それで
それで……ダメだ。下校から自分の部屋に帰って来るまでの記憶が

すつぱりと抜け落ちている。

「なんだか頭がぼーっとしてるし、まだ寝ぼけてるのかな？ 今何時なんだろう？」

部屋は明るくはないけど、閉じられたカーテンの隙間から日の光が射しているから、夜じゃないのは確かだ。

時計は……あれ？ 目覚まし時計はどこにいったんだ？

ベッドの上部、僕の頭の方には物が置けるようなベッドボードがあり、そこには目覚まし時計が置いてあるはずなんだけど、手を伸ばしても何も当たらない。

少し体を捻って……なんだ？ 体を擦ったら胸に何か弾力を感じる。まあいいか。

ベッドボードに視線を移したら、やっぱり目覚まし時計はなかった。

もしかして違う所に置いちゃったのかな？ でもそれは変だな。この場所が目覚まし時計の定位置で、移動させたことはないんだけど。

目を閉じて耳を澄ましてみる。しばらくすると、静寂の中にカチコチと小さな音が聞こえてきた。秒針の音が聞こえる所を見ると、やっぱりどこかに置き忘れただけみたいだな。

寝た記憶がないんだから、その時に寝ぼけて置き場所を間違えたのかも知れない。

カチコチという心地良い響き。目を閉じてしばらく秒針が進む音を聞いた。

時計は全部アナログで揃えている。昔から何故かアナログチックな物が好きで、特に壁掛け時計や目覚まし時計のカチコチという音が好きなんだ。

このまま目を閉じて秒針の音を聞いていると、なんだか二度寝して学校に遅刻してしまいそうだったから、とりあえず時間を確認するために、目覚まし時計を探そうと上半身を起こそうとして、そして部屋に違和感を覚えた。

そう言えばカーテンに違和感がある。僕の部屋のカーテンには、それほど遮光性はなかったはずだ。

ちょっとした目隠し程度の代物で、朝になるとカーテンをすり抜けた朝日が部屋全体に差し込み、照らしていたはずんだけど、それなのに、今は隙間から日の光が射し込んでいるだけで、カーテン自体は日光をほぼ遮断してしまっている。

それにカーテンだけじゃない。薄暗くてよく分からないけど、部屋中に違和感がある。

「それ以上に自分の声にかなりの違和感がある……」

なんなんだ？　どうなってるんだ？　ここが僕の部屋なのは間違いない。間違いないんだけど、全然違うような気がする。それに声が変わった。風邪を引いたとかノドを痛めたとかのレベルじゃない。

僕の耳がおかしくないのなら、僕の口から出ているのは男の声じ

やない。

なんだろう。寒気がする。部屋に違和感を覚えたり、声が変わってしまったり。これは、これはもしか……。

「……力、カーテンを開けよう。お、落ち着け、まず落ち着け。深呼吸、深呼吸、すー、はー」

深呼吸をして心を落ち着かせようとしたけど、心臓の鼓動は速くなる一方で、息が次第に荒くなっていく。

背筋を冷たいモノが駆け上り、体が勝手にガタガタと震え始めた。

恐怖が心を支配していく。

こ、怖い、怖くて堪らない。怖くて目を開けていられない。自分の心臓が耳元で鼓動を刻んでいるように感じ、息が苦しくて上手く呼吸ができない。

でも勇気を振り絞ってカーテンを開けるか電気をつけるかしないと、いつまでもこの状態のままだ。

ゴクリと唾を飲み込み、一気に掛布団を剥いで起き上った。

「いたたたたたたっ」

ひいつ、誰かが僕の髪の毛を引っ張ってる！

上半身を半分ほど起こしたような状態で、何者かに髪の毛を引っ張られて動けなくなってしまった。

「誰っ？ 誰がいるのっ？ あうっ？ いたたたたっ！」

髪の毛を引っ張っている何者かに向かって、叫びに似た声を発したものの、恐怖のあまりに声が震えてしまっている。

怖くて怖くてどうしようもない。でもこのままじゃいけない。

掴まれている髪を振りほどこうとしたら、さらに髪の毛を強く引っ張られて痛いのと怖いので、もうわけが分からない。

「ねえねえ、それ自分の髪を手で踏んづけてるだけだよー？」

「やめてくださいっ！ 成仏してくださいっ！ 僕を祟った所で面白くもなんともないですからあっ！ なんまんだぶういたたたたっ！」

僕の髪の毛を引っ張っている何者かは、僕が暴れるほどに強く引っ張る。

やっぱりだ。恐れていたことが現実となってしまった。

違和感のある部屋。自分とは違う声。髪を引っ張る何者か。間違いない。

これは間違いなく怪奇現象だ。霊だ、お化けだ、祟りだ。

僕は苦手なモノがたくさんあるけど、特にイモムシとかゲジゲジとかお化けとかが大嫌いだ。あ、あとセミも苦手。

正直言って、お化けよりもイモムシとかゲジゲジとかセミとかの方が嫌いだけど、今はお化けだ。今はお化けが怖い。

でも、もしここにイモムシがいたら、お化けとどっちが怖いかな？ うーん、やっぱりイモムシかなあ。

ダメだ、イモムシのことを考えたら余計に体が震えてきた。考えるのよそう。それに今はお化けをなんとかしないと。

このままだと取り憑かれて殺されてしまう。お化けに人間の攻撃が通用するとも思えないけど、金縛りとかで動けなくなる前になんとかするしかない。

でも金縛りって、お化けが出る前に起きるものなんじゃないのかな？ テレビの怪奇特集とかでは、大概お化けが出る前に金縛りになるんだけど、お化け初体験だからわかんないなあ。

それとお化けは嫌いだけど、怪奇特集はつい見ちゃうんだよねえ。怖いもの見たさってやつ？

頬を冷たい汗が伝い、心臓はさらに激しく鼓動を刻んでいく。

「ねえねえ聞こえてないのー？ それ自分の手で自分の髪を踏んづけちゃってるだけだってばー。まあ、いきなりこんなに髪が長くなったらびっくりするだろうとは思ってたけどさー。なんか驚く方向性を間違ってるない？」

目を閉じて数度深呼吸をしたのち、精神を集中させて僕の心の奥底に眠っているであろう小宇宙へと呼びかけ、でも答えは返ってこなかったけど、自分の持てる力を全て右手に込めて目を見開いた。

たとえ攻撃が効かなくても、とにかく掴まれている髪をなんとかしないと身動きが取れない。

「とおりやあああつ！」

振り向き様に右手を後方へと向かって振り抜いた。

「あれ？ 誰もいな……ひいいいっ！」

振り向いた先には誰もいなかった。あるのは薄暗闇の中に見えるベッドボードだけ。その代わりに僕の肩にファサリと何かが乗り、溜まらず悲鳴を上げてしまった。

「な、なに？ なんなの？ し、瞬間移動？」

「あー、だからそれは二号ちゃんの髪だってばー。まいったなー、全然聞こえてないねー」

振り向いた先には誰もいなかったけど、確実に肩に何かが乗った。恐らくお化けが瞬間移動したんだろう。なにせ相手はお化けだ、なんでもアリだ。

重さはほとんど感じない。でも何かが乗っている。

恐怖のあまりにノドがカラカラに乾き、飲み込める唾がない。それでもゴクリとノドを鳴らし、恐る恐る視線を肩へと移した。そして目に映った光景は。

「ひいっ！ ひいいいっ！ 髪っ？ 長い髪の毛があああつ！」

「だから言ってるじゃん。それ二号ちゃんの……って聞こえてないね」。ていうかさー、無間地獄に一人で六年も過ごしたのにお化けが怖いってさー、おかしくない？ まあ怖がりな方が可愛いけどさー」

肩に乗っていたのは長い髪の毛。部屋が薄暗いせいで色まではわからないけど、間違いなく人間の髪の毛だ。しかも長い髪の毛。

間違いない。僕は今まさに、お化けに取り憑かれようとしている。

勝ちました

長い髪の毛。これでほぼ確定だ。お化けは女性の霊で、きっと怨念の類だ。男の人に捨てられたとかそんな理由で男を恨んでるんだ。

それがなんでまた僕なんかに悪さをするんだ。僕は彼女はおろか、女の子の知り合いすらないのに。

悪さをするならせめて女の子にモテる人にしてよ。

それはそうと、悪霊は既に僕に取り憑いてしまっているように感じる。だって肩に乗ってるんだもの。

「はわ、はわわわっ、に、逃げっ、逃げないっ」

上半身を起こしていた状態から、震える体に鞭を打って四つん這いになり、そのままベッドから降りようとして手が滑り、勢いよく転がり落ちた。

痛みを感じる暇もなく、顔の上に髪の毛がファサリと舞い降りる。

「ちょ、危ないよー。大丈夫？ 怪我はない？ ってその体なら問題ないかー。なにせあたしをモデルに生み出した最強ボディーだもんねー。でも心配なものは心配だよー」

「ひいっ、ひいっ！ た、助けっ、助けてくださいっ！
なんまんだぶっっ！」

ジタバタと暴れてなんとか四つん這いの体勢に戻り、部屋の入り

口であるドアへと向かってカサカサと移動を開始した。でも手足が震えてなかなか前に進まない。

「ダメだ。全然聞こえてないや。まあ、そのうちおさまるだろうし、しばらく放っておくかなー」

そこでさらなる恐怖が僕を襲った。

進もうとする度に胸が震える。手を前に出すとプルン、足を前に出すとプルンと胸で何かが震えている。

「こ、今度はなんなのっ？ ま、まさかっ？ まさか胸に悪霊が溜まったのっ？ はわ、はわわわっ」

「凄い発想力だねー。胸に悪霊が溜まるってなんなのー？ ドベちゃん初めて聞いたよー」

もはや恐怖で前へ進めず、泣きながら右手で胸元をまさぐってみた。

ふにふにとした柔らかな感触。しかも二つもある。

悪霊が体の一部に溜まるなんて聞いたことがなかったけど、実際に僕の胸に溜まっているんだから現実を直視しないといけない。

は、早く、早くなんとかしないと、胸に溜まった悪霊が全身に広がって体に乗っ取られてしまう。

「おっばいはあたしよりおっきくしてみましたー。見た目の可愛さはなんと三倍！」

四つん這いの体勢から、フローリングの床にお尻をついて上半身を起こし、涙をボロボロと零しながら両手で胸の悪霊溜まりを驚掴みにした。

怖い。凄く怖いけど、今は怖いと言ってる場合じゃない。今の状態はかなり危険だ。もはや時間との勝負だ。

「ちょ、ちょっと二号ちゃん？ 自分のおっぱいを掴んで何しようとしてるの？ ドベちゃん興奮しちゃうなー」

完全に体に乗っ取られる前に、悪霊を体外へと追い出さなければならぬ。かといって僕は悪霊の追い出しかたなんて知らない。だけれど何もしないわけにはいかない。

考え付いた方法の一つ。胸に悪霊が溜まっているのなら、押し出すように揉んだり握ったり引っ張ったりするしかない。それでダメならもう僕にはどうしようもない。

「で、出てけー、うう、出ていってくださいー」

「か、可愛いー。超える可愛いー。ドベちゃんもう止めるのやーめたー」

ふにゅふにゅとした流動的な胸の二つの悪霊溜まりを、前方へと押し出すように両手で握ったり揉んだりしてみる。でもダメだ。握って押し出すとふにやりと形が変形するけど、手を離すとプルンと元に戻ってしまう。

何度繰り返しても同じ、悪霊は出ていってくれない。しかも最悪

なことに、悪霊は僕の体内に浸食を開始してみたいだ。

「あう、ふあ、……か、体がジンジンする。こ、このままだと乗っ取られちゃう」

「き、気持ちいいのかにや？　どうなのかにや？」

初めはなんともなかったのに、揉む度に全身に電気のようなものが走り始めた。声もそうだ。自分の意志とは関係なく、甘ったるい変な声が出始めている。

いよいよ危険な状態だ。怖くて本気で押し出せなかったけど、もう手加減なんてしている余裕はない。

こうなったら全力でいくしかない。そして命をかけた僕と悪霊との根競べだ。

両手に力を込めて胸の悪霊溜まりをぎゅっと掴む。そしてグイグイと押し出した。

「あく、ふあ、んあ……で、出てけ、出てけー、ふく、ひゅん……ら、らめら、まけひゃいひゅらよう」

揉めば揉むほど、押し出せば押し出すほど全身を駆け巡る電気が強く大きくなり、勝手に口から漏れる甘い声が大きくなってくる。しかも意識まで朦朧としてきた。

これは浸食がかなり進んでいる証拠だ。しかも状況は悪化している。どうやらこの方法では悪霊を追い出せないみたいだ。

もはやこれまでかと思った時、あることに気が付いた。

さっきまではなんともなかったのに、悪霊溜まりを押し出し始めてから異変は徐々に、でも確実に始まっていたんだ。混乱していた僕は、そのことに気が付くまでに多少の時間がかかってしまった。

ひとときわ強烈な電気が走る部分がある。それは悪霊溜まりの先端。悪霊を押し出そうとして、着ているパジャマに先端が擦れると、体が跳ねてしまうような電撃が全身を駆け巡る。

これはもしかや悪霊の……弱点？

確証は何もない。しかもパジャマに擦れるだけで体が跳ねてしまうほどの衝撃。もし、これを直接攻めたりすれば、悪霊が出ていく前に僕がおかしくなってしまうかもしれない。でももう他に手段がない。

こうなったらやるしかないんだ。

パジャマの上から恐る恐る悪霊溜まりの弱点を探してみる。

「ひゃあんっ？」

「に、二号ちゃん？ ましやか……ごくり」

あった。柔らかな膨らみの中に小さな硬い物体がある。でも凄い衝撃だ。ちよつと触れただけで体が大きく跳ね上がった。でもこれで確信を得た。

悪霊は霊体だ。だから胸の悪霊溜まりは柔らかな流動体なんだ。でも先端だけは固体化している。固体化しているということは、ひよっとしたら物理的な攻撃が有効なのかもしれない。しかも触れただけである衝撃。

やっぱりここが弱点なんだ。

「ま、負けない……」

目を閉じて深呼吸をして、これから僕の体を襲うであろう強烈な衝撃に備えて精神を集中させる。

「僕は負けないっ！ 勝負だ悪霊っ！」

目を見開き、二つの悪霊溜まりの先端の、恐らく悪霊の弱点であろう二つの小さな固体を、パジャマの上から勢いをつけて、でも怖いからそっと触れる。

「ん、うく……んあ」

「うわっ、そ、それはちよっとえろすぎるよー。は、鼻血が……」

ピクンと体が震え、床からお尻が浮き、そしてぺたんと床につく。

どうしよう。どうしたらいいの？ 悪霊を責めているのに、ちよっと……気持ちいい。

これはもしかして、悪霊が僕を惑わしているの？

もし仮に「ここは弱点じゃないよー、全然違うよー、触ると気持ち

ちいだけだよー」って僕に勘違いさせるために、感覚を狂わせているのだとしたら？

あ、危なかった。もう少しで悪霊の罠にまんまと引っかかってしまっ所だった。

僕の間を狂わせてまで、責められることを嫌がるということとは、もう迷う必要はない。怖がってる場合じゃない。責めあるのみだ。

悪霊溜まりの弱点である先端の硬い部分を指で摘み、目を閉じて深呼吸をする。

「あ、悪霊退散っ！」

掛け声と共に引っ張った。

「ひうう！ いひゃっ！ いひゃいっ！」

「うわー、うわー」

先端から痛みが走り、お尻が浮くほどに体が跳ねる。

い、痛みでどうにかなりそうだ。でもまだだ。僕は負けない。諦めない。

以前の僕なら諦めていただろう。以前の僕なら生きること固執しなかっただろう。でもさっきから頭にチラつくんだ。あの笑顔が僕を奮い立たせるんだ。

『願わくば、こむかいさんの新たな人生に幸あらんことを』

天使さんの声が頭に響く。天使さんは夢だったのかもしれない。でも、僕にはそうは思えない。いや、夢だっていいんだ。そんなのどうだっていいんだ。

天使さんは僕の心の中で確かに生きている。僕の人生の幸せを願ってくれている。こんなダメな僕を信じてくれている。

僕は負けない。絶対に負けない。死んだって死なない。殺されたって死なない。だから悪霊なんかに負けてやらない。

なんとって僕には最高に可愛い守護天使がついているんだから！

「いひゃい、いひゃいよう……はうう」

「痛いならやめればいいのに。痛いならやめればいいのに！でもそれ超える可愛い！頬を染めて痛みに耐えながらとか！なにそれ超やばいんだけど！」

何か変だ。凄く痛いはずなのに、何かが変だ。

痛みと共に、次第に走り始める電撃のような何か。それが徐々に大きくなっていき、背筋が勝手に弓なりに反り返る。

「んんっ、あえ？　らに？　らんかへんらよ？　ひううっ」

「ど、どうしよう。二号ちゃん変なスイッチが入っちゃったみたいだよー。これ初めてで最後までいっちゃうんじゃないかなー？　ドベちゃんドキドキするよー」

ビクビクと小刻みに痙攣する体。しかも先端から走る強烈な電撃が、まるで連動するかのように下腹部をジンジンとさせて、熱を帯びながら疼き始めた。

太ももを摺り寄せて堪えようとしたけど、仰け反っているせいで不可能だった。それでも下腹部の疼きを気合で堪え、なおも先端の固体を引っ張る。

でももう限界が近い。背筋は既に目いっぱい反り返ってしまったていて、もう逃げ場がない。それに体の内部を駆け巡る強烈な電撃と、全身を震わせる激しい痙攣が、朦朧として消えかかっていた意識を断ち切るうとしている。

でも、それと同時に何かが体外へと出ようとしているのも感じる。そしてそれは悪霊溜まりの先端ではなく、下腹部から感じていた。

「あうっ？ らめらっ！ ひうっ、らめらよう、らんかへんらよう、んああっ！」

「どきどき、どきどき」

口から勝手に漏れ出す甘い声。何かが下腹部に集約し、心に言い知れない不安と恐怖を感じる。さらに体が痙攣しているせいで満足に呼吸もできず、目から勝手に涙が溢れてくる。

怖い、凄く怖い。まるで自分が自分じゃないみたいだ。

でももうちょっとだ。もうちょっとで悪霊が体外へと逃げ出す。僕が今感じている不安と恐怖は、きっと僕の問題と同化しかかっていた悪霊の感情なんだ。弱点を責められて逃げ場をなくし、下腹部

へと集約してるんだ。

「ど、どうしよう。やっぱりいきなりこれは刺激が強すぎるかなー？止めたほうがいいのかなー？それにトラウマになったら後々困るしなー」

あと一息だ。あと一息で悪霊に打ち勝てる。

「ら、らめえっ、らにかくりゅっ、あくりょうがひたからでひゃううっ！ひゃああっ、おかひくなりゅう！」

「あー、迷うなー。本音を言つとえろかわすぎて止めたくないんだけどなー。」

い、息が、意識が……もう自分がどういいう状態なのかわからない。

「あー、だめだ。やっぱり可愛いなー。犯罪級の可愛さだなー。止めたくてもあたしのソウルが止めるなってシャウトしてるー。まあいつかー、どうせ気絶しちゃうだろうし、あとで適当に言いくるめちゃおうー。いえーい」

も、もう限界だ。もう意識が持たない。こ、これが最後の抵抗になる。

視界が白一色に染まる中、最後の力を振り絞って悪霊の弱点である固体を摘み上げた。

「みやつ、みゃあああああっ！んああああっ！うりゅうううっ！」

「うわー、超えろいよー。さすがは性感帯の感度を三倍増強しただけあるねー。しかも覚醒状態では制限なしだからねー。……ちよつとやり過ぎちゃったかな？」

ビクンツと体が強烈に跳ね上がり、何かが下腹部から解き放たれた。恐らく悪霊だろう。

一度に逃げ出すことが不可能だったのか、悪霊の放出は何度かにわけて連続で続き、放出される度にビクビクと体が痙攣する。

放出が終わってからそのままの姿勢で呆然とし、しばらくして硬直していた全身の力が抜け落ちて床に倒れ込んだ。

勝った。

僕は悪霊に打ち勝ったんだ。僕の人生において、勝利の余韻に浸るなんて初めての経験だ。でもその勝利と引き換えに、もう指一本動かせないけど、そんなのどうだっていい。

心には打ち勝った喜びと達成感が広がっていく。

「下界に降りていきなりいいものを見せてもらったにゃー。興奮してちよつと鼻血が出ちゃったにゃー。思わず動画撮っちゃったにゃー。これは宝物だにゃー」

薄れゆく意識の中、傍で天使さんの声が聞こえる。幻聴かな？

「疲れちゃったねー。初めてでいきなりだもんねー。ゆっくり休むといいよー、二号ちゃん」

ぼやけた視界の中に、薄っすらと天使さんの笑顔が映った。そして僕の頭を優しく撫でながら、もう休んでもいいと告げてくれた。

また夢なのかな？ 夢かもしれないな。でももういいんだ。もう僕は大丈夫だ。天使さんはいつだって僕の心の中にいるんだ。

心に広がる安堵と、そして癒されるような安心感。きっと天使さんの笑顔を見たからだ。

ありがとう天使さん。ちょっとだけ休みます。

そう心の中で呟き、深い眠りに落ちた。

姉ができました

心地いい感触。柔らかくて、それでいてとてもいい匂いがする。まるで日向ぼっこをしている猫が添い寝してくれているような、そして僕をぎゅっと抱き締めてくれているような、そんな感じがする。それに、とても甘い香りが僕を夢の世界へと優しく誘ってくれる。

「起きたのかにゃ？」

耳元で囁かれた女の子の可愛らしい声。どこかで聞いたことがあるような声だ。

薄目を開けようとして、眩しさのあまりに閉じてしまった。どうも朝のようだけど、この心地良さには耐えられない。もうちょっとだけ寝よう。

「まだ……眠いです。もうちょっとこのままで……」

恐らくは僕を抱き締めてくれている声の主に向かってそう言っ、て、柔らかで心地いい何かに顔を埋めた。

その柔らかかな何かは、そんなに大きくはないけどプニプニしていて、猫の肉球をもっと柔らかで温かくしたような、そして顔を埋めると凄く気持ちがいい小さな膨らみだった。

「いいよー。時間はたくさんあるからねー。それにしても寝ぼけてる二号ちゃんも素直で可愛いにゃー。目が覚めてからもそうだといんだけどにゃー」

そう言って僕をぎゅっと抱き締めてくれた声の主は、優しく頭を撫でてくれた。

どこかで聞いたことがあると思ったけど、この声は天使さんの声だ。なんだかやけに優しい気がするけど、間違いない。

そうか、これは夢か。

きっと、僕はもう一度天使さんに会いたいんだ。会って、そしてこうして抱き締めて欲しいんだ。

ごめんなさい天使さん。僕の不純な想いに付き合わせてしまっても夢なんだからいいよね。

「それにしても、二号ちゃんは本当におっぱいが好きだにやー。こむかいさんだった頃も、あたしのおっぱいに興味深々だったもんにやー」

ん？ おっぱい？ それはもう好きですとも。やはりおっぱいは大き過ぎず小さ過ぎず、そして形がいいモノがベストですが、僕は敢えて小さ目なのが好きです。……って、あれ？

「これ……夢、ですよね？」

「おはよー二号ちゃん。二度寝はもういいのかにやー？」

はつきりと聞こえる天使さんの声。夢じゃ………ないの？

驚いて目を開けると、目の前は真っ白。状況を理解出来ずにしばらくそのまま呆然として、我に返って視線を上げると、そこにはここにこと微笑む天使さんの顔。

そこでようやく理解した。目の前の真っ白なモノは、天使さんが着ている白いワンピースだ。そして天使さんは僕を抱き締め、僕は天使さんの胸に顔を埋めている。

まあ、埋めるっていうほどの大きさはないんだけど、問題はそこじゃない。

僕は……僕は女の子のおっぱいに顔を埋めていたのか？ なんて嬉し、じゃなくてなんてことをしているんだ僕は！

「う、ごめんなさい！ す、すぐに離れますから！」

謝っても許してはもらえないかも知れないけど、謝らないよりはいいはずだ。

とにかく謝って、そして急いで離れようとした。だけど体が動かない。いや、動くことは動くんだけど、天使さんにきつく抱き締められていて、まったく身動きが取れない。

「ドベちゃんは、おはよーって言ったんだよー。そしたらなんて言うー？」

もがいている僕を抱き締めている天使さんは、ゆっくりと僕に顔を近づけて、そしておでこをくっ付けた。

ち、近い！ 近過ぎる！

目の前に天使さんの可愛らしい顔がある。ちよつとでも動くと、僕の唇が天使さんの唇に触れてしまいそうだ。

「おはようのご挨拶もできない悪い子にはー、気持ちいいお仕置きをしちゃうよー？」

にやりと妖艶な笑みを作り、僕を見つめる天使さん。顔は笑顔だけど目は本気だ。まるで獲物を狙う肉食獣のようだ。

何かなんだかわけが分からないけど、とにかく挨拶をしないと途轍もなく大変なことになるそうなことだけは分かった。

でも……気持ちいいお仕置きってなんだろう？ 期待に胸が膨らんで……って何を考えてるんだ僕は！ 天使さんは僕をからかっているだけだ！ 「こむかいさんのえっち」と言われて引かれるのがオチなんだから、ここはしっかりと挨拶するべきなんだ！

でも、気持ちいいお仕置きってどんなのかなあ。ちよつとイケナイ感じなのかなあ。うふふ。

「お、おはよう……ございます」

気持ちいいお仕置きという言葉に囚われて、色々と妄想を膨らませつつも「こむかいさんはすけべだねー」と言われて引かれるのが怖くて、結局挨拶をしてしまった臆病な僕。

だってほぼ百パーセントからかわれているだけだろうし。

「はい、おはよー。二号ちゃんはお利口さんだねー。ご褒美におは

ようのちゅう」

すっと天使さんの顔が動き、そして僕は全力で仰け反った。別にかわそうと思っただけじゃない。条件反射で体が勝手に動いてしまっただけだ。

だって女の子とこんなに密着したのは初めてなんだもの。凄く嬉しいけど、それ以上にどうしたらいいのかわからないんだもの。

無意識に勝手にかわしちゃったんだもの。僕のバカ。

しかも無意識だったせいで必要以上に仰け反ってしまった上に、天使さんから抱き締められて固定されているから、体が逆くの字になって、腰が、腰が折れてしまう。

「ぐえっ」

そして変な声が口から漏れた。

「ちっ、ちゅうはまだ早かったかー」

笑顔のまま舌打ちした天使さんが、ススッと引き下がる。

ああ、何故……何故かわしてしまったんだ。天使さんは金髪だし目が青いし、きっと外国の風習とかで朝は気軽にキスをするんだ。でも一度かわしたんだから、多分もう二度とキスをしてくれないだろう。

女の子とキスをする最初で最後のチャンスを棒に振ってしまった。ああ、僕のバカ。

しかも抱き締めてくれていたのに、今は離れてしまっている。それはそうだ、挨拶したただけなのに、その行為を拒否されたんだ。怒って当然だ。

「どうするー?」

後悔の念にさいなまれていると、何事もなかったかのように天使さんが笑顔で声をかけてくれた。ああ、なんて優しい人なんだろう。やっぱりこの人は天使なんだ。

でも、どうするって何をどうするんだろう?

「どうするって何がですか?」

「んーとねー、せっかく二人でベッドに寝てるんだからさー、もうちょっといちゃいちゃする? それとも起きる?」

唇に指を当てた天使さんは、誘うような目つきで僕を見つめ、着ているノースリーブのワンピースの肩に手を当てると、スルリとずらした。

透き通るように極め細やかな白い肌と、そしてはだけられた胸元と小さな二つの膨らみ。

朝から……朝からなんて素晴らしい光景を……。ん? ベッド?

そういえば僕はベッドに寝ている。そして何故か天使さんが添い寝している。気が動転して気が付かなかったけど、これは一体どういうこと?

ちよつと待つて。え？ あれ？ ここに天使さんがいるってことは、あの真っ白な世界の出来事は現実ってこと？ それとも僕はまだ寝ていて、これは夢？ あれ？ はい？ えーと、まてまて、いやいや、えーと……。

「これは夢ですか？」

「違うよー」

そうか違うのか。じゃあこれは現実ってことで、だとすると、えーと……。

「悪霊は？」

「あー、悪霊ねー。二号ちゃん凄かったよー。もうね、一流の退魔師が真っ青になるくらいズバーって退治しちゃったよー。ちようかつこよかった」

そ、そっか。僕が退治したのか。そう言えば、おぼろげに退治したような気がしないでもない。それに格好いいとかって、えへへ、照れるなあ。

そうじゃない。そうじゃなくて、あの悪霊も夢じゃなかったの？ よくは覚えていないけど、現実だったってこと？ だとすると、やっぱり僕は……死んでるってこと？

「ぼ、僕……やっぱり死んでるんですか？」

体が震える。勝手に涙が溢れてくる。

「ど、どうしたの？　お、落ち着こうよ、まず落ち着こう、ね？」

驚いた天使さんが、再度僕を抱き締めて優しく背中を擦ってくれる。

「い、今さら後悔……しても、遅いです……よね。し、死んだって何も感じなかったのに……今さら後悔したって……」

死んだってどうでもいいと思っていた。生きてたって僕には何もないと思っていた。

学校に行っても話す相手はいない。でも嫌われているんじゃない。僕は嫌われてすらいなかった。

そこに僕がいることすら気づいてもらえない。空気みたいな存在。

家に帰っても両親は仕事。一人で食事をして、一人で部屋にこもる。両親が仕事から帰って来ても、会話なんてない。きつと疲れているだろうと思い、僕から話かけることもない。

だけど聞いたんだ。父さんと母さんが話していることを。

優は育て方を間違えたって、そう言っていたのを確かに聞いたんだ。

僕は真面目に学校に行つて、そして部屋に閉じこもるしか他に方法がなかった。誰にも迷惑をかけないように、ただじっとしていること以外、他の手段が思いつかなかった。

だって、迷惑をかけないことと真面目な所を取ったら、あとはもう本当に何も残らなかったから。

でも、あの真っ白な世界で天使さんに会って、凄く楽しい時間を過ごして、そしたら生きるのが楽しみになった。

心の中に生きる天使さんさえいてくれれば、僕は頑張れたんだ。寂しくて、寂しくて寂しくて、どうしようもないくらい寂しかった僕に笑いかけてくれた天使さんが、凄く素敵で、優しくて、可愛くて、生きるのが楽しみになったんだ。

でも僕は死んだ。ここに天使さんがいるんだから、僕は死んだままなんだ。

死んだことは後悔していない、なんて思っていた自分をぶん殴ってやりたい。

「い、今頃後悔したって……死んじやったものはしょうがないですよ。天使さんは……こんな僕の傍に……いてくれますか？」

涙が止まらない。こんなこと天使さんに言っても困らせるだけなのに。

天使さんにだって都合があるんだ。こんないじけたヤツの傍にいる時間なんてないはずだ。

きっと天使さんは、寝てしまった僕が起きた時に悲しまないように、起きるまで傍にいてくれたんだ。

天使ってみんなこんなに優しい人達ばかりなんだろうか？ だと

すると、天国つて凄くいい所なんだろうなあ。

でも僕はきつと天国へは行けない。あの真つ白な世界に落ちたのだつて、本当は僕のせいなのかも知れない。

天使さんに出会つて、天使さんの笑顔を見て、そして天使さんに抱き締められて、気づいたんだ。

僕は人を殺した。僕は大きな罪を犯した。僕は、僕自身を殺したんだ。生きたいって思つて、大切な人が出来て、その人が傍にいてくれて、初めて気づいたんだ。

しかも結局生まれ変わることもできなかった。

「ほほう、なんで泣き出したかと思えば、悪霊の次は死んだままだと勘違いしたわけか」。このマイナス思考の壮大な勘違い屋さんめー。ふむふむ、二号ちゃんはなかなか手強いねー」

僕の背中を優しく撫でてくれている天使さんは、やれやれといったように小さくため息をつく、僕をゆっくりと抱き起した。

ちょっと気になったんだけど、やっぱり天使さんは力が強いのかな？ 天使さんは身長も低いし体も細い。それで僕を簡単に抱き起すつて……まあ、百キロ以上は確実にある机と玉座を笑顔で背負っていたんだから、力が強くて当たり前だけど。

抱き起されて、ベッドの上に座らされて頭を撫でられる。それでも泣き続ける僕を天使さんはぎゅっと抱き締めてくれた。

「生きてるよ」

「え？」

耳元で囁かれる天使さんの優しい声。

「二号ちゃんは生きてるよ。そして今日から新しい人生がスタートするんだよ」

生きてる？ 新しい人生？ じゃあなんで……。

「天使さんがここにいるんですか？」

「そんなのあたりまえじゃーん。だってドベちゃんは今日から二号ちゃんのお姉ちゃんだもん」

僕を離れた天使さんは、満面の笑みを浮かべて僕の頭を撫でながら、さも当然だと言うように、とんでもないことを口走った。

はい？ お姉ちゃん？ 誰が？ 誰の？

「あたしは今日から小日向メイ。こむかいゆんとは血の繋がらない姉だよ」

あー、ちょっと待って下さい。あの、今は関係ないことも知れませんが、自分でちゃんと小日向って言ってるのに、なんで僕はこむかいゆんなんですか？ そこは突っ込んじゃダメなんですか？
ダメなんですか？ そうですかわかりました。

じゃあ聞きましょう。

「僕には姉なんていませんよ。だって一人っ子ですから」

そうそう、僕は一人っ子です。そしてこんな可愛い姉なんかいた日には、それはもう生きるのが楽しくてしょうがなかったでしょうね。

そしてもう一つ。どう見てもあなたは妹でしょう？ 僕は一応高校生ですよ？ 十八歳ですよ？ あなたは頑張っても中学一年生くらいでしょう？ 見ようによっては、いや、見ようによらなくても、小六って所が無難でしょうよ。

そしてさらにもう一つ。純日本人の僕の姉が金髪碧眼って、それはいくらなんでも無理があるでしょう。

あ、そうか、だから血の繋がらない姉か。なるほど……って納得しちゃってもいいんですかこれは？

「いることになってるんだよー。それにあたしが引き取られたのは、こむかいゆんが交通事故で死んじゃったあとだしねー」

はい？ あー、えーと……はい？

「可愛い弟を亡くして、お姉ちゃんそれはもう悲しんだよー。ちよう泣いたねー」

え？ あ、はい。それはどうも。……あれ？ でも引き取られたのは僕が死んだあとって……それって悲しくないんじゃないですか？ ってか面識ないですよねそれ？

両手で目元を擦り、えーん、とか言いながら物凄くわざとらしい

泣きまねをする天使さん。

さっぱり、さっぱり意味がわからない。

「息子を失った両親も、それはそれは悲しんでー、そして宝くじを買ったんだねー」

え？ 父さんと母さんが悲しんで、宝くじを買った？ え？ それ悲しんでないですよ？ あれ？ 悲しんでるの？ 悲しんで自暴自棄になって宝くじ？ パチンコとか競馬とかじゃなくて？

それって自暴自棄じゃなくて、夢とか希望とか淒く抱いてませんか？

なんだか微妙に納得がいかない。

「そしたらー等前後賞合わせて三億円が二つも当たっちゃってねー。でも悲しみは消えない。だからパパはママが止めるのも聞かないで株に手を出しちゃってー」

前後賞も含めて二つ？ はい？ しかも株に投資？ なにやってんだよ父さん！ 六億で満足しててよ！

それに株に手を出したのは悲しいんじゃないかって欲にまみれただけでしょ！ やっぱり僕が死んでも悲しんでないじゃないか！

「そしたら株が大当たりでー、人生十回やりなおしても使いきれないお金が手に入っちゃったわけだー」

うわー、すごーい。人生十回かー。僕のお小遣いは一ヶ月三千

円だったけど、もしかして一万円くらいはもらえるようになるのかなー？ あ、でもダメか。僕は交通事故で死んじやったわけだし…あれ？ じゃあ今ここにいる僕は？

「そんなこんなで、あぶく銭で豪遊しながら世界旅行を楽しんでいたパパとママがー、ヨーロッパの片田舎で花売りをしていた美しい姉妹と出会ってー、聞けば孤児だっていうからー、ほろりときたママが養子として引き取ろうとパパに言っただけー」

え、ええ話やなーい。

「姉の名はメイティナ・ミカエリス。そして妹がユウティナ・ミカエリス。それで引き取られて名前が変わってー」

ふむふむ、それでそれで？

「小日向メイがあたし。そして小日向ユウが二号ちゃん。つまり小日向ユウは元こむかいゆん、ってなわけだよー」

「へー」

そっか、天使さんは僕の家の子になったわけか。なるほどー。

それにしても、うわー、いいなあ。美少女姉妹と同棲とかって、これ男の夢ですよー。しかも血が繋がらないヨーロッパ系の美少女とか、これどこのエロゲーの設定ですかーって感じですよー。それにもうこれリア充を超えちゃってますよねー。

いいなあ。いいなあ。

あれ？ で、僕は？

「どうこの脚本、完璧でしょー？ こむかいさんが転生するための準備期間中に、仕事そっちのけで考えたんだからー。えへへー、褒めて褒めてー」

仕事そっちのけはダメですよ。って脚本ってなに？ それに僕は？僕は交通事故で死んだんですよね？じゃあ今ここにいる僕は？それと天使さんの妹のユウティナちゃんは何処？

ちよつとね、ちよつとだけね……凄く嫌な予感がするのは気のせいですよ？

背筋を冷たい汗が流れる中、笑顔の天使さんがぴょんつとベッドから飛び降り、壁に立てかけてあった姿見をひょいと持ち上げ、トコトコとこちに歩いてくる。

やっぱり天使さんは凄いなあ。自分より大きな姿見を軽々と持ち上げるんだから。この人の強大な力はどこから来るんだろう？

まあ、それは今は気にしないことにして、姿見を持ち上げたまま、ぴょんと軽やかにベッドに乗った天使さんが、にこにこ嬉しさの頂点でも超えたかのような最高の笑顔で口を開いた。

「それでは張り切っていつてみましょー。これがあたしの妹のユウティナ・ミカエリス改め、小日向ユウちゃんでーす。わーい」

そしてストンと姿見を僕の前に置いた。

「どうどう？ ちょうかつわいいでしょー。天界であたしより可愛

い天使なんていないからねー。そのあたしより可愛いんだから、二号ちゃん是世界一可愛い女の子だよー。やったねー」

鏡に映っている黒髪で蒼い瞳の美少女が、僕を見つめて困惑したような表情を浮かべている。

え？ これ……だれですか？

女の子になりました

「ねえねえ？ 凄く可愛いと思わない？」

目の前に置かれた姿見。そしてその姿見に映る二人の少女。

僕の両肩に手を置き、僕の顔の横から姿見を覗き込む天使さん。
でも鏡に映っているのは見知らぬ少女と、その少女の両肩に手を置き、少女の顔の横からこちらを見ている天使さんの姿。

これは一体……どうということなの？

窓から差し込む光に反射して、キラキラと輝く天使さんの金色の髪。そして、その金色の輝きを吸い込んでしまうような、闇のように深く、それでいて暗黒に輝くといった矛盾を感じる長く美しい黒髪。

僕を見つめる黒髪の少女の瞳は、鏡の中の天使さんと同じ、青空のように澄んだ綺麗な青。

似ている。髪の色が違い過ぎるから一見全然似てないように見えるけど、よく見ると顔の輪郭や線の細さ、それに雪のように白くきめ細やかな肌は天使さんにそっくりだ。

対照的なのに似ている。そんな矛盾。

多分中学生くらいかな？ よくは分からないけど、天使さんよりはちよっただけ年上に見える。

姉妹……と言われれば、確かにそうなのかも知れない。でも明確に違う部分が一つ。それは髪の色じゃない。瞳だ。

目の色は一緒だけど、天使さんとは全然違う。にこにこと笑う天使さんの瞳は凄く綺麗で、ちよつとたれ目なのが凄く優しそうで、とても暖かい。

それに引き替え黒髪の少女の瞳は、気の強そうなツリ目で、でも……僕には分かる。この子は気が強くなてない。瞳の奥に見えるのは、怯えと……そして寂しさ。

寂しくて寂しくて、一人ぼっちは嫌だと今にも泣き出しそうな、そんなとても弱い人間の、どこか暗く、それでいて深く青い瞳。

その瞳が、黒髪の少女の美しさをなお一層際立たせているように感じる。

なんていうかな、天使さんは凄く優しそうだけど、綺麗さや可愛さを含めてどこか人間離れしているというか、なんというか。

凄く失礼な表現だけど、天使さんは人間らしくないんだ。もっと別の何か。

たとえば、そうだな。自分には百獣の王の力があると理解しているウサギ。肉を食べない百獣の王。獣達は見ただけで理解する。あそこで毛づくろいをしている可愛くて美味しそうなウサギには、絶対に手を出してはならないと。

手を出さなければ、あのウサギはびよんぴよん跳ねて、葉っぱを

食べて、コロンと寝っ転がって、そしてお昼寝をするだけ。でももし手を出せば……そんな感じ。

それに引き替え、黒髪の少女は凄く人間臭いんだ。

きつと脅されれば怯えて逃げ出し、捕まれば醜く慈悲を乞う臆病で脆弱な人間。……でもそのまま、黒髪の少女は人間のまま、人間離れた天使さんに匹敵する、いや、超える美しさを持っている。

恐らく欠点だ。完璧な美しさを持つ天使さんと、弱さという欠点を持っている黒髪の少女。

多分、その弱さこそが黒髪の少女の美しさを完成させている。そんな気がする。

この子は一体誰なんだろう？　ここには僕と天使さんしかいないはずなのに。

そこに僕はいない。でも確かに僕はここにいて、そして天使さんと鏡に映っているはずなのに、鏡に僕は映っていない。

そうか、僕はついに鏡にまでスルーされるようになってしまったのか。

……違うよね。そうじゃない。そうじゃないのは分かっている。分かっているはずなのに、何も分からない。

「……だれ、ですか？」

「ん？」

鏡に映る天使さんは、僕の言葉を聞いて笑顔のまま首を傾げる。

「この子、だれですか？ 天使さんは……知ってるんですか？」

頭が痛い。吐き気がする。眩暈がする。

目の前で起こっていることを理解できない。いや、理解している自分はいるのに、それを受け入れようとしない自分もいる。

「んー」

目を閉じた天使さんは、考え込むように小さく唸り、そして目を開けるとにっぱりと笑った。

「誰だっていいんじゃない？ そんなのどうだっていいと思うよ」

違う。絶対に違う。そんなことあり得るわけがない。これは僕なんかじゃな……え？

あの……はい？ ……誰だっていい？ どうだって……いい？

か、かる！ それはちょっと軽すぎないですか？

「あははー、どうだっていいじゃーん。鏡を見ると、さいっこの美少女がいつでも無料で見れるんだよー？ それが誰だって大した問題じゃないじゃーん」

僕の頬つぺたに自分の頬つぺたをすり寄せて、にひひと悪戯っぽい笑顔を浮かべた天使さんは、鏡を通して僕を見る。

でも鏡の中では、頬つぺたにすり寄られて、どうしたらいいのか分からず、ただ困惑する黒髪の少女が映っていた。

……どうだつていいのかな？　よくないんじゃないのかな？　でも、よくないのなら何がよくないのかな？

間違いなく今ここには僕と天使さんしかない。でも鏡に映っているのは天使さんと黒髪の少女。

順当に考えれば答えは一つしかない。

それはさつきから考えないようにしていること。

そうになると、どうだつていいで済ませてもいいことなのかな？　かなりとんでもないことなんじゃないのかな？　相当あり得ないことが僕の身に起こっているんじゃないのかな？

それを天使さんは……どうだつていいって。

「ぶっ」

不意に口から息が漏れた。

「ぶっ」

堪えようとするけど、続けて口から息が漏れる。

ダメだ。もう我慢できない。

「あはははっ、ど、どうでもいいって、天使さんそれはちょっと適當過ぎますよ！ あはははっ！」

堪えていた笑いがお腹の底から込み上げてきて、一度笑いだしたら止まらなくなってしまった。

だって僕は混乱して頭がおかしくなりそうだったのに、それをどうだっていいって軽く切り捨てるんだもの。僕はまじめに考えていたのに、天使さんは、天使さんは……あはははっ！ 適當過ぎますよ！

「あえ？ なんで笑ってるのかにや？ あたし変なこと言ったかにや？」

今度は天使さんが困惑したような表情で僕を見つめる。本当に分かっていないのかこの人は？ あはははっ！ ダメだ我慢できない！

「な、なんで笑ってるかって？ それを聞いちゃいますか？ あはははっ！」

分かってる。天使さんは惚けた振りをしているだけだ。

混乱している人間に、上から押さえ付けるような物言いをしても、余計に混乱させるだけだ。理解できないことを必死に理解しようとして、でもその事実を受け入れられない人間に、これが現実だと突きつけても、ただ追い詰めるだけだ。

惚けてはいるけど、きっと天使さんはそう思って僕になにも言わ

ないんだ。そしてきつとこう言っている。

理解できるまで一緒にゆっくり行こうよー、いえーい！　って。

説明が面倒くさいとか、どうだっていいとか、本気で思っているわけじゃないと思う。きつと、いや、絶対にそう思う。……多分。

でも、もしそうだったとしても、もし本当に適当だったとしても、それでもかまわないかな。だって……。

「な、なんだか天使さんが傍にいてくれると、僕の悩みてちつぱけだなあって感じるんです……あはははっ！　ひー、お腹が痛い！」

お腹を押さえて大笑いした。笑っても笑っても、あとからあとから笑いが込み上げてくる。

「それって、遠回しにあたしがお馬鹿さんだっって言いたいのかにやー？」

ジト目で僕を見つめる天使さん。それを見てまた笑ってしまう。

「そ、そうとも言いましゅ。あはははっ！」

ジト目で僕を見る天使さんを見て笑って、自分が噛んだことにまた笑って、こんなに笑ったのは生まれて初めてだ。

「ぶー」

僕の言葉にふて腐れてしまった天使さんは、そっぱを向いてしまった。ちよつと言い過ぎたかな？

「て、天使さん、いじけないで下さいよ！ あはははっ！ ひー、ひー、お腹が痛いー」

いじけている天使さんがあまりにも可愛過ぎて、それが無性におかしくて、さらに笑いが込み上げてしまう。

以前クラスの人達が話しているのを聞いたことがある。ツボにハマったって、大笑いしながらそう言っていた。

意味は知っていたけど、でも、その時はそれがどういう感覚なのか僕には理解できなかった。だってそんなに笑ったことがなかったから。

きっと、今の僕のような状態のことなんだと思う。そう、初めて知ることができた。

「笑いたければ笑えばいいにゃー。どうせあたしは万年ドベのドベちゃんですよーだ」

ぷっくりと頬を膨らませている天使さんは、僕を見て、いーつ、と顔をしかめると口を尖らせて、ふんっ、とそっぱを向く。

それで怒っているつもりなんですか？ あははは！ だからそれが可愛いんですってば！

「お、怒った天使さんも可愛いですよ？ あはははっ！」

「にゃ、にゃにおう？ ドベちゃんが可愛いのは当たり前だけど、二号ちゃんから言われると嫌味にしか聞こえないにゃ！」

頬っぺたをぷっくりと膨らませながら、ぷんぷんと怒り？ を露わにさせた天使さんは、立ち上がってトコトコと歩くと部屋の中心で立ち止まり、そこに体育座りをして完全にいじけてしまった。

だ、ダメだ、可愛い。可愛過ぎる。

「あはははっ、す、すみません、笑うつもりはないんですけど、どうしても笑いが込み上げてきてっ、あはははっ！」

どうしてこんなに面白いんだろう？ 何がそんなに楽しいんだろう？ 今は笑う場面じゃないはずなのに。

今は自分の身に起きた異変に混乱して、現実から逃げようとして、そして大泣きするか、悲鳴を上げるか、自分を見失って暴れるか。

そこに楽しい要素なんて何もないはずなのに、面白い要素なんて何もないはずなのに、どうしても笑いが止まらない。

でも、何故楽しいのか、何故面白いのか、本当はその理由を僕は知っている。

「て、天使さんは今日から僕の、ぷぷっ、お、お姉ちゃんなんですよね？ あはははっ！」

「さあねー」

僕に背中を向けて体育座りをしている天使さんは、本気でいじけ

てしまったのか、僕の質問にまともに答える気はないようだ。

なんというか、今の天使さんの姿は、今まで見た天使さんの中で一番子供っぽくて、年相応の可愛い普通の女の子に見える。

「笑えばいいよ」

不意にかかった天使さんの声。本気で怒らせたのかと一瞬びくきりしたけど、違った。

だって、声がとても優しくかったから。

そうですね。そうですね。笑いたい時には笑えばいいんですよ。

いつの間にか笑いは治まっていた。そして、今度は涙が溢れてきた。

「そんで泣きたければ泣けばいいしねー」

僕に背中を向けたままの天使さんは、そう優しい声で言ってくれた。

そうですね。本当にそうですね。天使さんの……言う通りですよ。

「天使さん……そっちに行ってもいいですか？」

「とくべつねー」

ゆつくりと立ち上がり、少しふらつきながらも天使さんが体育座りをしている部屋の中心まで歩き、天使さんの小さな背中の前で立ち止まると、そこに座った。

「僕は……女の子になっちゃったんですか？」

ずっと言わないようにしていた言葉。思っけても否定しようとしていた言葉が、意外にもすんなりと口から出た。

「さあねー」

まだいじけているのか、僕の質問に答える気がない天使さんの声は、淒く優しい。

わかっています。天使さんは答える気がないんじゃないですよ？

「自分の目で見て、自分で理解しろってことですよ？」

「どうかなー」

「だから、いきなり理解する必要はないってことですよ？」

「そうかもねー」

「それまで天使さんは待っていてくれるんですよ？」

「そうかも……まあねー」

「だって天使さんは僕よりちっちゃいの……お姉ちゃんですよんね？」

「まあねー。でも、ちっちゃいは余計だねー」

「背中……借りてもいいですか？」

「とくべつねー」

ゆっくりと体を屈めて、そして天使さんの小さな背中に額を付けた。

天使さんの小さな背中が、とても暖かくて、そして凄く大きいような気がした。

涙があとからあとから溢れてくる。でも悲しいわけじゃない。つらいわけじゃない。

さっきまであんなに大笑いしていた理由。あんなに楽しかった理由。あんなに面白かった理由。そして、こんなにも嬉しい理由。

「僕は……ずっと一人ぼっちでした」

「ふーん」

「こんな僕と……ずっと、一緒にいてくれるんですね？」

天使さんが傍にいてくれたから、だから僕は笑えたんだ。だから僕は泣けたんだ。

一人じゃ笑うことも泣くことも……結構大変なんだ。

僕の問い掛けに天使さんは何も答えず、そのまま静寂が流れた。

しばらくして、天使さんの背中が微かに動いた。多分、俯いていた天使さんが顔を上げたんだ。

「二号ちゃん……あ、そっか、もう二号ちゃんじゃないよね。じゃあ今からゆんちゃんね？ゆんちゃんさー、比翼の鳥って言葉、知ってる？」

ひよくの鳥？　なんだろ？　知らないなあ。

「すみません、わかりません」

「そっか、ならそのうち調べてみるといいよ。そういうことだから」

「そう……ですか。わかりました。今度調べてみます」

ひよくの鳥の意味は分からないけど、なんだか淒くすつきりしたなあ。きつと大笑いして大泣きしたからだよね。

そして、僕はもう、一人ぼっちじゃないんですね？

よし！　なら天使さんに言わなきゃならないことを言ってしまう
う！

天使さんの背中に額を付けたまま、大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出し、そして顔を上げた。

「あの……天使さん」

そっぽを向いたままの天使さんは、恐らく僕の声の異変に気付いたのか、チラリと横目で僕を見る。どうやらまだいじけてるみたいだ。

「あの、その……ふ、ふつつかものですがっ、今日からよろしくお願いしますっ！」

できるだけ元気よく声を張り上げて、そして床に両手について深々と頭を下げた。

三つ指だ、こういう時は三つ指をつけて頭を下げるんだ。それくらいは僕だって知ってる。

しばらく頭を下げていたけど、天使さんからのリアクションは特にない。

あれ？　もしかして……引かれちゃった？　あれ？　こういう時ってこう挨拶するのが礼儀だよね？　あれ？　そう言えばなんだかちょっと違うような気がしないでもないけど、合ってるような気がする。

どっちにしろ、どうするのこの空気？　何もリアクションがないと、なんだか淒く顔を上げづらいんですけど。

え、えーっと、こういう時は……そ、そうだ、笑顔だ！　笑ってごまかす！　これだ！

「ふ、ふつつかものって……え？　なに？　じゃあ今日は初夜？
え？　ゆんちゃんはずでに覚悟ができてるってこと？　しかも三つ
指までついちゃって……。ええっ？　い、いいのっ？　ドベちゃん、
ゆんちゃんがトラウマにならないように我慢してたんだけど、ある
程度懐柔してから美味しくいただくと思ってたんだけど、初日から
我慢しなくてもいいのっ？」

ん？　何もリアクションがないと思ってたら、なんだかブツブツ
と呟くような声が聞こえる。声が小さ過ぎて何を言ってるのか聞き
取れないけど。

ま、まあいいや！　とりあえずここは笑ってごまかすことに決め
たんだから、このまま行っちゃえ！

勢いよく顔を上げて、自分ができる精一杯の笑顔を作った。

「にっこり」

しまった！　にっこりって口で言っちゃったよ！

「にっぱり」

うああ！　にっぱりって言い直しちゃったよ！　慣れないことす
るからだよ！　笑顔とか慣れないことをしようとするから余計に事
態が悪化しちゃうんだよ！

どうするのこれっ？　どうしたらいいのこれっ？　この異様な寒
さはなんなのっ？　なんかもうわけが分からなく……。あれ？

背中を向けて体育座りをして、横目で僕をチラ見していたはずの天使さんが、いつの間にか僕の正面で尻餅を付いたような格好になっていた。

その上、大きくて青い瞳を目一杯見開いて、しかも湯気が出そうなほど真っ赤な顔で僕を見つめていた。

な、なんだろう？ なんなのこの状況は？ そんなに……それはほど、湯気が出るくらい顔が真っ赤になるほど……僕のやったことは寒かったんですか？

やっぱり、につこりとかにつぱりとか、声に出して言っちゃったのがいけなかったんだ。

「あ、あはは……」

あまりの恥ずかしさに、とりあえず笑って首を傾げてみた。

その僕を真っ赤な顔で呆然と見つめていた天使さんは、いきなりビクッと跳ね上がると、手のひらで鼻と口を覆った。

「ゆ、ゆんちゃんの笑顔は……凶器だにや」

天使さんが何か言っていたみたいけど、手のひらで口と鼻を覆っているせいで、言葉がくぐもってよく聞き取れない。

「は、鼻血が……理性ってなんだったかにや？」

ふがふがと何かを言ってるけど、やっぱり聞き取れない。

こ、これはもしや……思いっきり引かれてる？

「え、えへへ……天使さんそんなに引かないで下さいっ！ 僕を置いていかないで下さいっ！ 寒いことをやった自覚はありますし、わざとじゃないんですっ！」

なんだか見捨てられそうな気がして、焦って天使さんとの距離を詰めようと座ったまま前進したら、尻餅を付いたままの天使さんが、そのままの体勢で器用に僕との距離を取る。

やっぱりだ、やっぱりかなり、いや、相当ドン引きしている。

「待って下さい……」

「お、おちつくにや、ゆんちゃん……」

「ちょっと待って下さいっ！ 違うんです誤解なんですっ！ 僕はわざと寒いことを言ったわけではなくてっ！ 僕は根っから寒い人間なんですっ！ だからお願いですから見捨てないで下さいっ！」

「ダメにやゆんちゃんっ！ このままだとドベちゃん自分を見失っちゃうにやっ！ ドベちゃんが修羅と化す前に距離を取るにやーっ！」

「天使さん僕の話聞いて下さいっ！」

「うにやーっ！」

その場に立ち上がった僕と、同じく立ち上がった天使さん。そして真っ赤な顔で僕を凝視する天使さんは、激しく肩を上下させて荒

く呼吸をしながら、何故かふとももを摺り寄せてモジモジしている。

「……逃がしませんよ」

「どちらかと言えば逃げた方がいいのはゆんちゃんだにゃ！」

ええい！　こうなったら強行手段だ！　せつかく見つけた友達を……。

「逃がすかぁ！」

「うにゃーっ！」

天使さんとの距離を詰めるために全力で床を蹴った。すると予想以上に体が素早く反応して、すさまじいバネで一足飛びに距離が縮まった。

なんだこの全身のバネと速さは？　しかも一瞬で移動したのに周囲の景色が鮮明に見える。

でもそこには既に天使さんの姿はなかった。なんて速さだ。僕の動体視力は僕の移動速度にしっかりとついて来ているのに、それでも天使さんの動きは全く見えなかった。

でもわかるっ！

「後ろかつ！」

「うにゃーっ！」

即座に後方へと体を反転させると、そこには床に着地した体勢の天使さんの姿。

再度床を蹴り、一瞬にして距離を詰めると、今度ははつきりと天使さんの姿が消えるのを確認した。

信じられない移動速度だ。恐らく人間の身体能力の限界を超えている。でも極限まで研ぎ澄まされた僕の直感が教えてくれる。高速で移動する天使さんの気配が手に取るようにわかる。

「左っ！」

「うにやにやにやにやっ！」

「右後方っ！」

「にやにやにやにやーっ！」

「右に回り込んだと見せかけて……左前方っ！」

「うっにやーっ！」

こうして、僕と天使さんの追いかけっこは一時間以上続いた。そこまでドン引きして本気で逃げられると、正直かなりショックです。

怒られました

散々追いかけてこをして、お互いの体力が限界に達し、しばらく睨み合いのこう着状態が続いていた。

「はあ、はあ、はあ……ゆ、ゆんちゃん、ちょ、ちょっと休憩しないかじゃ？」

「はあ、はあ、はあ……そ、そうですね、ちょっと休憩しましょう」

肩を大きく上下させて息を弾ませる天使さんが、僕も言おうと思いつつ、なかなか言い出しづらかった休戦の提案を言ってくれたことで、内心安堵しながら頷き、提案を飲むことにした。

ああ、よかった。自分から始めた追いかけてこだったから、止めようって言い難かったんだよね。助かった。

それにしても、僕にこれほどの身体能力や体力があったなんて驚きだ。高校の体力測定やマラソン大会では男子全体だと後半だったし、一部の女子にすら劣っていたのに。

でも今は体力はともかくバネが凄い。まるで全身がゴムのようになやかで、自分の想像を遥かに凌駕した動作を可能にしている。そしてその動きになんなくついていく動体視力がまた凄い。

しかも体が羽のように軽いから、通常では考えられない急激な方向転換をいとも簡単にやってのけるし、その後の安定感が抜群だ。なにせ、つまづいて転びそうになっても、体が勝手に持ち直してく

れるんだから。

でもさらに凄いのは、そんな僕の動きを全て先読みして、その上信じられない速度で完全に逃げ切った天使さんの速さ。はつきり言っ
て人間が到達できる身体能力の限界を遥かに凌駕していると思う。

だって僕は初めて見た。視界から消えるほどの速さで動く人間を。そして壁や天井を利用して跳ね回る人間を。

まるで、そう、猫っぽい忍者みたいだ。猫忍者？ なんだらう？
なんだか物凄く可愛い生き物のような気がする。

まあ、相手は天使さんなんだし、多少人間を超えていたって今さら驚くほどのことでもないけど。

それにしても暑い。汗も掻いちゃったし、ちよっと上着を脱ごう。

着ていたパジャマのボタンに手をかけて、一つ一つ外していく。

「ちよ、ちよっと待ったあ！」

うわっ！ びっくりした！ いきなり天使さんが大声を上げるから、ビクツとしてしまった。

視線を正面の天使さんに向けると、何故かかなりあたふたしている。なんだらう？

あ、そうか。パジャマを脱ごうとしたから焦ってるのか。それはそうだ。天使さんは女の子だし、僕は一応男だから、ここで上半身裸になったりしたら、天使さんが身の危険を感じるのも当たり前だ。

でも大丈夫です。

「あはは、大丈夫ですよ天使さん。僕はパジャマの下にはいつもシヤツを着てますから。それに僕にだって一般常識くらいあります。天使さんのいる前で裸になったりしませんよ」

それに、もし僕が天使さんを襲ったって、間違いなく返り討ちに合うだろうしね。僕は本気で天使さんを追いかけていたけど、天使さんは多分全然本気を出してない。

「ち、ちがつ！ ゆんちゃん細身のわりにはおっぱいがおっきいから、こむかいさんのシヤツが合わなかったんだよっ！ パジャマだけ大きかったからなんとか着せられたのっ！ それに下着がなかったからゆんちゃん今パジャマの下に何もつけてないんだよっ！」

余計にあたふたした天使さんが、真っ赤な顔で僕の胸元辺りを指さして変なことを言っている。

つける？ パジャマの下につける？ あはは、何を言ってるんですか。シヤツはつけるんじゃないくて着るものですよ？ それにシヤツが着れないって、そんなにいきなり太るわけがないじゃないですか。

「あはは、大丈夫ですって。だって昨日、寝る前にちゃんとシヤツを着ましたから……あれ？ 昨日？ 昨日って何してたっけ？ まあいつか。とにかく大丈夫です」

スルリとパジャマの上着を脱ぐ。そのパジャマが床にふわりと落ちるのと同時に、僕の胸がプルンと震えた。

「……あれ？」

なんだこれ？ 何この物体？

「ああ、だから言ったのに……追いかけてるうちに、自分が女の子になったことをすっかり忘れちゃってたんだねー。この天然ちゃんめ……」

声ができる方に視線を向けると、手のひらを額に当てた天使さんが、俯きながら盛大にため息をついている。そして自分の胸元に視線を戻すと、綺麗な曲線を描いた二つの膨らみが見えた。

女の子？ 女の子になった？ ああ、そう言えばそんなこともありましたね。あはは、追いかけてここに夢中になって、すっかり忘れてました。

……えーと。

「はあっ？ ちょ、ちょっとなんですかこれっ？ なんかついてますよっ？ 僕の胸になんかおっきいのがついてますよっ？ なんだこれっ？ なんだこれえっ？」

天使さんに視線を向けて、自分の胸元に視線を戻して、また天使さんに視線を向けて。それを何度も繰り返して、そして僕が視線を動かす度に、胸の膨らみがプルプルと震える。

「僕は女の子になっちゃったんですか？ とか泣きながら聞いてきたから、ちょっとは理解してると思ってたけど、全然だねー」

理解？ 理解するって？ 女の子になったってことは、おっぱいが生えてきたってこと？ このプルプル震える物体？ え？ これ僕の？ 僕のおっぱい？ はれ？ ってことは？

背筋に冷たい汗が流れる。凄く嫌な予感がする。

そして恐る恐る下腹部に手を伸ばした。

「な、ない……」

あるはずのものが無い。男の勲章がない。僕と同じで一人ぼっちだった相棒がいない。

雨の日も風の日も、悩める時も健やかなる時も、共に過ごしてきた相棒がいない。

彼は煩惱に素直な困ったヤツで、でもいつも僕の傍にいてくれた親友が……いない。

「て、天使さん……僕の大切な親友がいなくなってます……」

どうしたらいいのかわからず、前屈みになって股間を押さえながら、あまりの衝撃に涙が溢れてくるのを必死に堪えて天使さんに問いかける。そんな僕の悲痛な心情を無視するかのように、前屈みになったせいで胸の膨らみがたゆんたゆんと波打つ。

「そうだろうねー。ドベちゃんもふたなりは守備範囲外だからねー。相棒がいたら困っちゃうねー」

俯いて手のひらを額に当てたまま、再度盛大にため息をついた天

使さんは、トコトコと僕に近寄ってきた。

「て、天使……さん？」

な、なに？ なんなの？ 怖い、何故か天使さんが凄く怖い。

僕の全てが逃げると叫んでいる。とにかくこの場から逃げると警鐘を鳴らしている。

全身から冷たい汗が噴き出し、背筋を凄まじい悪寒が走り抜けた。

「あ、あの……天使さん？」

声が震える。息が上がる。心臓が破裂しそうなほどに脈動する。

逃げなきゃ。とにかく逃げないと、何か途轍もないことが起きる。でも動けない。膝が震えて一步も動けない。

まるで金縛りにあつたように微動だにできず、ただ近づいてくる天使さんを見つめることしかできなかった。

俯いたまま無言で近寄ってきた天使さんは、僕の目の前でピタリと歩みを止めると、腕をだらりと下げて、そして拳を握りしめた。

「ゆんちゃんさあ、この状態で襲われたって文句なんて言えないんだからね……」

今まで聞いたことがない、天使さんの暗く低い声。ゾクリとした悪寒と、全身に一気に鳥肌が立つのを感じる。

……や、殺られる。

ずっと天使さんの右腕が動き、僕の左手首を掴む。そのまま天使さんは右足で僕の左足を軽く払った。

視界がぐにやりと歪み、浮遊感が襲う。正面を向いていたはずの視界は、一瞬にして天井を見ていた。

一瞬遅れて足払いされたことを理解して、床に叩きつけられる衝撃に備えて全身を硬直させたけど、訪れるはずの衝撃がこない。

代わりに掴まれている左手首が引かれて、後頭部に何かが優しく添えられるのを感じると同時に、ふわりと背中が床についた。

「あたしはさあ、無理矢理なプレイは好きだけど、プレイじゃない無理矢理は大っ嫌いなんだよねえ」

床に寝た状態の僕の上に、いつの間にか天使さんが馬乗りになっている。そしていつも笑顔だった天使さんは、俯いたまま暗く低い声で僕に語りかけた。

表情はわからないけど、笑顔じゃないような気がする。

ど、どうしよう。僕は……僕は何か天使さんの気に障ることを言っちゃったのかな？ 本気で怒らせちゃったのかな？

「あ、あの……ご、ごめんなさい。天使さんごめんなさい。ぼ、僕……怒らせるつもりなんてなかったんです。本当にごめんなさい——」

「少し黙りなよ」

ビクリと体が震えて全身が硬直する。天使さんの小さな囁きに、僕の震える言葉は掻き消されてしまった。

掴まれている左手首がゆっくりと上へずらされ、右手首も掴まれと同じく上へとずらされる。そして僕の頭の上で両手を交差させるように押さえつけられた。そのせいで天使さんはかなり前屈みになり、僕の顔に触れそうなほどに顔が近づく。

そこでやつと天使さんの表情が見えた。笑顔じゃなかった。いつも笑顔だった天使さんは、怒ったような、でも凄く苦しそうな表情をしていた。

僕は……僕は何を言ったんだろう？　こんなに天使さんが怒るなんて、僕は一体何を言ってしまったんだろう？

こういう時って、どうしたらいいんだろう？　謝っても許してもらえない時は、どうしたらいいの？

僕は……天使さんに嫌われちゃったの？

「な、なんでもしますから……だから嫌いにならないでください——」

「だから少し黙りなつて」

頭の上で交差されている僕の両手を右手だけで押さえた天使さんは、離れた左手の指で僕の頬を優しくなぞる。

「十年待ったんだよ。あたし達天使からしてみれば十年なんてあっという間だけだよ、でもさあ、違うんだよねえ。その間、凄く楽し

みでさあ。待ちきれない想いを必死に堪えてさあ、十年間ひたすら待ったんだよ……」

悲しそうな、苦しそうな、そんな複雑な表情の天使さんは、唇が触れそうなほどの距離で、静かに僕に語りかける。

「ゆんちゃんが自虐傾向にあることも、天然ちゃんなことも十分理解してるつもりだし、ゆんちゃんのそういう所は凄く可愛いと思うでもさ……」

僕の頬をなぞっていた指が離れる。

「いくら天然ちゃんだからってさ、初日にいきなりあんなもの見せられて、今度はいきなり半裸になるし。そうやって挑発みたいなのとをされ続けたら、あたしだって我慢できなくなっちゃうよ……」

「あうつ？ ふえつ？」

不意に胸から全身に電撃のようなものが走り抜けた。

「ゆんちゃんは転生したばかりで、まだ赤ちゃんみたいなものだからね。だからゆんちゃんは何も悪くないんだよ。悪いのはあたし。ごめんね、もう我慢できない……」

右の胸に何かが触れる感触。多分天使さんの指だ。

「んっ……」

口から勝手に声が漏れる。

「ねえゆんちゃん、キスしていい？」

天使さんの潤んだ瞳が僕を見つめる。そして真っ赤な顔で息を荒げ、その息が僕の唇に触れた。

キスという言葉聞いて、顔が熱を持っていくのを感じる。きっと今の僕の顔は真っ赤だ。

「うっ？ んっ」

カリッと僕の胸を何か硬いものが引つ搔く。ビクリと腰が浮き上がり、ビリビリと電流が胸から全身へと流れる。

多分、胸の先端を爪で引つ搔かれたんだ。

「これ、気持ちいいの？ ならもつとしてあげるよ」

「あっ？ あっ、んあっ、ひっ……はあう」

カリカリと爪で引つ搔かれ、連続で押し寄せる電流に、頭がどうにかなくなってしまいそう。

背筋をゾクゾクとした何かが駆け上がる。体が勝手に痙攣する。口から勝手に甘い声が漏れる。それを天使さんから見られている。

凄く恥ずかしい。今の姿を天使さんから見られているのが、どうしようもなく恥ずかしくて、すぐにでもこの場から逃げ出したいのに、体が言うことを聞かない。

このままこれが続けられたら、多分本当に頭がおかしくなっ

まう。

でも、僕は……。

「ねえ、なんで止めてって言わないの？ 気持ち良すぎてもっとして欲しいの？ それとも、あたしのため？ あたしに嫌われたくないから？」

ポタリと暖かなものが僕の頬に落ちる。押し寄せる電流に狂いそうになり、それを目を閉じて歯を食い縛り耐えていた僕は、薄目を開けると、そこには涙を流して微笑む天使さんがいた。

「ゆんちゃんは大バカだなあ。嫌なことは嫌って言うていいんだよ？」

天使さんの瞳からポタポタと落ちる透明な雫はとても綺麗で、そして悲しそうだった。

天使さんが泣いている。僕が女の子を泣かせてしまった。僕は、僕は一体何をしてしまったんだろう？

「あたしが無理矢理襲っても、ゆんちゃんはきっと許しちゃうだろうなあ。ゆんちゃん優しいから……」

「て、天使さ——ひうつ、んっ、んあっ」

声をかけようとしたら、まるで僕の発言を阻止するかのように、胸の先端を爪でカリカリと引っ掻かれて、言葉の代わりに変な甘い声が出てしまう。

は、恥ずかしい。凄く恥ずかしい。変な声が出るのを天使さんに

聞かれることも、そして気持ちいいと感じてしまっている自分も、恥ずかしくてどうしたらいいのかわからない。

「でも許してくれたって、きっとゆんちゃん怯えちゃうよねえ。そんなの嫌だなあ」

「て、天使さ——あつ、ちょ、ひうつ」

声をかけようとすると、まるでタイミングを見計らったように、胸の先端を爪で引っ搔かれる。その度に変な声が出てしまって、恥ずかしくて顔を背けようとしたけど、悲しそうな天使さんの表情から目を離せない。

「す、すみませ、あんつ、な、なにが天使さんの気に障ったのかわからなくてつ、んあつ、こ、これ恥ずかしいですつ、恥ずかしいですけどつ、で、でもこれで許してもらえるならつ、んつ、ぼ、僕は……んつ」

ダメだ。声が漏れるほどに恥ずかしさが倍増していく。見られない。恥ずかしくて見られたくないけど、でも言えない。

天使さんに嫌われてしまうのが怖い。

「ごめんっ！ ドベちゃんどうかしてたっ！」

ひょいっと体を起こした天使さんが、顔を真っ赤にさせたまま、腕でゴシゴシと目元を擦り、涙を拭いてにつこりと笑った。

「謝っても許してもらえないようなことしちゃったねー。ごめんねゆんちゃん。本当にごめんなさい」

ペコリと頭を下げた天使さんは、立ち上がると僕に背を向けて歩き出した。

天使さんが……どこかに行ってしまう。

「ぼ、僕が悪いんですつ。僕が天使さんの気に障ることをしちゃったからつ。行かないでくださいつ、お願いですから置いて行かないで下さいつ！」

起き上ろうとしたけど、腰に力が入らずに動けない。だから寝たまま必死に天使さんに呼びかけた。

また一人ぼっちになるのは嫌だ。それだけは絶対に嫌だ。このまま見捨てられるなんて……そんなの絶対に嫌だつ！

僕の必死の呼びかけが通じたのか、立ち止まった天使さんがクルリと振り返り、にっこりと笑った。そしてパタパタと手のひらで真っ赤な顔を仰いでいる。

「あははっ、どこにも行ったりしないよー。ゆんちゃんを置いてどこにも行くわけないじゃーん。ちよつとね、このままだとまた襲っちゃいそうだから、ちよつとね」

照れたように笑った天使さんは、ひらひらと僕に手を振っている。

「そうだ、汗も掻いたしお風呂にでも入ろつか？　ちよつと待ってねー。二十分くらいしたら戻ってくるから」

そう言って、天使さんは部屋を出て行ってしまった。

見捨てられたわけじゃ……ないの？

でもなんだったんだ？ 何が天使さんの逆鱗に触れたんだ？
ダメだ、さっぱり分からない。

僕はこれから一体何に気をつければいいんだろう？

「と、りあえずはよかった。何が天使さんの逆鱗に触れたのかは分からないけど、今度から気をつけよう……でも何に気をつければ……」

大きくため息をはき、目を閉じて何回か深呼吸をする。

と、とにかく色んなことに気をつけてみよう。それしかない。

それにしても、さっきの天使さんは本当に怖かった。

「そうだ、お風呂つて言ってた。先に天使さんに入ってもらって、次が僕かな？」

一人呟いて、周りを見渡してみる。

多分ここは僕の部屋だ。それは間違いないと思う。でも、天井はそのままだけど、それ以外はがらりと変わってしまった。

以前は暗めの茶色だった部屋の壁は、清潔感のある白い壁に変わっていて、薄手のベージュ色だったカーテンは、爽やかな水色のカーテンに変わっている。

厚手で遮光性の高そうな水色のカーテンは、今は窓の両端に纏められて止められているけど、その代わり白い薄手のレースカーテンが目隠しになっていた。

畳の上にカーペットを敷いていたはずの床は、綺麗なフローリングに変わっていて、ワックスをかけたばかりのようにピカピカだ。

その他にも、小学校から使っていた大きな机が消えていて、代わりにシックでシンプルなダークブラウンの机が置かれていて、タンズや押し入れがあった場所にはクローゼットが作られていた。

それと大きなクマのぬいぐるみや、その他の小物類。そして壁にかけられた制服。

見覚えのある制服だ。確か私立の制服だったと思う。可愛い子が多いって有名な中高一貫校の制服だったかな？　かなり頭がよくないと入れない所だった気がするけど。

そしてその制服は女子生徒用のブレザー。

「天使さんが部屋を変えたのかな？　女の子の部屋に入ったことはないけど、女の子の部屋みたいだ」

ゆっくりと体を起こして、そして立ち上がろうとしたけど、まだ膝が震えていて上手く立ち上がれない。

「お風呂に入るなら自分の着替えくらいは準備しておかないと、また怒らせてしまうかも知れない。でも着替えはどこにあるんだろう？　ちよっとクローゼットを漁ってみようかな？」

しかたなく四つん這いになってクローゼットへと向かった。

それにしても、四つん這いで進むとプルプルと震えるおっぱいが気になる。それにちよつと意外なことが。

「自分のおっぱいだと言情しないものなんだなあ。初めて知った」

これ、意外と邪魔なだけかも知れない。

一緒にお風呂でした

脱衣場に立って、目の前のものを見つめてみる。

どうしよう。どうしたらいいのかな？　これはさすがに困った。

「これ、スクール水着だよね……。これを着ろって言われても、これを着たら大切な何かを失ってしまいそうな……」

正直に言うと、スク水は好きだ。でもそれは見ることであつて、着たらいけない。着たら本物の変態になってしまう。

「まさか天使さんが一緒に入ろうとか言い出すなんて……。凄く嬉しいけど。でも何故スク水なの？　そして何故こんなものが家にあるの？」

壁につけられた洗面台の横にある、棚の上に置かれた僕の着替えと、そしてスクール水着。

結局僕は自分の着替えを見つけられず、二十分ほどして部屋に帰って来た天使さんから着替えを出してもらった。

僕の服はまだ準備していないとのこと、天使さんの服を借りることになったんだけど、これを僕が着るのだろうか？

黒い小さなキャミソールと、かなり短めなデニムのミニスカート。そして何故か黒いＴソックス。

これを僕に、この僕に着ろというのですか？　こんなの着たら女

装趣味の変態だと思われてしまいます。

あ、そっか、女の子になったんだっけ、そう言えば。そうすると、女装しているわけでもないのかな？ うーん、微妙。

それと嬉しいことに、天使さんはノーブラ派らしくて、だから僕のブラジャーもない。まあ、もし天使さんのブラジャーがあってもサイズが合わないだろうけど。

というより、いきなりブラジャーをつけると言われても、多分無理。

たださすがにパンツは履いているようで、僕に新品のパンツをくれた。小さなピンクのリボンがついた、白と水色のストライプの可愛いパンツ。

女の子のパンツを生で見たのは初めてで、もらった時にかなりドキドキしてしまった。

そして、新品じゃない方がよかった、って思ったことは内緒。

それにしても、これ、本当に着なきゃダメなの？ いくら女の子になったって言っても、いきなり女の子の服装はハードルが高いなあ。

それに、以前僕が着ていた服が合わないのに、天使さんの服が着れるのだろうか？ 天使さん曰く「男性ものと女性ものの服の作りは違うから、多少小さくても大丈夫」とか言ってたけど、本当に大丈夫なのかな？

確かに見た目は小さいけどキャミソールは伸縮性が高いみたいだし、デニムスカートもそれなりに伸び縮みするみたいだ。僕の着ていた服とは全然違う。

「でもこのスカート、天使さんが履いてもミニなのに、天使さんより身長が高い僕が履いたらどうなるんだろう……」

キャミソールだって着れたとしてもきついだろうし、本当に大丈夫なのかなあ。

ま、まあ、これはとりあえず置いておくとして、現在直面している問題は、着替えと一緒に預けられた紺色のスクール水着だ。

「おまたせー。だいぶすつきりしたよー」

部屋に帰って来た天使さんは、相変わらず顔が真っ赤で、そしてふらふらとよろめきながら僕に近づいて来た。

「お、お帰りなさい。さっきはその、怒らせてしまつてすみませんでした」

クローゼットを漁っていた僕は、天使さんのほうに向きなおつて、とにかく頭を下げて謝った。

「だからゆんちゃんは悪くないって。って、それ何着てるの?」

ちょっと疲れた感じの天使さんは、でもどこかすっきりしたような表情で、僕が着ている服を指さす。

「あ、すみません。上半身が裸のままは恥ずかしいですし、あとお風呂の準備に着替えを探そうかなって思いまして、勝手にクローゼットを漁ってました」

天使さんはどこに行つて来たんですか？ という質問をしたかったけど、なんだか聞いちゃいけないような気がしたから、といあえず現状の説明をした。

「ああ、うん。ここはゆんちゃん部屋だし、ここにある物は全部ゆんちゃんの物だし、勝手に漁るも何もないけどね。だから謝ることじゃないよー。っていうか、その服はやばいんじゃない？」

ですよね。この服はないですよね。わかってはいるんですけど。

それはそうと、やっぱりここは僕の部屋だった。クローゼットには見覚えのある僕の服が数着残っていたしね。

でも気になるのは、何故かナース服やセーラー服、それにテニスウェアやバスケのユニフォームなど、制服やスポーツのユニフォームがクローゼットの中にずらりと掛けられていた。

こんなに何に使うのか。そしてここまで色々揃えてあるのに、何故ジャージがないのかな。

ジャージがあれば最高だったんだけど、なかったから残っていた僕の服の中からシャツを取り出して、着てみたまではよかった。でも、なんだか凄いことになってしまった。

着てみたのは半袖で紺色のカットソー。僕の体は確実に小さくなってるみたいだし、以前の僕が着ていたシャツはMサイズだから、何も問題なく着れるはずだった。

だったはずなの。

「ねえゆんちゃん。それはちょっとエロいんじゃない？」

「ですよ……僕もそう思うんですけど、他に着る物がなくて……」

着てみたカットソーは、肩も腰も十分過ぎるくらいに余裕があったんだけど、でも胸が、おっぱいだけかなり窮屈だった。そのせいで、ぽつちが二つ、くつきりと浮かび上がってしまうと言つ悲惨な状態に陥ってしまった。

なんだろう、これは裸よりも恥ずかしい気がするのは気のせい？だからって裸になるわけにもいかないけど。

まさかセーラー服とかナース服を着るわけにもいかないしね。

「せつかく体を鎮めてきたのに……」

ぼそつと天使さんが小声で何か言ってる。もしかして、また怒らせちゃったのかな？

「あ、あの……」

「まあいいや、もうこのままお風呂に入っちゃおう」

謝ろうとしたら、そう言った天使さんの言葉に遮られてしまった。

その後、色々と準備をして着替えを預けられて脱衣場に押し込められて、そして現在に至る。

天使さん曰く「いきなり一人で入るのは難しいだろうから、慣れるまで一緒に入ってあげる」とのことだった。そして預けられたスクール水着。

「た、確かに裸は不味いけど、だからってスク水を着るのはちよつと……」

棚の上に置かれたスクール水着を手にとってみる。

「こ、これを着たら……僕も立派な変態だよね……」

手に取ったスクール水着を目の前に掲げて、頬が引きつるのを感じる。

ふと視線を洗面台に移すと、スクール水着を掲げた美少女が、引きつった笑みを浮かべている姿が映っていた。

「本当にこの子が僕なの？ ダメだ、どうしても信じられない。でもこの子がスク水を着るのなら、変でもなんでもないよね。いや、むしろ変どころか相当似合うと思う……でも中身は僕なんだよね」

鏡の中の美少女がスク水を着るのなら、僕としては是非とも見たい。

でもこの子は僕なわけで、だとすると僕がスク水を着ることになるわけで。でも着るのは鏡の向こうの美少女なわけだから、変態ではないと思うけど、でもやっぱり……。

「ゆんちゃん、着替え終わったー？ 終わったならあたしも入るよー？」

うわぁっ！ びっくりした！

そうだった忘れてた。僕の着替えが終わるまで、天使さんは脱衣場の外で待っていてくれてるんだった。

こうなったら悩んでる時間はない。

「す、すみませんっ、もうちょっと待ってくださいっ」

「ほーい、着れなかったら言ってねー。手伝ってあげるからー」

扉の向こうから聞こえてくる天使さんの声。手伝ってくれとか、本当に優しい人だなあ。だからこそ天使さんの手を煩わせるわけにはいかない。

よし、着よう！

「は、はいっ、ありがとうございますっ。と、とりあえず一人で着てみますっ」

これ以上ダメダメだと思われたくないしね。まずは一人で頑張ってみよう。

「ちっ」

ん？　なんだか今、扉の向こうから舌打ちが聞こえたような。気のせいかな？　気のせいだよな。

結局、スク水なんて着たことがない上に羞恥心が邪魔をして、着替えが終わるまでに十分以上かかってしまった。

天使さんが怒っていないことを切に願うばかりです。

バスタオルが落ちました

バスルームに入り、とりあえず目の前にあったプラスチック製の椅子に座ると、正面に設置された鏡を見た。

鏡は全身が映るほど大きい。前は小さな鏡だったのに、こんなに大きな鏡が目の前にあると、ちょっと恥ずかしい。

以前は一人で入るのがやっとの大きさだったけど、今は二人くらいなら余裕で入れそうだ。これって改装したのかな？

どうも家の中が所々変わっているみたいだ。バスルームもその一つ。鏡の他にも壁やタイル、それに湯船が新しくなっていて、以前よりかなり大きくなってる。

これって結構お金がかかったんじゃないのかな？ まだ家のローンも払い終わってないって言うてたのに、こんなことして大丈夫なのかな？

あ、そうだ。欲に目が眩んだ父さんが株で大儲けしたんだった。納得。

「それにしたって、家中ほぼ原形がないんだよね……。でも微妙に前の家の面影も残ってる。ここまでするなら新築した方がよかったんじゃないかなあ」

変に貧乏性だと、余計にお金がかかったりするんだよね。

それはいいとして。

「やっぱり胸が苦しいな……これ、どのくらいの大きさがあるんだろ？」

なんとかスクール水着を着ることに成功したんだけど、ちょっと小さくて窮屈だ。それと、全身のラインが丸見えなのがかなり恥ずかしい。

女の子って、こういう水着とか体のラインが丸見えな服とか、着ても恥ずかしくないのかな？ 僕だけが恥ずかしいのかな？ 女の子になったばかりだから？

わからないなあ。

水着がどうしようもなく恥ずかしい。僕は女の子になっただけから、スクール水着を着ることは変じゃない、と自分に言い聞かせても、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしい。

だから羞恥心をちょっとでも和らげるために、正面の鏡を見つめてみる。鏡に映っている美少女が着ているんだと思い込んでみる。

僕を見つめる黒髪の美少女。

不思議な気分だ。おっぱいが自分についているとわかってても、大して欲情はしなかったし、むしろ邪魔だと思った。なのに、こうして鏡の中の美少女が窮屈そうな水着を着て、そしてその水着の胸を押し上げる大きな膨らみに欲情している。

これって凄く変だよな？ だって鏡に映った美少女は僕なわけだし、そうすると、僕は自分に欲情していることになる。そんなの変

だ。でも……。

「凄くえっちだ。童顔なのになんだか色っぽいし、それに水着がピチピチで……凄くいやらしい」

天使さんの柔らかそうな金髪は爽やかで可愛い印象だけど、鏡の中の少女の艶やかな黒髪は妖艶さを感じる。それに同じ青い瞳なのに、凄く色っぽい。

これが本当に僕なのか。

自分の目から見た世界と、鏡の中の世界がまったくの別物。今まで僕が見てきた世界ってなんだったんだろう？

この鏡に映っている少女を僕だと認識できる日はくるのかな？
今はまだ、考えられないな。

試しにちょっと動いてみようかな？

「わーい」

両手を上げてみた。すると鏡の中の少女も両手を上げる。

「こ、小日向優です。名前が変わったらしくて小日向ユウになりました。本名はユウティナみたいです。でも天使さんは僕をゆんって呼びます」

自己紹介をしてみた。

鏡には、椅子に座って両手を太ももの上に乗せ、顔を赤くして緊

張した様子の少女が、真っ直ぐに僕を見つめている。

「か、可愛い……なんだか美少女と一緒に風呂に入ってるみたいで凄くドキドキする……」

な、なんだか変な気分になってきた。

チラリと周りを確認してみる。まだ天使さんはバスルームに入ってきていないから、当然今この場には僕しかない。

いや、僕と鏡の向こうの美少女と二人っきりだ。

「ちょ、ちよっとだけ……」

なんだか鏡の中の少女から見られているようで、後ろめたい気持ちになりながらも、ちよっとだけ両腕を寄せてみる。

「う、うわ……」

もともと大きい胸が、両腕を寄せたことで両側から押し付けられ、おっぱいの谷間ができた。その少女の姿を見て、興奮すると同時に無性に恥ずかしくなり、顔が熱を帯びていくのを感じる。

そして鏡の中の少女もまた、興奮したような、恥らっているような、なんとも言えない妖艶な表情で、顔を真っ赤にしながら僕を見つめていた。

まるで僕を誘うかのように。

この子は……この子は僕の言うことならなんでも聞いてくれる。

もしここで水着を脱げと僕が願えば、この子は水着を脱ぐ。

頭がおかしくなりそうだ。

ゴクリと唾を飲み込む。

「ダメだよ、女の子がそんなことをしちゃダメだよ……でも、ちょっとだけなら……」

肩に手を伸ばし、水着の肩の部分にそっと手を触れる。これをずらしてしまえば鏡の中の少女は、僕の目の前であられもない姿を晒すことになる。

ここには僕と彼女しかいない。ちょっとだけなら、ちょっとだけなら……。

「何がちょっとだけならなのかにや？」

「あ、いえ、ちょっとだけ水着をずらしてみようかなあ、なんて……」

不意に後ろからかかった声に振り返りながら答えると、そこには体にバスタオルを巻いた天使さんが立っていた。

……あ。

「うわあああつ！　ち、違っんです誤解ですっ！」

「ああ、別に慌てなくたっていいよー。何してたのか大体想像できるしねー」

て、天使さんに見られてしまった。ど、どうするのこの状況……。

僕が自分のおっぱいを見ようとしていたことがバレちゃったの？

「ち、違うんですつ。その、あの、これは、えーとですなつ。……よ、ようするにですね、鏡を見ていてこれが本当に僕なのかなあとか思ってたですな、だから別にそういうことではなくてですな。だから何を言いたいのかというですな。決してそういうことではなくてですな……」

何か言い訳をしなくてはと思い、あたふたしながら身振り手振りで説明したけど、自分が何を言っているのか分からない。言っている本人が分からないのなら、聞いている天使さんはもっと分からないよね？

「ふーん、だからそんなに焦らなくていいよー」

そんな僕の挙動不審な姿を、かなり冷静な態度で見つめる天使さんは、特に興味がないのか、開けっ放しになっていたバスルームの扉を閉める。

そしてそのまま痛い沈黙が流れた。

椅子に座って鏡を見ていた僕は、天使さんが立っている扉の方を向いて俯き、天使さんは壁に寄りかかって何処か遠くを見つめている。

な、なんで天使さんは何も言わないんだろう。この沈黙は非常に
気まずい。

「ゆーんちゃん」

チラッと僕を横目で見る天使さん。

「……は、はい」

ゴクリと唾を飲み込み、小声で返事をした。

天使さんは何を思っているんだろう。怖い、何を言われるのか分
からなくて凄く怖い。

「すけべー」

「はわっ？ はわわわっ？」

い、言われたっ！ 一番恐れていた言葉を言われてしまったっ！

「ち、違いますっ！ こ、これはそのあれですっ！ あれってつま
りはっ、そうそうあれですっ！」

ああっ！ 自分でも何を言いたいのかさっぱりわからないっ！

「よ、ようするにあれです考察ですっ！ 僕という存在を僕という
概念がしっかりと認識するためのあれですっ！ 決して鏡に映って
いる女の子が可愛すぎてちょっとだけおっぱいを見てみたくなっ
とかじゃないですっ！」

も、もうダメだ、もうお仕舞いだ。天使さんからスケベな変態だと思われてしまった。きっとこれからは白い目で見られることになるんだ。

半径二メートル以内に近寄るなー、変態すけべのゆんちゃーん。とか言われるんだ。

ああ、最悪だ……。

やめよう。言い訳するのはやめよう。僕が鏡の中の少女のおっぱいを見ようとしていたことは、天使さんに完全にバレている。

それで言い訳したって、余計に天使さんから白い目で見られるだけだ。

素直になろう。素直に謝ろう。そうすれば優しい天使さんなら、心の中は別としても、きっと許してくれるはず。

でも、謝ることを決めたのはいいけど、さすがに気まずくて、天使さんから逃げるように俯いてしまった。

自分が情けなくて泣けてくる。

「ゆんちゃーん」

そんな僕の心情を察してくれたかのように、天使さんの優しい声が聞こえた。

「……は、はい、すみませんでした。おっぱいを見ようとしていました。ごめんなさい……」

「あははっ、素直でよろしー」

そう言つて優しく頭を撫でてくれる。

「ごめんねー、ゆんちゃんが可愛すぎてさー、ついからかいたくな
っっちゃうんだよー」

天使さんは謝らないでください。だって僕が女の子のおっぱいを見ようとしていたのは事実ですから。それに、たとえそれが僕のおっぱいであっても、鏡に映る少女を自分だと認識できていないのなら、それは見ず知らずの女の子のおっぱいを盗み見ようとしたことと同義です。

結局僕は変態なんです。

「ほらほら落ち込まないー。ゆんちゃんは何も悪いことはしてないんだよー。それどころか、とてもよい傾向だとドベちゃんと思うよー」

とてもよい傾向？ 女の子のおっぱいを盗み見よとしたことかですか？

「自分に興味を持つことは大変よいことです。それがたとえ自分だと認識できていなくてもね、興味を持つってこと自体が素晴らしいことなの。そして前進することに繋がるんだよー」

そうですね、本当にそうなんですかね。僕はただ邪な感情を持っていただけです。そんなのが本当に素晴らしいことなんですかね。

僕にはとてもそうは思えないです。

「ゆんちゃんは偉いんだよ？ 普通ならさ、いきなり女の子になったりしたら、あたしに当たるなりなんなりすると思うよ？ 現実から逃げようと思うよ？ でもゆんちゃんは逃げなかった。それはどうして？」

当たらなかった？ 逃げなかった？

そんなの当たり前です。天使さんに当たるわけないです。だって天使さんが悪いわけじゃないし。それに逃げなかったんじゃないです。単に逃げることにすらできないくらい臆病なだけです。

天使さんは僕を買い被っています。

でも、一つだけ言えることがあります。

「天使さんがいたからです……」

「え？」

僕は臆病だし引つ込み思案だし、それに頭は悪いしなんの特技もないし。そんな僕が今こうしていられるのは、傍に天使さんがいてくれるからです。

僕は女の子になったとか、そんなことは本当はどうでもいいのかも知れません。

僕はただ、天使さんが傍にいてくれることが、優しい天使さんが傍で笑っていてくれることが、ちゃんと僕を見てくれていることが、

嬉しくて仕方がないんです。

僕は一人ぼっちの寂しさを知ってますから。

顔を上げて真っ直ぐに天使さんを見つめる。

「天使さんがいてくれたからです。そうじゃなかったら、僕は今頃頭がおかしくなっていました。全部天使さんのお陰です」

そんな僕の言葉を、きよんとした表情で聞いている天使さん。

なんだろう。僕はまた変なことを言ってしまったんだろうか。

「う、嬉しいことを言ってくれる子だにゃー。なんなのこの可愛い生き物は……」

ぼそつと小声で何かを呟いた天使さんの顔が、みるみる赤く色づいていき、青い瞳が潤んでいく。

お、怒らせちゃったの？　僕はまた天使さんを怒らせちゃったの？　しかも瞳が潤むくらいって、泣くくらい怒りに打ち震えているってこと？

ま、また……またあのお仕置きをされるんだろうか？　あれは頭がおかしくなりそうだから、できれば違うお仕置きにして欲しいです。

「こ、困ったにゃー。ゆんちゃんが強いからだよって言いたかったのに、まさかそうくるとは想定外だったにゃー。どうしようかにゃー。この可愛い生き物をどうしようかにゃー」

お、怒ってる。天使さんが何かブツブツと呟きながら怒ってる。

「て、天使さん……？」

「ふぁい？」

あれ？　なんか様子が変だな。

何故かとろーんとした表情で返事をする天使さん。怒りが頂点を超えてしまつて、ある意味悟りの境地に達してしまつたんだろうか？

「ゆんちゃんは今本当に可愛いにゃー。こんなに可愛いと、ドベちゃんちよつとだけいじめたくなっちゃうにゃー」

相変わらずブツブツと何かを言っている天使さん。

な、なんだか悪寒を感じる。

というより、さっきは天使さんがいきなりバスルームに入ってきてびっくりしてスルーしちゃったけど、髪を纏めてアップにしている天使さんは、何故かバスタオルを体に巻いている。

なんでバスタオルなんか巻いてるんですか？

あれれ？　水着を着てお風呂に入るんじゃないかなかったですか？
バスタオルの下に水着を着てるの？

違うような気がする。水着を着てたら体にバスタオルなんて巻かないよね。

ということは、まさかバスタオルの下は……裸？

まさかそんな、いや、きつとバスタオルの下に水着を着てるに違いない。だってもしバスタオルが落ちちゃったりしたら……。

「ねえゆんちゃん……」

「は、はいっ！」

そ、そうだった。今はバスタオルに気を取られている場合じゃない。天使さんは怒ってるんだった。

あのお仕置きはつらいけど、天使さんを怒らせたのは僕なんだから、嫌とか言ってられない。だから僕は我慢して耐えます。どんとこいです。

あと変な甘い声も出さないように頑張ります。

「今日は初めてのお風呂だし、ゆんちゃんは何もわからないでしょう？ だからね？」

相変わらず惚けた表情の天使さんは、ゆっくりと右手を持ち上げて、そして左の脇で結ばれたバスタオルの結び目に触れた。

「ドベちゃんの体を使って、女の子の体をゆっくりと覚えていこうね？」

その天使さんの言葉と同時に、バスタオルがふわりと下に落ちた。

「あ……」

目を逸らす暇もなかった。頬を赤らめて僕を見つめる天使さんは、やっぱり何も付けていなかった。

一瞬にして頭が真っ白になる。上手く頭が回らない。目の前には生まれたままの姿の天使さん。

「女の子の体のこと、ドベちゃんがきちんと教えてあげるから、自由にしていいんだよ？」

綺麗だった。凄く綺麗だった。僕は目を逸らすことも忘れて、天使さんの裸を見つめていた。

「じゃあまずは、ドベちゃんの体を洗ってみようか？」

そう言うてにっこりと微笑む天使さん。

洗う？ 天使さんの体を？ 僕が？ え？ それって僕が天使さんの体を洗うってことですか？

そ、そんなの……許されるわけがない。そんなの許されるわけがないですよっ！

「そっ、そんなことっ！ ……そ、そんなモルモットみたいなことを、天使さんにさせられません……」

いくらなんでもそれはできないよ。

僕が女の子の体について何も知らないからって、僕のために天使

さんが身を投げ打つ必要なんてない。僕のために天使さんが犠牲になるなんて、そんなの絶対におかしいよ。

「ねえゆんちゃん。ゆんちゃんはあたしが傍にると嬉しいって言うてくれたよね？　ずっと傍にいて欲しいって言うてくれたよね？」

ゆっくりと近づいてきた天使さんが、そっと僕を抱き締めて、そう言った。

「じゃあさ、あたしがゆんちゃんにしてあげたいって思う気持ちは……間違ってるのかなあ？」

してあげたい。それは犠牲じゃないんですか？

「ねえゆんちゃん。ゆんちゃんの気持ちとあたしの気持ちって、一緒だと思わない？」

耳元で囁かれる優しい言葉。でも僕は……。

「は、裸なんですよ？　そ、そんな姿で……僕が変なことをしたら……ど、どうするつもりですか？」

僕が天使さんに何もしない保障なんてない。天使さんは僕を信頼して身を預けてくれるんだろうけど、でも僕は……。

こんなに綺麗で可愛い天使さんが目の前で裸になって、しかも僕に体を洗わせるだなんて、そんなのあまりにも無防備過ぎる。

「いいんだよ？」

耳元で囁かれた甘い誘惑に、ゾクリとした何かが体の中を駆け巡る。

「なんでもしていいんだよ？ さっきも言ったでしょ？ 女の子の体に興味を持つことは凄くいいことなんだから」

なんでもって、なんでもしていいって……そんなこと。

「ね？ だからゆんちゃん。ドベちゃんの体を洗ってみようか？」

体を隠そうともしない天使さんは、まるで挑発するかのようにな、僕の目の前で前屈みになって、そしてにっこりと笑った。

僕は……僕は、最後まで冷静でいられる自身がありません。

対等でありたいと思いました

「じゃあ洗ってみてー」

「え？ あ、あの……ど、どうやって？」

いや、洗ってみてって言われても、何をどうしてどうやったらいいのか、さっぱり分からないんですけど。

さっきまで僕が座っていたプラスチック製の椅子に座り、鏡の方を向いている天使さんは、そんなんでもないことを飄々と言っているのける。

「何をするにも経験が大切だからねー。ほらほら、ボディークリームをスポンジにつけてあわあわしてー」

ちよ、ちよつと待ってくださいよ。本当に僕に体を洗わせるつもりなんですか？

「で、できません……ごめんなさい、僕にはそんなこと……できません」

手が震える。顔を上げられない。顔を上げれば鏡越しに天使さんの裸を見てしまう。

本当は見たい。凄く見たい。それに触ってみたい。天使さんの綺麗な白い肌をこの手で触れてみたい。

でもそんなことをすれば、僕は何をしてしまっかわからない。僕のためにその身を犠牲にしようとしている天使さんの気持ちを、きつと僕は踏みにじってしまう。

それだけはダメだ。そんなことになったら、おっぱいをチラ見するどころの話じゃなくなる。天使さんの顔をまともに見れなくなってしまう。

そして、もう二度と天使さんの素敵な笑顔を見れなくなってしまうかも知れない。

そんなの絶対に嫌だ。

「ねえゆんちゃん」

俯いたまま動こうとしない僕に、天使さんが優しく声をかけてくれる。

「あたしだつて勇気を振り絞つてこんなことしてるんだよ？」

天使さんの声は少し震えていた。

勇気？ そっか、そうですね。危険を犯してまで僕に肌を晒して、身を挺して女の子について教えてくれようとしているんですもんね。

「こんなことをして、ゆんちゃんに嫌われないかってね。そう思うと怖くってね」

え？ 僕に嫌われる？

「あたしにだって怖いものがあるんだよ？　あたしはゆんちゃんに嫌われるのが怖い……」

そんな、そんなこと……嫌うだなんて、そんなことないですっ！
僕が天使さんから嫌われることはあっても、僕が天使さんを嫌うだなんて、そんなことっ！

……あ。

『じゃあさ、あたしがゆんちゃんにしてあげたいって思う気持ちは……間違ってるのかなあ？』

天使さんがさっき僕に言った言葉。

『ねえゆんちゃん。ゆんちゃんの気持ちとあたしの気持ちって、一緒だと思わない？』

僕に……してあげたい気持ち？　僕と一緒に？

天使さんがいなくなったら、つらいのは僕だ。天使さんに嫌われたら、悲しいのは僕だ。天使さんに見捨てられたら、寂しいのは僕だ。

僕は自分のことばかりだ。僕がつらいから、僕が悲しいから、僕が寂しいから。

「一緒じゃないです……」

「え？」

天使さんと一緒だなんてとんでもないです。僕のことを想ってくれている天使さんと、自分のことばかり考えている僕とじゃ、全然違います。

悔しくて涙が出てきた。前は何かあっても涙なんて出なかったのに、なんだか涙もろくなつたような気がする。

女の子になつたから？ あはは、都合のいい時だけ女の子になつたせいにするのは、女の子に失礼だよな。

もっと強くなりたい。天使さんみたいに、何かあっても笑顔でいられる強い人になりたい。そしてきつとなれる。頑張ればきつとなれる。

だって、目の前に最高の見本がいるんだから。

「いつか一緒になりたいです……」

「へ？ い、一緒って、それはさすがに気が早くない？ ま、まあ、あたしはかまわないけど、というよりむしろ大歓迎だけど」

気が早いんですか。そうですね。いきなり天使さんみたいになろうとしても、それは無理ですし、口ではなんとでも言えますから。

「ど、どうしよう。一緒って、ゆんちゃんから一緒になろうって誘われるなんて考えてもいなかったよ……しかもこんなに早く！」

有言実行、強くなつた僕を見せてこそ、言葉に真実の力が宿るんですね？ さすがです。

しかも僕の生意気な発言をかまわないと言ってくれたばかりか、大歓迎とまで言ってくれるなんて、器が大き過ぎますよ。

「でもこのまま押し倒したらゆんちゃんを直接タイルに寝かせることになるし。そうなると冷たいだろうし痛いだろうし。最初の思い出で嫌な経験をする、次に繋がらなくなるし……。いつそあたしが下に……。いやいや、それはだめだよ、最初はあたしがリードしてあげないと……。だがしかし！ このチャンス逃してもいいものなのかっ！」

天使さんは可愛いけど格好いいなあ。憧れるなあ。

「湯船の中は？ この雰囲気継続させつつゆんちゃんを湯船に誘えば……。これはいける」

それなのに僕はなんて器が小さいんだ。

「僕がバカでした……。自分の矮小さを知りました」

「あ、あたしに全部任せてくれればいいから」

僕が頭を下げると、さっきから何かブツブツと呟いていた天使さんは、キラキラと輝く瞳で僕を見つめながらコクリと頷く。

なんて寛大な人なんだ。僕の過ちを責めるどころか、自分が全て飲み込んであげると言ってくれてるんだ。

僕は一体何をしているんだ。天使さんは全裸になって、僕のためにその身を犠牲にしようとしているのに、しかも僕がどんな過ちを

犯そうと、全て受け入れてくれるとまで言ってくれているのに。

僕は自分のことばかりで、やましい気持ちばかりで。

ここで天使さんの気持ちに答えられなかったら、それこそ僕は最低の人間になってしまう。

煩惱を捨てるんだ。色即是空。心を静かに、大河の流れのように、穏やかに。

瞳を閉じて軽く深呼吸をしたのち、水着の肩の部分に両手を添えて、そして一気に引き下げた。

その反動でぶるんとおっぱいが震える。

恥ずかしい。凄く恥ずかしい。でも天使さんは羞恥心に耐えて僕に裸を晒したんだ。それで僕はっかり水着を着ているなんて……。

そんなの対等じゃない！

天使さんと僕が対等だなんて、おこがましいにも程があるのは十分理解しているつもりだけど、でもそのくらいの気持ちでいかなないと、天使さんの隣に立つことなんて永遠に叶いはしないんだ。

「はあ？　ちょ、ちょっとゆんちゃん何やってんの？　なにいきなり水着を脱いじゃってるの？　なにこれ？　あたし挑発されてるのかにや？」

天使さんが動揺している。僕がいきなり水着を下ろしたから、身の危険を感じたのかも知れない。それでも逃げる素振りを見せず、

それどころか僕を凝視している。

さすがです。

確かに僕が裸になるのは、危険と思われるでも仕方がないですね。これではまるで、天使さんを襲おうとしているように思われても仕方がないです。

そんなつもりはないといくら口で説明したって、そう簡単には信用してもらえないのも分かってます。

信頼を得るのはそう簡単なことじゃないんですよ？ 口だけだと思われても仕方がないですよ？

一步一步、確実に実績を積んでいかなければならないですよ。

道は険しく遠い。

「危険なことをしているのは百も承知です！ ですが、これは僕なりの誠意のつもりです！」

水着を腰の位置まで下ろし、スポンジを手にとってボディソーブを付ける。

ここで天使さんに手を出さずにことを成し遂げれば、僕の言葉にもほんのちよつとだけ真実の力が宿るかも知れないんだ。

「百も承知って、はあっ？ しかも半脱ぎっ？ なにそれちょうえろいっ！ てか俯いてたと思ったら、ゆんちゃんの中で何がどういう話になったのっ？」

振り返った天使さんは、驚いたような困惑したような表情で、目を白黒させながら僕を見ている。

わかっています。天使さんが言いたいことは十分わかっています。

「でも大丈夫ですっ！」

「なにがっ？」

僕は、僕は頑張ります！

「ねえなにがっ？ なにが大丈夫なのっ？ いいのっ？ ドベちゃんは何をしてもいいのっ？」

天使さんが息を弾ませながら僕に問いかける。

ですよ、何が大丈夫なのかって聞きたくもなりますよね。でも安心してください。大丈夫なことを今から証明してみせます。

所で、何をしてもいいってなんだろう？ 待てよ、もしや、天使さんは僕に試練を与えているのでは？

試練か、はたして僕に乗り越えることができるのだろうか。でも、それ乗り越えてこそ悟りの境地は開かれるのかも知れない。

望む所です。

僕は僕の誠意が本物であることを証明するため、湧き上る欲望を必死に堪えて煩惱を掻き消し、スポンジを擦ってあわあわにした。

「ちょっとゆんちゃん聞ってるのっ？」

声を張り上げた天使さんが体ごと振り返り、僕の両肩を掴んで揺する。そのせいで天使さんのおっぱいが丸見えになってしまった。

「き、聞いてますけど、あの……ま、丸見え……」

それを横目でチラッと見てしまったのは紛れもなく事故です。本当に事故なんです。

子猫にやんでした

「ねえねえゆんちゃん、速く体を洗ってお風呂に入ろうよー」

「は、はい……」

僕の両手を握り、キラキラした瞳で見つめる天使さん。それはいいんですけど、だから全部見えちゃってますよ。目のやり場に困ります。

「あの……どこから洗ったらいいんですか？」

いざ洗おうとしても、何をどうしたらいいのかさっぱり分からない。

「んー、んじゃ首から洗ってもらおうかにゃ」

そう言って天使さんは鏡の方に向き直った。よかった、もう全部丸見えて理性が吹き飛んでしまう所だった。

心臓は破裂しそうに高鳴っているし、顔が熱い。こんなことで本当に天使さんの期待に答えることができるのだろうか。

ダメだダメだ、色即是空、心頭滅却すればおっぱいも脂肪の塊。気持ちを切り替えるんだ。

よし、まずは首からか。了解しました。

緊張する。女の子の肌をこんなに間近で見るのは勿論のこと、触れるのも初めてだ。

高鳴る鼓動を聞きながら、ボディークリームを泡立てたスポンジで天使さんの首にそっと触れる。

凄く細い。ちょっとした力を含めると折れてしまいそうだ。それにこうして間近で見ると、肌が透き通るように白くてきめ細かいのがよく分かる。

本当に綺麗だ。

天使さんの言う通りだ。こうして触れなければ分からないことって、たくさんあるんだなあ。

「感想は？」

につこりと微笑みながら天使さんが僕に問いかける。

「凄く綺麗で、それでスベスベです」

「あはは、ありがと。でもスポンジで触ってるのにスベスベなの分かるの？」

それもそうだ。

「あ、いえ、見た感じがスベスベだなあって思いました」

変なことを言ってしまった。ちょっと緊張し過ぎて混乱しているみたいだ。落ち着かないと。

「直接触ってみなよ？」

直接か、確かにそれならスベスベかどうか分かりますね……って、へ？ 直接って？

僕を見てにつこりと笑った天使さんは、スポンジを持っていた僕の右手の手首を掴んで強引に引き寄せる。

「ちよっ？ 天使さんっ？ ちよっと待ってください——」

抵抗する間もなく、僕の手は天使さんの胸に触れた。

ふにゅつとした柔らかな感触。全身の血が沸騰するほど熱くなり、咄嗟に手を引こうとしてスポンジが手から落ちる。

「てっ、天使さんダメですっ！ こんなダメですよっ！」

頭が真っ白になり、必死に手を引こうとしながら叫び声を上げた。

「落ち着いてゆんちゃん。ゆんちゃんは何も悪いことはしてないんだから。落ち着いて、深呼吸しようか？ あたしも一緒にするからね？」

優しく落ち着いた声と、そして僕を見つめる穏やかな瞳。

「でっ、でもっ、でもっ！」

何度も手を引こうとしたけど、掴まれている右手は微動だにしない。僕より体が小さい天使さんの、どこからそんな力が湧いてくる

のか。

でも、掴まれた右手は痛くもなんともない。本当に優しく握ってくれている。

「ゆんちゃんはこれから、女の子についてたくさん勉強しないといけないの」

そ、それは分かってるつもりです。でもやっぱり、こんな天使さんが可哀想です。

「あたしから教えられるのが嫌なら、誰か他の人に聞く？ 確かにそれでもいいけど、でもそれはあたしが嫌なの」

え？ それってどういうことですか？

「ゆんちゃんに教えるのはあたしでありたいの。これはあたしが望んでることなんだよ。分かって……もらえないかな？」

ちょっとだけ困ったような、そんな表情で笑う天使さん。

本当に、心から僕のことを想ってくれているんだ。

「いいんだよ、ゆんちゃん」

そう言うてにつこりと微笑んだ天使さんは、僕の右手を引き寄せて、そして抱き締めてくれた。

直接触れ合う肌と肌。驚きと緊張の割には、不思議と心が落ち着いていた。

暖かったんだ。天使さんが凄く暖かった。

「どう？ 触れてみた感想は」

「暖かくて、凄く柔らかいです。そしてやっぱりスベスベでした」

天使さんの体は、凄く細くて、でも信じられないくらいに柔らかでスベスベだった。

「ゆんちゃんを感じてることは、あたしも感じてるんだよ？ ゆんちゃんは暖かくて、柔らかで、凄くいい匂いがして、綺麗なんだよ」

僕が感じていることを、天使さんも感じている？ そうか、そうなんだ。天使さんが僕に何を教えたいのか、やっと少しだけ分かったような気がする。

天使さんが女の子について教えてくれようとしているのは、勿論わかってる。でもそれとは別に、肌に直接触れることで、ぬくもりを教えてくれようとしているのかも知れない。

「さすがはあたし、雰囲気作りは完璧。これでこのまま体を洗いっこして湯船につかれれば、しっぽりにやつぷーん」

何か小声で呟いた天使さんは、さらにきつく僕を抱き締める。

気が付けば、自然と天使さんを抱き締めていた。そしてそのまま、しばらく天使さんのぬくもりを感じていた。

落ち着きを取り戻し、再度鏡の方に向き直った天使さんの背中を、スポンジで優しく擦る。

首、肩、腕、背中、後ろから洗える所は大体洗い終わった。

「天使さん、大体洗い終わりました。次は髪の毛ですか？」

「え？ まだ終わってないよ？」

そう言って天使さんは頭の後ろで両手を組んだ。

「前も洗わないとだめだよ？」

「え？」

前？ 前って、え？ 前も僕が洗うんですか？

「そ、それはちょっと……」

さすがに前はマズい。色々な意味でマズい。理性が銀河の彼方へと吹き飛んでしまう。

「恥ずかしい？」

ちよつと悪戯っぱく聞いてくる。もしかして試されてるのかな？でも、さすがに前は洗えない。

だって、両手を頭の上で組んでるっていうことは、後ろから胸や太もを洗えっていうことなんだよね？

天使さんに他意はないのかも知れないけど、それはちよつとえつち過ぎる。しかもそんな天使さんのあられもない姿が、鏡越しに全部見えてしまう。

そ、想像しただけで鼻血が出そう。

「ここまでかな。後ろで恥ずかしがりながら必死に頑張るゆんちゃん、鏡越しに十分堪能したし、この辺で作戦を第二段階に進めるかじゃ」

どうしたらいいのか分からず、スポンジを握ったまま俯いていたら、天使さんが小声で何かを呟いた。

何かと思つて顔を上げると、それと同時に天使さんが僕の方へと向き直る。

「ちよ、こっちを向くと見えちゃいますよっ！」

すぐに視線をそらしたけど、また見てしまった。これは事故だ、そつだ事故に違いない。決して視線をそらすのが一瞬遅れてなんかない。

「あたしもゆんちゃんを洗ってあげる。それならちよつとは恥ずかしくないんじゃないかな？」

天使さんが僕を？ 確かにそれなら僕が洗うよりは恥ずかしくないかも知れないけど、でも正面から天使さんを見ることになってし

まう。

それは余計に危険だ。

「で、でもそれだと、天使さんの、その、あの……見えてしまいます」

「目を瞑ってればいいじゃん」

はっ！　そうかつ！　目を閉じていればいい話なんだっ！

なんでそんなに単純なことに気が付かなかったんだ。もしかして僕は天使さんの裸を見たいがために、無意識に目を閉じるという選択肢を除外していたのかも知れない。

僕は、僕はなんて欲望にまみれているんだ。これじゃあ株に手を出した父さんに文句なんて言えない。

悟りの境地って遠いなあ。

「そ、それもそうですね。あはは、なんで気が付かなかったんだろ？　も、勿論やましい考えなんてなかったですよ？　そんなの全然ないです。……でも」

「でも、なに？」

「い、いいんですか？　天使さんから洗ってもらっちゃって」

問題はそこだ。僕は教わる立場なのに、そんなことをしてもらってもいいんだろうか？　天使さんは僕にとって先生のような存在だ

し。

本音を言えば物凄くドキドキするし期待してしまう。

可愛い女の子から体を洗ってもらうとか、これはもう男のロマン意外の何ものでもない。

「慣れてきたらゆんちゃんも洗ってよ。なんなら目を瞑ったままでもいいし。それであいこだにゃん」

ちよつと気になつて横目でチラッと見たら、両手を頭の両側に付けて、首を傾げながら猫のような仕草をしている。たぶん両手で猫の耳を表現しているんだ。

か、可愛い、可愛過ぎる。可愛い子猫ちゃんが全裸で……ぐはつ。
て、天使さんもこう言ってることだし、せつかくだから洗ってもらっちゃおうかな？

や、やましい気持ちなんか全然ないけど。本当にないけど。

「な、なら……お、お願いしてもいいですか？」

目を閉じてその場に正座する。ああ、凄くドキドキする。女の子に体を洗ってもらうとか、こんな幸せなことをしてもらってもいいんだろうか？

「よつ、よつしゃあつ！」

ちよつと薄目を開けてみたら、何故か天使さんがガッツポーズを

していた。なんでだろ？

ガッツポーズをしたいのはむしろ僕です。

大暴れでした

「ゆんちゃん、首を洗うからうーってして」

「うー」

天使さんの言いつけ通り顎を上げる。

「はい、お利口さんだねー」

すぐ傍で感じる天使さんの息づかい。首にスポンジが当たる感触。

目を閉じているせいで確認することはできないけど、たぶん膝立ちした天使さんが、正座している僕の前で首を洗ってくれているんだろう。

少しくすぐつたいけど、凄く気持ちいい。

それ以上に、僕の前で全裸で膝立ちしている天使さんを想像すると……は、鼻血が出そうだ。

首から肩へ、そこから腕へとスポンジが移動していく感触。人から体を洗ってもらうのなんて初めてだけど、なんというか、王様にもなった気分だ。

「次は脇の下を洗うから、ばんざーいってしてくれるかにや？」

「ばんざーい」

言いつけ通り両腕を上げる。

「ゆんちゃんって基本的に素直なんだよにゃー。お人形さんみたいでちょうど可愛いにゃー」

ぽつりと呟く天使さん。天使さんはたまに小声で何かを呟く時がある。声が小さくて何を言っているのか聞き取れないけど。

「あたしの教育次第でとんでもない子に成長しちゃうにゃ。真っ白なキャンバスをあたし色に染め上げるにゃ」

一体何を言ってるんだろう？

「ど、どうかしました？」

「え？ ……はっ！ しまったにゃ！ つい心の声が漏れてたにゃー！」

天使さんの動揺したような声。心の声？ どういうことだろう？

「心の声ってなんですか？」

「あ、いや、えーと……あ！ そうそう！ ゆんちゃんは素直でオリ口さんだにゃー、って思ったのがつい口から出ちゃったにゃー！ えへっ！」

素直でオリ口？ そ、そうなのかな？ なんだか褒められてるみたいで凄く嬉しい。

褒められた経験なんかないから、照れてしまつて顔が熱くなつていくのを感じる。

「そ、そんなことないですよ。素直なんじゃなくて、相手が天使さんだから信頼しているだけです。疑う必要なんてないですから」

「うっ、心に楔を打ち込むような純粋な発言っ、ドベちゃんの欲望を浄化されてしまうにゃ。やはりゆんちゃんは手強いにゃ……」

また小声でひとり言を言っている。もしかして、信頼と寄りかかりは違つと、そう言いたいのだろうか？

そうだ、そうに違いない。思い出せば分かることだ。

さっきの天使さんはどうだった？ 僕を信頼し、僕にその身を委ねてくれたけど、もし僕が天使さんの信頼を裏切ったとしても、それらを全て飲み込むと言つてくれたんだ。

身を委ねるのはあくまでも自分の責任。たとえ過ちが起きたとしても、身を委ねた自分の責任。

盲信するのではなく、己の信念を貫く凜とした女性。それが天使さん。

それに引き替え僕はどうか。口では信頼していると言っておきながら、結局は天使さんにおんぶに抱っこしているだけだ。

僕の言葉は……なんて軽いんだ。

「僕は……」

「ん？ どうしたのかにゃ？」

「僕も天使さんのように凜とします！」

胸を張って声を張り上げる。

「……ああ、うん。……え？」

惚けるような天使さんの返答。なるほど、口で言う前に態度で示せと言いたいんですね？

全くその通りですね。勉強になります。

「ゆ、ゆんちゃんの脳内会議が、どう結論に達したのかはよく分からないけど、あんまり激しく動くと……おっぱいが暴れるよ？ あたしのと違っておっきいんだから」

天使さんの荒い息づかいが聞こえる。どうしたんだろう？ それとおっぱいが暴れる？ 確かに胸を張って声を張り上げたら、胸からたゆたう振動と重量感が伝わってきた。

鏡を見る分には、美少女のおっぱいを見てみたいで興奮するけど、目を閉じているとやっぱり邪魔なだけだ。

しかも重いし暴れるし。

天使さんは女の子だから、おっぱいなんか見飽きてるよね？ だって自分にも付いてるんだから。だから僕が動いておっぱいが暴れると、不快なのかも知れない。

だから息を荒げてるのかな？

……ちょっと待って。おっぱいが暴れて不快？　もしや……。

天使さんのおっぱいは動いてもそれほど暴れない、というより暴れるだけの大きさが無い。

もしかして、おっぱいが小さいことを気にしてるのかな？　それで僕のおっぱいが暴れるのを見て怒ってる？　その怒りを我慢しているから息づかいが荒くなってるの？

そうだそうに違いない。僕はなんてことを。

天使さんは見た目が小学生くらいだし、おっぱいが小さくても当たり前だし、それに僕はそういうのが凄くいいと思う。

でも天使さんからしたら、僕の暴れるおっぱいが癢に障るのかも。

「……ご、ごめんなさい」

「へ？　急に謝ったりしてどうしたの？　また脳内会議で不可思議な結論に達したのかにや？」

さすがは天使さん。既に怒りを身の内に封じ込め、惚けた声で優しく語りかけてくれる。

遠回しに「気にしなくていいよ、怒ってないから」って言ってくれているんだ。

でも天使さんの心を傷つけてしまったことには変わらない。

今度から暴れないように気をつけよう。

「まあいつか。天然のゆんちゃんは可愛いし。じゃあ脇の下を洗うから、そのままばんざーいつてしててね？」

「は、はい！ できるだけ動かないように、頑張つてばんざーいつてします！」

「……ああ、うん、そんなに頑張らなくてもいいけどね」

どこか呆れたような声。やっぱり怒ってるんだ。もう二度とおっぱいを暴れさせてはダメだ。気合を入れないと。

下腹部に力を込め、背筋を伸ばして胸を張る。

「んじゃ、洗うねー」

その言葉と同時に、脇の下にスポンジが触れる感触が伝わった。

「ひゃんっ？」

あまりのくすぐったさに、体が勝手にビクンと跳ね上がる。しかも口から変な声が出た。

そして胸から伝わるたゆたう振動。

マズい、おっぱいが暴れている。

「す、すみませんっ！ もう二度と動きません——ひゃうんっ！」

ちよんちよんと軽く突つつくように、脇の下に触れるスポンジ。その度に体が勝手に跳ね上がり、胸に伝わる振動が大きくなっている。

ど、どうしよう。目を閉じているからよくは分からないけど、どうも僕のおっぱいは自由気ままに暴れまくっているみたいだ。

天使さんは気にしているというのに。なんとかしないと。

「ご、ごめんなさ——ひゃうんっ！ ご、ごめんな——ひゃんっ！
ご、ごめ——きゃうっ！」

「はあはあ、な、なにこれ？ なんで謝ってるのか分からないけど、これはくせになるよ……。もっといじめたくなるにや、これは堪らないにや！」

スポンジの動きが、突つつくからなぞるに変わった。

触れるか触れないかの微妙な感触が、脇の下から腰の方へと下りて行き、そしてまた上がっていく。

くすぐったさの中に、言葉にできないゾクゾクとした何かが溢れ出す。

「あくっ、くううっ、ご、ごめんなさ——ひゃうっ、う、動くつもりは——くううっ、勝手に体がっ——ひううっ」

なぞるような動きのお陰で、体が大きく跳ね上がらなくなった

けど、代わりにビクビクと小さく何度も跳ねてしまう。

そのせいで、相変わらずおっぱいは暴れているみたいだ。しかも変な甘い声まで出始めている。

片手で口を塞いで、残った片手でおっぱいを固定できれば、ある程度は問題が解消されるのかも知れないけど、天使さんから「ばんざいをしていなさい」って言われているから、そうすることもできない。

こうなったら根性で耐えるしかない。

全身に気合を入れて歯を食い縛る。

「あれ？」

くすぐったくない。ゾクゾクした感覚も消えている。

いつの間にかスポンジの感触が消えていた。

「て、天使さん？」

不安になつて声をかけてみたけど、返事は返ってこない。

もしかして、僕がじっとしていらなくて、おっぱいが暴れに暴れたから……。

怒って浴室から出て行ってしまったんじゃない？

「てっ、天使さんっ？」

声を張り上げて呼んでみたけど、やっぱり返事はない。

心に言い知れない不安が広がっていく。

「てっ、天使さんごめんなさいっ！ 目を開けますっ！」

嫌われてしまったのかも知れない。その恐怖で頭が真っ白になり、目を開けて周りを見渡した。

「…………え？」

天使さんはいた。それも僕のすぐ隣に。でも……。

「てっ、天使さんどうしたんですかっ？ 大丈夫ですかっ？」

天使さんは確かに僕の隣にいた。四つん這いになり、惚けたような表情で息を荒げている。

しかも瞳が虚ろだった。

「…………だ、だいじょう…………ぶ。ちょ、ちょっと理性が…………崩壊しかけただけ…………だから。だ、大丈夫だから、心配…………しないで」

「どっ、どこか具合が悪いんですかっ？ とっ、とにかくお風呂から出て横にならないとっ！ あ、あと病院にっ！」

顔を真っ赤にして、苦しそうに息を荒げる天使さん。しかも四つん這いということは、立っていることもつらいんだ。

きつと体調が悪いのを隠して僕に付き合ってくれていたんだ。

どうして、どうして気付けなかったんだ。

「くっ、悔やむのはあとだっ！　とにかくベッドに横にしないところ！」

天使さんは裸だからとか、今はそんなことを言っていられない。

抱きかかえるのは難しい。いくら天使さんが小さいといっても、僕の体も小さくなっている。

今の僕にどれだけの力があるのか、自分でも把握していないのに、無理をして抱きかかえて途中で転んだり、天使さんを落としてしまったりしたら本末転倒だ。

いや、救急車だ、すぐに救急車を呼んだ方がいい。そのあとで天使さんをベッドに寝かせた方がいい。

「待っていてください天使さんっ！　すぐに救急車を——？」

苦しんでいる天使さんの耳元で呼びかけて、救急車を呼ぶために浴室を出ようとしたら、右手の手首を掴まれた。

「こんな……」

振り返ると、四つん這いのまま僕の手首を掴んでいる天使さんが、ぼつりと呟き、そして音もなくゆらりと立ち上がる。

「こんな至福のひと時を棒に振ってたまるかっ！」

いまだに苦しそうに息を荒げている天使さんの、虚ろだった青い瞳がキラリと輝く。

「ゆんちゃんっ！」

「はっ、はいっ！」

「ドベちゃんぜんっぜん大丈夫だからっ！　ほんつとに大丈夫だからっ！」

天使さんの力強い言葉には、確かに魂が籠っていた。

どんなに苦しくても、どんなにつらくても、天使さんは立ちあがった。

僕に教えるために、それだけのために、天使さんは立ちあがったんだ。

強い？　そんな甘いものじゃない。

それはまさに、精神が肉体を凌駕した瞬間。

僕は見た。天使さんの青い瞳に、自己犠牲という名の猛る炎が宿っているのを。

星空と流れ星でした

天使さんの頬っぺたがぷっくりと膨らんでいる。

どうしよう、完全に怒ってる。

「あの、天使さん？」

「……にやに？」

僕に視線を合わせようとせず、そっぽを向いたまま、さらに頬っぺたがぷくーっと膨らんでいく。

「お、怒ってます？」

「……別に。怒ってにやいけど」

いや、これは絶対に怒ってる。

天使さんが倒れたあと、大丈夫と言い張る天使さんを無理やり浴室から連れ出そうとしたけど、「絶対に出ないっ！ 絶対にやめないつ！」と喚き散らしながら大暴れして途方に暮れてしまった。

女の子の体について、僕のために身を挺して教えてくれようとし

ているのは凄く嬉しい。でも無理はして欲しくない。

いくら精神が肉体を凌駕したとはいえ、体調が悪くて倒れたことには変わりないんだから。

あれから体調が回復したのか、確かに天使さんは元氣過ぎるくらいに元氣だったけど、もしここで天使さんの身に万が一のこともあれば、悔やんでも悔やみきれない。

でも天使さんは体が小さい割に力が強いせいで、僕では強引に浴室から連れ出すこともできず、ただひたすらお願いするしかなかった。

僕はただ天使さんのことが心配だったんだ。

「泣くのは卑怯だよねー。泣いてお願いとか断れないじゃないかー。ゆんちゃんはずるいよねー」

そっぽを向いている天使さんが、わざと僕に聞こえるくらいの声で、ブツブツと呟いている。

あ、あれは泣こうと思って泣いた訳じゃないですよ。天使さんのことが心配で、そしたら自然と涙が溢れてきたんです。

僕が泣いてしまったせいで、体の洗いっことは中止になったものの、一度湯船に浸かってからじゃないと浴室を出ないと主張する天使さんと、すぐに浴室を出てベッドに横になって欲しいと主張する僕と、お互いの意見が真っ二つに割れてしまい、しばしのこう着状態に陥ってしまった。

どうも天使さんはどうしても湯船に浸かりたかったらしい。

その場にしゃがんで、梃子でもその場を動かないことを猛烈にアピールする天使さん。結局、僕が折れる形となって湯船に浸かることにした。

裸のまましゃがんでいるよりは、湯船に浸かった方が絶対にいいと思ったし。

かなり不機嫌だったけど、それでも髪をお湯に浸けると痛むからということで、僕の髪を結ってくれた天使さんは、やっぱり優しい。湯船には桃の香りがする桃色の入浴剤が入っていた。そのお陰で、お湯に浸かっている部分は見えないから、やっとまともに天使さんの顔を見ることが出来る。

でもどうしよう。天使さんは怒ってるみたいだし、この雰囲気は凄く気まずい。

「あ、あの……天使さん？」

「……にやに？」

「あの、い、ごめんなさい」

「……別に。ゆんちゃんに謝ることじゃないし」

僕の方を見ようとせせず、返ってくるのはそっけない答え。そしてまた頬つぺたがぶくーっと膨らんでいく。

うつつ、謝っても許してもらえない。しかも僕と一定の距離を取るように離れてるし。

こういう時はどう接したらいいのかな。

いくら考えても、僕の辞書に友達という言葉は見つからない。友達対応マニュアルもない。

このままだとお風呂から出ても、この気まずい雰囲気が続いてしまうかも知れない。

なんとかしないと。

困り果てながら周りを見渡してみる。浴槽って一般的には長方形なんだと思ってたけど、新しい浴槽は円形でかなり広い。僕と天使さんが一緒に入っても、もう一人くらい入れる余裕がある。

しかも二段構造で、浴槽内の周りが底より一段高くなっている。多分半身浴をするために座れるようになってるのかな？

あとは浴槽の壁側に取り付けられた液晶画面と、色んなスイッチ。そのスイッチの中の一つに“ジェットバス”って書いてあるから、お風呂の機能を使うためのスイッチみたいだ。

ジェットバスって泡がブクブク出るやつかな？ それとも勢いよく水流が噴き出すやつかな？

あ、泡ならバブルか。それによく見たら、ジェットバスのスイッチの横にバブルバスのスイッチもあった。

ちょっと押してみたいなあ。ぶくぶくのお風呂に入ってみたい。

でもただでさえ天使さんは怒ってるのに、余計なことをしたらもつと怒らせてしまうかも知れないから、今はやめておこう。

その隣にあるブラックライトってなんだろう？　ライトだから光を調節する機能なのかな？　でもブラックって黒？　黒い光？　意味が分からない。

「あの、天使さん。ブラックライトってなんですか？」

スイッチを指さして聞いてみた。

「興味があるんなら押してみれば？」

そっけなく返ってくる返事。うつつ、気まずい。

このままだと会話も続かないし、とりあえずスイッチを押してみることにした。

「うわっ！」

いきなり浴室の証明が消え、暗闇の中で浴槽のお湯が桃色に輝きます。しかも壁や天井に煌めく星座が浮かび上がり、幻想的な空間が出来上がった。

「凄い……プラネタリウムみたいだ」

さらにどこからともなく聞こえてきた甘ったるい音楽。

「あ、流れ星……凄い、本物の夜空みたいだ」

星は明滅してるし、流れ星まで再現している。しかも幻想的に輝く桃色のお湯。

「天使さん天使さんっ！ ちょっと凄いですよっ！ ほら流れ星がつ！ あ、またっ！ ……あれ？」

驚きと興奮で天使さんに話かけたら、さっきまで離れていた天使さんが、いつの間にか近くに寄って来ていた。

頬っぺたはまだ膨らんだままだけど。

「えいつ」

思い切って頬っぺたを指で突っついてみた。

「ぶー」

口から息を吐き出し、またすぐに頬っぺたが膨らむ。でも僕をチラッと見た天使さんは、ちょっとだけ笑っていた。

「えいつ」

もう一度突っついてみる。

「やめろよー」

口から息を噴き出した天使さんは、恥ずかしそうに笑いながらそう言っつて、さらに近寄って来る。そしてまた頬っぺたを膨らませた。

よかった、思ってたほど怒ってないみたいだ。

「えいっ」

「甘いっ！ えいっ！」

「あうっ」

もう一度突つつこうとしたら、手を掴まれてカウンターで突っつかれた。

「て、天使さんっ、どこを突つついてるんですかっ。突つつくなら頼っぺたにしてくださいよっ」

天使さんが突つついてきたのは僕の胸。しかもピンポイントで先端を突つつかれた。

浴槽の中は入浴剤で見えないから、たぶん偶然だろうけど、かなりびっくりした。

「びっくりするから、突つつくなら頼っぺたにしてください。はい」

合図をして頼っぺたを膨らませる。

「えいっ！ えいっ！」

「あうっ？ ひうっ？」

せっかく頼っぺたを膨らませたのに、それを無視して胸を突つつ

いてくる。しかも両手の指で両方の胸の先端をピンポイントに捉えられた。なんて的中率だ。偶然って怖い。

「ねえゆんちゃん」

ケラケラと悪戯つ子のように笑っていた天使さんが、急に真面目な顔でさらに近寄って来る。

「さっきの続き……しよ？」

さっきの続き？ さっきの続きって体を洗うことかな？

色っぽい声と、僕を見つめる妖艶な瞳。室内が暗いのと、お湯が桃色に光ってるせいでそう見えたのかも知れない。

天使さんもなんだか本当に大丈夫みたいだし、続きを教えてもらっても問題はないのかな？

「じゃあ電気を付けますね。えーと、どのスイッチを押せばいいん——？」

スイッチを見ながら選んでいたら、不意に背中に感じた柔らかな感触。

ふにやりとした柔らかさの中に、小さくて硬いものが二つ。これはもしか？ まさか？

「てっ、てててっ、天使さんっ？」

僕の背中に抱きつき、胸を押し付けた天使さんは、スイッチに伸

ばしていた僕の手首を掴んでいた。

「このままでいいよ。このまま洗いつこしよ？」

「え？ こ、このまま？ でもこのままじゃ洗えないですよ」

「まあ、見ててよ」

そう言つて僕の手首を動かし、伸ばしていた指でスイッチを押した。

「え？ うわっ、凄いつ！」

浴槽の底や側面から泡が噴き出し始め、もこもこと膨らんでいく。これが噂に聞く泡風呂か。初めて見た。

「泡は一緒なんだから、この泡を使って洗いつこしちやおうよ」

泡を手にとった天使さんは、にっこりと笑いながら僕を見つめる。やっぱり室内が暗いせいで、天使さんの笑顔が凄く色っぽく感じってしまう。

「お風呂浸かっていると、ゆんちゃんも目を開けていられるみたいだし、このまま向かい合つて洗っちゃおうよ。あたしがゆんちゃんを洗うから、ゆんちゃんもあたしを洗って？ このまま素手で……全部」

え？ 僕も洗う？ このまま？ 素手で？ ……しかも全部？

「そ、それはちょっと……」

ゴクリと唾を飲み込み、頭に浮かんだ妄想を首を振って掻き消しながら、小声で天使さんに答える。

「これも大切な勉強だよ？ でもゆんちゃんが恥ずかしくて出来ないのなら、まずはあたしが洗ってあげる」

「あうっ——んんっ！」

お湯の中で、天使さんの指が僕の胸に触れる。体がビクンと震え、咄嗟に手で口を塞いだ。

暗い室内と輝く星空。それに桃色に光る泡。そして聞こえる甘い音楽。

凄く幻想的で、僕を見つめる天使さんは綺麗で可愛くて……それでいてどこか妖艶で。

なんだか変な気分になってくる。

「ゆんちゃんが可愛すぎるのが悪いんだよ。あたし、もっ……」

ん？ なんの音？ なにか音が聞こえる。

「てっ、天使さんっ、あうっ、今なにか聞こえませんでした？ んんっ」

「またそんなこと言って、逃げようとしたって逃がさないから」

に、逃げる？ せっかく天使さんが女の子について教えてくれて

るのに、逃げるつもりなんてないけど、今変な音が聞こえた。

「あうっ、ほっ、ほらまた、聞こえませんか？　なんだろ？　インターホンかな？　ひうっ」

以前のインターホンの音と違うけど、たぶん誰かお客さんが来てるんだ。

「んんっ、ほっ、ほらまた、お客さんが来てるんですよ。ちょっと天使さん、胸を触るのやめてください、話ができませ——あうっ」

「聞こえない。いいじゃんほっとけば」

いや、放って置けないですよ。大事な要件かも知れないし。

「ちょっと僕が出てきます」

僕の胸を丹念に洗ってくれていた天使さんの手を取り、向き直ってそう言つと、お風呂から出ようとした。

「ちょい待った。今の姿でまともに対応できるのかにや？　ゆんちゃんはもう小日向優じゃないんだよ？」

手首を掴まれて再度引き寄せられ、後ろから抱き締められて、耳元で囁かれた。

それもそうだ。誰ですかとか聞かれても、なんて答えたらいいのかすら分らないのに、お客さんに対応なんかできないよね。

それはそうと、後ろから抱き締められているせいで、背中から伝

わる感触が堪らない。

嬉しいやら恥ずかしいやらで、ドキドキしながら全身が熱くなつてしまった。

「あたしが出てくるよ。あたしも一応はこの家の養女だし、ゆんちゃんよりは上手く対応できるしね。それに……」

ゆらりと立ち上がった天使さんに、思わず視線をそらす。だから不用意に裸を見せないでください。目のやり場に困りますから。

「あたしとゆんちゃんの夢のひと時を邪魔してくれちゃって。……ぶつとばしてやる」

ざぶざぶとお湯の中を移動する音が聞こえて、たぶん浴槽から出たのか、浴室の扉が開く音がする。

「ちょっと待ってて。すぐに戻るから」

そう言つて、扉を閉める音が浴室に響いた。

それにしても凄いお風呂だ。広いし色々な機能が付いてるし、天使さんとの勉強はちょっと大変だけど、こんなに凄いお風呂だと入るのが楽しみになる。

「でも一人だとちょっと広過ぎるかな？　なんだか寂しい」

ひとりぽつんと取り残されて、もこもこの泡風呂に浸かりながら
呟いてみた。

しばらくして、なにか口論をしているような声が、家の方から聞
こえてきた。

『アザゼル様っ！ リリスの適合者が見つかったというのは本当な
のですかっ！』

『うるさいっ！ そんなの知らないっ！ ここにはあたししかいな
いからっ！ お前は帰ればーかっ！』

一人は天使さんの声だ。もう一人は知らない声。声からして女性
みたいだけど、天使さんの知り合いなのかな？

でも、アザゼルってなんだろう？

『リリスの肉体を獄界から持ち出したのは、アザゼル様だというこ
とは分かっておりましたっ！ それをどうこう言うつもりは毛頭あ
りませんっ！ ですが適合者が見つかったというのなら話は別です
っ！』

「うるさいっ！ 帰れっ！ お前本当にぶつとばすぞっ！」

な、なんだか不穏な雰囲気だ。今にも殴り合いの喧嘩を始めそう。

特に天使さんが。

あまり仲がよくないのかな？

『ルシフとベルジはだんまりっ！　なんとかアシュから聞き出しましたけれどっ！　わたくしにも獄界の長としての責任がありますっ！　それにリリスの魂が見つかったのならっ！　ルシフもベルジもアシュも、それにわたくしも会いたい！に決まっていますでしょうっ？』

『うるさいっ！　そのうち会わせるから帰れっ！　今はゆんちゃん
と二人つきりで静かに暮らしたいんだっ！　帰れっ！』

ど、どうしよう。止めに行った方がいいのかな？　でもなにも知らない僕が止めに入っても、余計に話がこじれるだけかも知れないし。

それに喧嘩の仲裁とか、そんな高等技術は僕にはない。

『そのうち合わせる？　まさか本当に適合者がっ！　リリスの魂が見つかったのですかっ？』

『えっ？　ちっ、違うっ！　今は間違いだからっ！　今は嘘だからっ！　ここにはあたししかないからっ！』

『レヴィッ！　アザゼル様をよろしく頼みますっ！　わたくしはリリスに会ってきますっ！』

『招致しました』

あれ？　もう一人いたのか。若い女性の声だ。

『はっ、離せっ！ おいつ！ ゆんちゃんに触ったら殺すぞっ！
見ても殺すぞっ！ あたしが本気で怒ったらどうなるかっ！ お前
わかってんだろっ！』

『お好きなように。あなた様から殺されるのなら、わたくしは、い
え、今あなた様を抑えているレヴィも、獄界に生きる全ての者達も
本望でしょう。喜んでこの命を差し出します。失礼します』

なんだか殺すとか殺させるとか、凄く物騒な話をしてるし、天使
さんが怒りを露わにして叫んでる。

やっぱり止めに行った方がいい。行っても僕は邪魔なだけかも知
れないけど、でも行った方がいい。

天使さんが叫んでるんだ。助けを求めてるんだ。今助けに行かな
かったら、僕は天使さんに守られているだけの、最低の人間になっ
てしまう。ただの臆病者になってしまう。

僕は変わるんだ。天使さんのように強くなるって決めたんだ。

両手で頬つぺたを叩き、気合を入れて浴槽から立ち上がる。それ
と同時に廊下を走る激しい足音が聞こえ、浴室の扉が勢いよく開い
た。

扉の前に立つ壮年の女性。黒い髪を結い上げ、縁のない眼鏡と黒
いタイトスカートのスーツを着込んだ、ちよつとキツそうだけど真
面目そうな雰囲気。

なんとなく、社長秘書って感じかな？

肩で息を荒げ、涙で潤んだ赤い瞳が僕を見つめていた。

この人がさっきまで天使さんと口論していた人？ 確かにちょっと怖そう。

「本当に……リリースなのですか？」

女性の震える小さな声に我に返り、咄嗟に胸を手で隠した。

「これで……これでやっと、アザゼル様の孤独なる時が終わるのですね」

扉の前からゆっくりと歩き出した女性は、ぼろぼろと涙を零して、そして僕を抱き締めた。

「お帰りなさい、リリース」

耳元で囁かれる優しい声。

えーと、リリースってなに？ え？ どういうことですか？

秘密の花園は罠でした

僕を抱き締める社長秘書さんは、どこか懐かしいような、どこか悲しいような、でもとても優しい笑顔で僕を見つめている。

その赤い瞳は、鏡の中の僕の瞳にどこか似ていた。

それとさつき僕に向かって言った言葉。リリース、そう社長秘書さんは確かに言った。

リリースってなんだろう？ 人の名前なのかな？ 僕に向かって言うてたけど、僕は社長秘書さんとは初対面のはずだし。

『はーなーせーっ！ ゆんちゃんっ！ ゆんちゃんっ！』

天使さんが呼んでる。今はそんな余計なことを考えてる時じゃない。行かないと。天使さんが僕を呼んでるんだ。

でも……。

「は、離してもらえますか？ て、天使さんが呼んでるんです。行かないと……」

恐る恐る聞いてみる。本当は力任せに振りほどいて天使さんの元に駆け付けたいけど、多分それは無理だ。

社長秘書さんから感じる言い知れない威圧感。僕より身長が高いつか、力が強そうとか、そういうんじゃない。

何故かは分からないけど、どうしても分らないけど、でも分かる。

この人は途轍もなく強い。いや、強いなんて生易しいものじゃない。上手く言えないけど、もっと強大で異質ななにか。

でもなんでだろ？ 不思議と恐怖は感じない。この人に抱き締められていると、何故かとても心が落ち着く。凄く懐かしい気がする。「天使さん？ ああ、アザゼル様のことですか。今はそう呼びしているんですね。やはりと言うべきか、記憶は残っていないのですね」

今は？ 記憶？ なんだろう、なにか凄く引つかかる。

「本当にあなたという人は、自分のことは二の次で、いつも周りの心配ばかり。全部自分で背負い込んで、その悲しそうな瞳で笑っていましたね。たとえ記憶が残っていなくても、本当に……何も変わっていないのですね」

さらに強く抱き締めて、そして僕の頬に熱い涙がポタポタと零れ落ちる。

『はなせーっ！ お前なんか大っ嫌いだっ！』

『わっ、私は大好きですっ！』

『うるさいっ！ 知るかばーかつ！ ゆんちゃん大丈夫っ？ ゆんちゃん返事してっ！ ゆんちゃんっ！』

呼んでる。天使さんが呼んでる。行かないと。

「は、離してください。僕は行かないといけないんです」

天使さんの声を聞くと、心に心がザワつき、気持ちが焦る。なんとか振りほどこうとしたけど、社長秘書さんはビクともしなかった。

「は、離してくださいっ！ お願いですから離してくださいっ！ 天使さんが呼んでるんですっ！」

無理やり離れようとしても、僕の力ではどうにもならない。それでも体を振り、両手に力を込めてもがいた。

「好きですか……」

「え？」

「アザゼル様、いいえ、天使さんのことが好きですか？」

僕を離れた社長秘書さんは、僕の両肩に手を置いて、とても真面目な表情で聞いてくる。

え？ いきなり好きとか聞かれて、はい好きです、って僕が答えられるとも思ってるんですか？ 僕を誰だと思ってるんですか？ そんなこと言えるわけがないでしょう？

「そ、それは……」

それは……好きですよ。だって僕、天使さんに恋しちゃってるも

の。

口に出しては言えないけど。

僕を見つめる真っ直ぐな瞳から、思わず視線をそらしてしまった。

「相も変わらずの恥ずかしがり屋ですか。初々しいというか、なんというか。リリスらしいと言えばリリスらしいですが、これではアザゼル様も大変ですね」

小さくため息を吐いた社長秘書さんは、でも嬉しそうに笑った。

わ、悪かったですね。そうですね。そうですよ恥ずかしいですよ。でもしょうがないじゃないですか、恋愛とかしたことないもの。

それに天使さんは、僕が内気で根暗で友達が一人もいなくて、その上いきなり女の子になっちゃって。そんな僕を放って置けない優しい人なんです。だから傍にいてくれるんです。

好きとか言っちゃって、天使さんに迷惑をかけるだけだし、困らせるだけですから。

僕は頭は悪いけど、それくらいは分かってるつもりです。

「ならお嫌いですか？」

え？ 嫌いって、天使さんのことが？

「きつ、嫌いなわけがないじゃないですかっ！」

「ですよね」

そう言って、社長秘書さんにはっこりと笑った。

「好きだと顔に書いてありますよ？　すぐ顔に出るのも以前のままですね」

え？　か、顔に？　え？　ちょ、ええっ？

「あつ、いやっ、ぼっ、僕は別にそういうのはですねっ。いやちよっつっ、あのっ、ですからそれはそのっ」

か、顔に出てたの？　ど、どうしよう。このことを天使さんに告げ口されたら、僕はもう生きて行けない。

は、恥ずかしい。恥ずかし過ぎて何をどうしたらいいのか……ふ、布団を被って泣きたい。

顔中が燃えるように熱くなって、もう俯くしかなかった。

「相変わらずリリスの可愛らしさは圧倒的と言うか、狂氣的ですね。いえ、この恥らいつぷりは以前にも増して危険な色香を醸し出しているというか。リリス亡き後、獄界随一の美しさを持つと謳われたルシフでも、これではまったく齒が立ちませんね」

こ、こうなったらお願いするしかない。誠意を込めてお願いするしか、それしかもう僕に残された道はない。

「アザゼル様に想いを寄せて幾千年。リリス亡き後、アザゼル様の悲しみを癒すのは自分だと、都合のいい女だと思われてもかまわな

いと、たとえ体を弄ばただけで捨てられようとも、それでもかまわないとまで言い放ちながら、全然かまってもらえなかったルシフが不憫でなりません」

でも、もし断られたら？ いや、脅されるかも知れない。テレビのサスペンスとかでよくあるもの。

バラされなくなかったら金を払え、みたいな。

ど、どうしよう。僕、お金とか大して持ってないよ。お年玉とかお祝いとかを地道に貯蓄したやつを全部合わせても十万円くらいしかない。

「リリース復活の報を聞いて、果たしてルシフは正気を保っていられるか。暴走するならまだしも、下手に病まれると厄介ですね」

「ぜつ、全財産は十万円くらいですけど！ 全部あげるので僕が天使さんを好きなことは黙っててくださいっ！ たっ、足りない所はなんでもしますからっ！」

言ってしまった。「なんでもする」は本当は言っちゃいけないんだ。サスペンスでやってたもの。

断る勇気さえあれば、事件に巻き込まれることもなかった。そして悲しい結末を迎えることもなかったんですよお嬢さん。って崖の上で説得するのが得意な人が言ってた。

「……天然っぷりも健在ですか。これはひと波乱ありそうですね」

社長秘書さんはジト目で僕を見つめている。

やっぱり十万円じゃ足りなかったの？ 社長秘書さんは着てる黒いスーツも高そうだし、見るからに気品がある。

僕にとって十万円は大金だけど、社長秘書さんにとっては、きっとはした金なんだ。

それになんでもするって言うても、僕にできることなんてたかが知れてる。

あ、そうだ。確か僕の部屋に幼稚園の頃から貯めてた豚の貯金箱があった。部屋はかなり変わっちゃってたけど、探せばどこにあるかも知れない。あれを合わせれば。

いやいや、あれは小銭しか入ってないから三千円くらいしかないかも。

あー、どうしよう。どうしたらいいの？

「安心してください。余計な口出しはしませんよ」

そう言って、社長秘書さんは僕の頭を撫でてくれた。

え？ 秘密にしてもらえますか？ あとから脅すとかないんですか？

「ほ、本当に……告げ口とかしないでもらえますか？」

「ええ、絶対に言いません。約束です」

クスクスと笑いながら、コクリと頷いた。

この人、凄くいい人かも知れない。

『い、痛い……』

『アザゼル様っ！ 如何なされましたかっ！ 不詳このレヴィめがアザゼル様に手傷を負わせてしまったというのですかっ？ 甚だっ、甚だ面目次第もございせんっ！ 腹切って自害致しますっ！』

『じゃあ離せよっ！ はーなーせーっ！』

『それは承知致しかねます。腹は後程切りますので』

あ、社長秘書さんの雰囲気呑まれて天使さんのことをすっかり忘れてた。

『ちよつと太ももが痛い……』

『ふ、太ももでございますかっ？』

『うん、ちよつと痛い。どうなってるか分からないから……見て？』

『なっ、なんとっ？ アザゼル様の崇高なる太ももをっ？ 不詳このレヴィめに見分しろと仰せなのですかっ？ そっ、そのような破廉恥極まりないことをっ？ おっ、恐れ多いことでございますっ！』

……ちよつと気になつたんだけど、天使さんとレヴィさんっていう人の会話を聞いてたら、なんだか天使さんが一方的に毛嫌いしているだけのような気がしてきた。

社長秘書さんもそうだけど、レヴィさんって人も、なんだか悪い人じゃないような気がする。

『ねえ、ちよつと見てみてよ……』

『でっ、ですがっ！』

『どうなってるのか、自分で見るのが怖いの。お願い、見て？』

『そっ、そそそそっ、そこまで仰られるのならば致し方ありますまいっ！ 不詳このレヴィッ！ けっ、けけっ、見分仕りまして候っ！』

うん、レヴィさんって人は確実に天使さんの口車に踊らされている。僕ですら罠だつて丸わかりですよ。

「あの……」

「どうしました？ リリス」

「いいんですか？ レヴィさんって人が天使さんに騙されかかってますよ？」

もしこの人が悪人なら、レヴィさんを騙そうとしている天使さんを、放っておかないんじゃないかな？

社長秘書さんは僕から視線をそらすと、二人の声がする方へと顔を向け、凄く楽しそうに笑った。

「いつものことです。いいえ、ずっと待ちわびていた日常が帰ってきたのです」

ずっと待ちわびていた日常？　どういう意味だろ？

「それとレヴィはアザゼル様至上主義者ですからね。それなのによく時間を稼いでくれました。お陰であなたが本当にリリースであると確信することができました」

とても優しい声。見た目はちょっと怖そうな人だけど、やっぱりこの人は悪い人じゃないみたいだ。

『とっ、ととっ、特に異常は見当たりませんっ！』

『も、もうちょっと上、それで内側……』

『うっ、上でございますかっ？　しっ、しかも内ももっ？　なんと破廉恥なっ！　なんと破廉恥極まりないっ！』

内もも。天使さんの丈が短めなワンピースからチラリと見える白い内もも。

恥ずかしそうにワンピースをたくし上げて、潤んだ青い瞳で見つめながら「お願い、見て？」とか言ってるんだろうか。

ロマンだ。僕だったら騙されると分かっているても喜んで騙されま

す。

『こっ、この辺りで、はあはあ、い、い、ごきますか？』

『も、もうちょっと……上』

『もっ、もももっ、もう少々上でございますか？ はあはあ、ですが、こ、これ以上は、はあはあっ、これ以上はっ！』

レヴィさんの声が完全に裏返っている。

こ、これ以上はなんなんですか？ ま、まさか……み、見えちゃうんですか？ たくし上げられて露わになった内もものその奥に、その奥に見える秘密の……。

だ、ダメだ、想像しただけで……ぐはっ。

『おりやあっ！』

『ぐはあっ！』

あ、やられた。秘密の花園を覗こうとして、天使さんから膝蹴りを喰らったのがはつきりと目に浮かぶ。

レヴィさん。あなたの勇氣は忘れません。たとえ罠だと分かっているけど、あえて釣られるのが男のロマン……あれ？ レヴィさんって声からすると女性だよな？

なんで女性のレヴィさんが、天使さんの色仕掛けという罠にハマったんだろ？

そうか、たとえ女性でも天使さんほどの美少女だと釣られてしま
うのか。なるほど、可愛いつて色々と得なんですね。

『この変態っ！ お前に見せるパンツなんてないんだよっ！ おら
おらっ！』

『ぐふっ、がはあっ、む、無念っ、だっ、だが悔いはないっ！ ご
ほおっ』

『ばーかばーかつ！ お前はここで死んでろっ！ ゆんちゃーんっ
！ 今行くよゆんちゃーんっ！』

必死に僕を呼びながら、ドタバタと廊下を走る音が聞こえる。

「レヴィが落ちましたか」

僕の肩から手を離れた社長秘書さんは、タイルに落ちていたバス
タオルを拾うと、僕の肩にそっとかけてくれた。

「そう言えば自己紹介がまだでしたね。わたくしはサタンと申しま
す。こちらの世界では六三佐丹ろくみつさたんと名乗っております。以後お見知り
おきください」

スーツの内ポケットからサツと名刺入れを取り出し、シュパツと
名刺を一枚取り出すと、斜め四十五度にお辞儀をして僕に名刺を差
し出した。

おお、格好いい。できる女性だ。まさにキャリアウーマンって感
じだ。

「い、ご丁寧に。あ、ありがとうございます」

名刺を貰うのは初めてで、なんだかドキドキする。

いいなあ、名刺とか格好いいなあ。僕も名刺が欲しい。

ペコリと頭を下げ、両手で名刺を受け取った。

—— ヘルズ・コーポレーション 代表取締役会長兼相談役 六
三 佐丹 ——

へえ、名前からすると日本人なんだ。瞳が赤いから外国の人かと思ってた。……え？ 会長？ うわっ、凄く偉い人だった。秘書さんじゃなくて会長さんだった。

ん？ 他になにか書いてある。

—— アザゼル様と共に歩む会会長・アザゼル様を見守る会会長・アザゼル様を愛でる会会長・アザゼル様の魅力を朝まで語る会副会長・愛 ラヴアザゼル応援部長・アザゼル激写倶楽部副部長・獄界百合っ娘倶楽部副部長補佐……——

なんだか怪しい役職名がズラリと並んでいる。

「ゆんちゃんっ！ ゆんちゃん無事っ？ 変なことされてないっ？」

あ、天使さん。

勢いよく浴室の扉が開き、肩を激しく上下させて息を荒げた天使

さんは、僕と視線が合うと躊躇せずに跳び込んできた。

「ゆんちゃんゆんちゃんゆんちゃーんっ！」

「え？　ちょ、ちよつと天使さ——うわあああっ？」

なんとか天使さんを受け止めたけど、あまりの勢いにそのまま湯船の中に倒れ込んだ。

水しぶきが上がり、空中を桃色の泡が舞う。

「ゆんちゃん大丈夫っ？　なんともないっ？　変なことされなかったっ？」

僕に抱きついた天使さんは、険しい表情で必死に問いかける。

「は、はい、なにもされてませんし大丈夫です」

天使さんがあまりにも必死で、ちよつと驚きながらも、なんとか笑顔で答えることができた。

「よ、よかった……本当によかった……」

僕の胸に顔を埋めながら、そう言ってきつく強く抱き締めてくれる。

僕はなんて幸せ者なんだろう。こんなに心配してくれる人がいて、幸せ過ぎて、夢を見ているみたいだ。

もしこれが夢なら、どうかもう少しだけ目を覚ましませんように。

ふと視線を上げると、俯いた佐丹さんが指で涙を拭っていた。

うさぎだぴょんでした

「お前ら帰れっ！」

リビングのソファ―に座っている天使さんは、隣に座る僕にしがみつき、対面に置かれた同型のソファ―に座ってお茶をすすっている佐丹さんと、その後ろに立っている女性を交互に睨んでいる。

とりあえず僕にしがみついているうちは大丈夫みただけど、さっきまでは本当に二人に噛みつきそうな勢いで、止めるのに一苦勞した。

どうも天使さんは僕のおっぱいを揉んでいると落ち着くらしい、というのをさっき知って、今現在も揉んでもらっている。

天使さんは見た目は小学生くらいだし、きっとお母さんが恋しいのかも知れない。

僕のおっぱいで落ち着くなら安いものだ。それになんだか可愛い子猫をあやしてるみたいで、心がほっこりするなあ。

たまに先端を爪で引っ搔かれて変な声が出そうになるけど、そこは口を手で押さえて根性で乗り切るしかない。

お客さんの前で変な声を出したら、バカなんじゃないかとか思われそうだし。

それはそうと、佐丹さんの後ろに立っているのが、さっき天使さ

んから騙されたレヴィさんか。

僕や天使さんより年上なのは間違いないけど、佐丹さんよりは若い。たぶん二十歳前後なのかな？ 女性の年齢はよく分からないけど。

海の底のように深く蒼い髪を後ろで纏めたポニーテール。そして佐丹さんと同じ赤い瞳は、切れ長で隙がない印象。

着ている黒い和服は男性物なのかな？ 着物とはちょっと違う簡易的な和服。本で読んだことがあるけど、着物で言う男性用の普段着は着流し。女性用は浴衣っていうんだとか。

浴衣じゃないから着流しなのかな？ なんで男性物を着てるんだろ？ 凄く綺麗な人なのに。

腰に帯を無造作に巻き、右肩を脱いでいる。そのせいで右上半身が露わになってるけど、見えてるのは肌じゃない。

首、肩、腕、腰、そして足。顔以外全てが黒一色。

光沢を消した鉄とでもいうのかな？ 金属なのかどうかは分からないけど、鎧というのが一番しっくりくるような。でも鎧というのは柔軟性を感じるし、体のラインが露わになるくらい薄そう。

ボディースーツを鎧にしたような、そんな不思議な服を着流しの下に着込んでいた。

でもそれはどうだっていい。問題は別にある。

レヴィさんの腰に巻かれた帯。その左側に差された物体。

僕の目がおかしくないのなら、その物体は超危険な代物のような気がする。いや、気がするんじゃないくて確実に危険だ。

あれ、日本刀だね？ 本物じゃないよね？ まさか本物じゃないですね？

しかもリビングに向かう最中にレヴィさんの背中を見たけど、無地の黒い着流しの背中には、赤い文字で“ 武士道 ”とデカデカと刺繍されていた。

武士だ、武士が目の前にいる。

なんというか、現在も侍や忍者が町を闊歩していると信じて疑わない間違った知識を持った外国の人、って感じた。

しかも真顔で鼻にティッシュを積めているのがなんとも。

笑ったらダメですよ？ 笑ったら斬られますよね？ だって武士だもの。

「ええ、要件さえ済めば帰ります。元よりアザゼル様の邪魔をするつもりなど、毛頭ございませんので」

湯呑をテーブルに置いた佐丹さんは、そう言って穏やかに笑う。

「今帰れっ！ すぐ帰れっ！ お前らと話すことなんて何もないっ！」

眉間に皺を寄せ、怒りを露わにさせて、今にも噛みつきそうな勢いの天使さん。普段のおっとりして優しいような印象とあまりにもか
け離れていて、ちょっと驚いてしまった。

佐丹さんは悪い人じゃなさそうだし、それにレヴィさんも悪い武士
じゃなさそうだけど、天使さんは完全に嫌ってる。

「てっ、天使さんっ、ほらほらっ、おっぱいおっぱいっ」

「やーらかいにやー」

跳びかかりそうなのをなんとか押さえて、天使さんの手を僕のお
っぱいに触れさせる。

途端にふにやりと力が抜けて僕にぴったりとくっついた天使さん
は、おっぱいを揉みながら猫のように喉を鳴らし始めた。

大きくて邪魔なだけかと思ってたけど、このおっぱい、なかなか
使える。

それにしても、この三人は前に何かあったのかな？

お風呂での一悶着のあと、着替えを済ませてリビングに来たんだ
けど、やっぱり天使さんの服は小さい。

黒いキャミソールとデニムのミニスカートは、ある程度伸縮性が

あつたお陰で、なんとか着ることはできたけど、小さいことには変わらない。

キャミソールはまるでタイツみたいにピッタリと張り付いていて、胸の形や大きさ、それに腰のラインもはつきりと浮き出てしまつて、はつきり言つて裸と変わらないんだよね。

しかも歩くと揺れるし。

それにミニスカートはスカートの機能をほとんど果たしていない。立っていればなんとかパンツを隠してくれるけど、座ると丸見えだよこれ。

ただでさえ女の子のパンツを履くのにはかなり抵抗があつたのに、その上丸見えとか、もう恥ずかしくてどうにかなりそう。

服を着てるのに、これじゃあ裸より恥ずかしい。いや、だからつて脱いで裸になるのは嫌だけど。

しかも鏡を見ないと自分が女装した変態に思えるんだよね。

パジャマの方が断然マシだけど、お客さんの前でパジャマっていうのもちよつと問題があるし、ソファアに置いてあつたクッションを膝の上に乗せてスカートの中身は隠せたし、今はこれで我慢するしかない。

しばらく静まり返っていた室内が、佐丹さんの声で破られた。

「帰れと言われて帰る訳にはいかないのです。今回の案件は天界も動いていますの——」

「リリスを見捨てたくせに……」

佐丹さんの言葉を遮るように、でも静かに囁かれた天使さんの声。その小さくて震えた声は、思わず涙が出てしまうような、そんな悲痛な響きを含んでいた。

瞳を見開く佐丹さん。後ろに立つレヴィさんも、下唇を噛んで顔をそらした。

気がつくと僕は天使さんを抱き締めていた。

壊れてしまいそうだったんだ。抱き締めないと、繋ぎ止めておかないと、天使さんがバラバラになって消えてなくなりそうだったんだ。

「天界も獄界もおんなじだ。お前らはリリスを見捨てた。優しいリリスを利用した。もう誰も信じない。ゆんちゃんはおたしが守る。あたしはゆんちゃんさえいれば、あとは何もいらぬ。お前らがどうなったって、そんなの知らない」

僕の胸に顔を埋めて、必死にしがみつくと天使さんは、きっと泣いている。

「帰ってください……」

二人は悪い人じゃないのはなんとなく分かる。でも天使さんが悲しんでる。震えて泣いている。

許さない。天使さんを悲しませるような人は許さない。天使さんを苦しめるような人は許さない。

善人でも悪人でも、そんなの関係ない。そんなのどうだっていい。

天使さんから笑顔を奪うような人は、僕が許さない。

「帰ってくださいっ！ 話すことはもうないですっ！ すぐに帰ってくださいっ！」

天使さんをきつく抱き締め、精一杯の声で叫んだ。

「返す言葉ありませんが、このまま帰る訳にはいかないのです」

そう言って立ち上がった佐丹さんは、険しい表情で僕を睨む。

こ、怖い。目の前の佐丹さんから感じる言い知れない威圧感。背筋を冷たい何かが駆け上がり、体が勝手に震え出す。

逃げたい。天使さんを連れてこの場からすぐにでも逃げ出したい。

弱い僕と小さな天使さんを、簡単に捻り潰せる力を目の前の二人は持つてる。そんな気がする。

怖いけど、凄く怖いけど、でも逃げるわけにはいかない。逃げたってきつと逃げ切れない。

「覚悟はしていたつもりですが、やはりリリースに嫌われるのは堪えますね」

ゆっくりと歩きだした佐丹さんに、ビクリと体が大きく震える。

ど、どうしよう。僕に勝てる相手じゃないけど、なんとかして天使さんだけでも守らないと。どうにかして天使さんだけでも守らないと。

でもどうやって？

思考がグチャグチャになり、心臓の鼓動が破裂しそうなほどに跳ね上がる。

息が苦しい。

必死に考えても、結局僕は無力だ。きつく目を閉じて天使さんを目一杯抱き締める以外、どうすることもできなかった。

「どうかお話だけでもお聞きください」

静かで悲しそうな声。怒りは微塵も感じなかった。

目を開けて声のした方に顔を向けると、ソファーから移動した佐丹さんが、フローリングの上に立って僕を見つめていた。

泣くのを必死に堪えたような、そんな表情で。

「どうか、お願い致します」

そしてその場に両膝をつく、両手を床について額を床に擦りつけるほどに前へと屈む。

「なにそれ？　そうやって優しいゆんちゃんにでも訴えるつもり？　またそうやってあたしから奪うつもりなんだ……」

「て、天使さん……？」

顔を上げた天使さんは、ケラケラと笑いながら土下座している佐丹さんを見た。

「あたしからリリスを奪っておいで、今度はゆんちゃんを奪うつもりなんだ？」

天使さんは笑顔でそう言ったけど、でもその笑顔はいつもの優しい笑顔からかけ離れた、狂気的な恐ろしさを感じた。

「ゆんちゃんはリリスじゃない。リリスとは関係ない。ゆんちゃんはあたしが守る。リリスの歩んだ道は歩ませない。……もう二度と離さない。お願いだから帰って。そしてここには二度と来ないで」

佐丹さんから視線をそらし、僕を見つめる天使さんからは、佐丹さんに向けられていた狂気的な笑顔が消えていた。代わりに慈しむようにリリスという名前を呼び、そして僕に抱きついた。

そう言えば、佐丹さんも僕に向かってリリスって呼んでいた。

僕とリリスっていう人は何か関係があるのかな。

天使さんもそうだけど、佐丹さんもリリスっていう人の名前を呼

ぶときは、凄く優しくて、でもそれ以上に悲しい瞳をしていた。

ソファアの後ろに立ち尽くしているレヴィさんだっそうだ。天使さんの言葉を聞いて、眉間に皺を寄せて俯いている。

きつと三人にとって、とても大切な人だったんだ。

そんな三人が、リリスっていう名前を呼ぶ時に見つめる先は僕。でも僕はリリスなんて名前じゃないし、そんな名前を聞いたこともない。

だけど、思い当たる節なら一つだけある。

以前の僕と現在の僕との相違点。それはこの体。

もしかして、もしかしてリリスさんって、この体の本当の……持ち主なの？

「もう御免だ……」

ポツリと呟かれた声。声の主はレヴィさんだった。

「もう御免だっ！ 私ではリリスを止められなかったっ！ サタン様もっ！ ベルジもっ！ アシュもっ！ 団長もっ！ リリスを敵

視していたルシフもっ！ リリスを姉のように慕っていたレティですら止められなかったっ！ あれ以来一日たりとて後悔しなかった日などないっ！ 死ねばよかったっ！ リリスの代わりになれるのなら私が死ねばよかったっ！ サタン様は何度己の命を絶とうとしたことかっ！ それでもっ！ それでもリリスの最後の願いを――」

「やめなさいレヴィッ！」

立ち上がった佐丹さんがレヴィさんに駆け寄る。

レヴィさんの右手は腰に差された刀の束に添えられていた。

「主を残して先に逝く非礼をお許しく下さいっ！」

止めに入った佐丹さんを左手で払い除け、右手で刀を引き抜く。

吹き飛ばされた佐丹さんは壁に激突し、それでも立ち上がろうとして崩れ落ちる。

「アザゼル様っ！ どうかっ！ どうか我らに今一度機会をっ！ リリスを守る機会をお与えくださいっ！ この命を以ってお頼み申し上げますっ！ 御免っ！」

「やめなさいレヴィッ！ これは命令ですっ！ あなたを失ったらわたくしは――」

一瞬の出来事だった。白刃を逆手に持ち替えたレヴィさんは、その場に片膝をつき、躊躇せずに腹部へと目がけて突き刺した。

あまりにも一瞬の出来事で、僕の思考は真っ白になったまま停止

した。

「ゆんちゃんがびっくりして泣いたらどーすんだ、ばーか。ね、ゆんちゃん」

「え？ あれ？ えーと……は、はい」

レヴィさんの右手を押さえつけて、僕に微笑みかける天使さん。そして天使さんの手の上には、僕の手も添えられていた。

啞然とした表情のレヴィさん。いやいや、啞然としたいのは僕ですよ。

白刃がレヴィさんの腹部に突き立てられる瞬間を僕は確かに見た。でも白刃の切っ先は、レヴィさんが着ている鎧スーツに僅かに突き刺さった所で止まっている。

一秒にも満たない刹那の瞬間。僕にしがみついていた天使さんが、常識を凌駕した速さで移動してレヴィさんを止めたんだろう。

それはそんなに驚くことじゃない。だって天使さんと散々追いかけてこして、天使さんの信じられない身体能力をこの目で見たから。

その天使さんの速さと同等の速さで……僕も移動していた？

僕はいつの間にも移動したんだ？ 全然覚えてない。

「リリス……お前は一体？ 本当にリリスなのか？」

揺れる赤い瞳でレヴィさんが僕を見つめる。

いや、いやいやいや、本当にリリスなのか？ とか聞かれたって分からないですよ。体はリリスさんなのかも知れませんが、中身は僕ですからね。

もしかして、佐丹さんもレヴィさんも凄い勘違いをしてるんじゃない？

中身が僕だっということを知っているのは、たぶん天使さんだけ。佐丹さんもレヴィさんも、どうも僕をリリスさんだと思い込んでるみたいだ。

どうしよう。中身が偽物だってバレたら怒られるんじゃないのかな？

な、なら、とりあえずここはリリスさんに成りきるしかない。

「リリスだよん！ 本物だよん！」

ぴょん、と飛び跳ねて両手を頭の両脇に添え、ウサギのマネをしながら精一杯に笑ってみる。

僕を呆然と見つめる天使さんと、口をあんぐりと開けて放心状態のレヴィさん。

……あれ？

しまったあつ！ マネをする以前に僕はリリスさんを知らなかったあつ！ 僕は一体誰のマネをしたんだあつ！

「……え？ あ、あの、え？ ア、アザゼル様？」

「か、可愛い……」

混乱した表情のレヴィさんが、天使さんに視線を向けて目を白黒させている。一方の天使さんは、顔を赤らめて僕を凝視していた。

は、恥ずかしいっ！ いきなりウサギのマネとか何をやってるんだ僕はっ！

レヴィさんが混乱するのは当たり前だし、天使さんが恥ずかしくて顔を真っ赤にするのも当然だ。

自分の笑顔がかなり引きつっているのも感じる。

でも今さら引けないっ！ 今さら引くわけにはいかないっ！ 今さら引いたらただのバカみたいじゃないかっ！

ウサギのマネをしたまま固まっていた体を奮い立たせ、頭の両脇に添えた両手をピコピコと動かす。そしてそのままぴょんぴょんと飛び跳ね続けた。

「リリスだよん！ 本物だよん！ ウサギだぴょん！ ぴょんぴょん！」

し、死にたい。恥ずかしくて死んでしまいたい。でも今さらウサ

ギを違う動物に変更するのは不自然過ぎる。というより、リリスさんはウサギが好きだったんだろうか？ それすら怪しい。

なぜ僕はウサギのマネをしているの？ リリスさんがウサギ好きってどこからきた情報なの？

自分で自分が分からない。

でも、もうこのまま強行突破するしかない。

そう、リリスさんはきつとウサギが好きなんだっ！ そうに決まってるんだっ！ それで行くしかないんだっ！ 勢いでごまかすしかないんだっ！

「ア、アザゼル様……リリスは転生する際に何処が重要な器官に支障をきたしたのですか？ 以前から天然でしたが、あそこまで酷くは……」

「あー、気にしないでいいよー。ちよつと暴走モードに突入して迷走してるだけだから。見てよあの愛らしい生き物。頭が悪そうなのがまた最高に可愛いよねー。ああ、飼い殺しにしたい……」

「リリスはね！ ウサギがね！ 好きなんだぴょん！」

や、止め所が分からないっ！ いつまでこの恥ずかしい子芝居を続けないといけないのっ？ 自分から初めて言うのもなんだけどっ！

しかも飛び跳ねるたびに、おっぱいがたゆんたゆんと大きく揺れるのが、さらに恥ずかしくて耐えられない。

もしかして僕は、物凄く頭の悪そうなことをしてるんじゃないのかな？

ぬくもりでした

「う、うさはね……さ、寂しいとね……し、死んじゃうんだ……
ぴょん」

誰か、誰か僕を止めてっ！ 助けてっ！ 僕がバカでしたっ！
誰かバカな僕を助けてくださいっ！

「……ア、アザゼル様。泣きながら飛び跳ねてますが、止めなくて
もよろしいので？ 確かに可愛いですが、その、可哀想というか……
…見ていて切なくなります」

「もうちよつと堪能してからねー。そのうち耐えられなくなつて、
あたしに泣きついてくるから。そしたらいっぱい抱っこしてあげる
んだー」

「さ、左様で……」

もう耐えられない。もう耐えられないっ！ みんなの視線が痛
いっ！

「て、天使さん、助けてください天使さん。僕もう……耐えられま
せん……ぴょん」

飛び跳ねる気力さえなくなり、ウサギのマネをしたままその場に
立ち止まって、真っ赤な顔でにやにやと笑いながら僕を見つめる天
使さんに助けを乞う。

「おいでー。恥ずかしかったねー。ドベちゃんがよしよしして抱っこしえあげるからこっちにおいでー」

両手を一杯に広げた天使さんが、満面の笑みでそう言ってくれた。

「うわーん、ありがとうございます天使さーんっ！　自分がここまですバカだとは思いませんでしたーっ！」

全てを許し、愚かな僕を受け入れてくれる天使さんの優しさに、今は甘えよう。

反省するのはあとだ。とにかく羞恥心と自分の愚かさでガリガリと削られまくった精神を回復させないと、とても生きて行けない。

「天使さーんっ！」

「ゆんちゃーんっ！」

天使さんに向かって駆け出そうとした瞬間、誰かに後ろから羽交い絞めにされた。

「ひいつ、おっ、お化けえっ！」

怨霊かと思っただけビクビクしながら視線を後ろに向けると、そこには僕を抱き締める佐丹さんの姿があった。

「殺伐とした空気を一瞬にして和やかにしてしまう。リリース、あなただけに与えられた、あなただけの不思議な力。神にすら匹敵する力を持つと謳われたアザゼル様ですら、まったく頭が上がりなかつた母なる存在。無力な人間でありながら、誰もがそんなあなたを愛

しました。今度こそ、今度こそ必ず……守り抜いてみせます」

そうだすっかり忘れてた。佐丹さんはレヴィさんから吹き飛ばされて壁に激突したんだった。

ウサギのマネなんて、本当にしてる場合じゃなかった。

「さ、佐丹さん大丈夫ですか？ 怪我とかしてないです——」

「失礼します」

頭上に影が落ち、同時に佐丹さんの静かな声が聞こえて、ふわりと僕の体が後ろに引かれる。

「ゆんちゃんに触るなあああっ！」

見上げると、空中を舞う天使さんが、右手を振りかざして佐丹さんへと特攻していた。

その様子を顔色一つ変えずに見つめる佐丹さんは、僕を背後に隠すように立ちはだかり、天使さんを真っ向から見据える。

「ぶっ飛ばすっ！」

「甘いですね」

佐丹さんの頭上から襲う天使さんの渾身の右ストレート。大気が振動するほどの凄まじい突きを、佐丹さんは左手一本でゆるりといなす。

威力をそらされて、空中で駒のように回転した天使さんは、音もなく軽やかに床に着地すると、そのまま佐丹さんに一足飛びで突撃する。

「ゆんちゃんはおたしが守るんだあっ！」

「それが可能であるのならば、わたくしも何も申しません」

繰り出される突きと蹴りの嵐。僕の動体視力では追うことすら困難なほど速く、それでいて一撃一撃に信じられない威力を秘めた攻撃を、佐丹さんは風に舞う綿のようにゆくりとかわし、いなす。

まさに剛と柔の対立。

本当は止めないといけないのに、僕は二人の攻防に見とれてしまっていた。

全てを力でねじ伏せようとする天使さんは、純粹で豪胆で勇ましく、とても綺麗だった。

そしてその猛攻を一部の狂いもなくゆるりといなす佐丹さんは、静かで華麗で凜とした響きを持ち、美しかった。

そんな二人の力は拮抗しているように見えるけど、でも……天使さんが圧倒的に不利だ。

全力の天使さんに対し、佐丹さんはたぶん一割も力を出していない。それどころか戦う意志すらない。それを僕の体を感じ取って教えてくれる。

「どういうことだ？ 何故佐丹様が圧倒している？ 相手はあのアザゼル様だぞ……」

いつの間にか僕の隣に移動していたレヴィさんが、愕然とした表情で二人の攻防を見つめながら呟いた。

「あれではまるで……ただの人間ではないか」

え？ ただの人間？ いやいやいや、どうみても人間の身体能力を軽く凌駕してますよ。あんなに速く動ける人間も、あんなに連続して攻撃できる人間もいないと思うんですけど？

その凄まじい天使さんの攻撃を、顔色一つ変えずにいなす佐丹さんはさらに凄いけど。

はっきりに言つて、二人とも人間の限界を遥かに超えている。

それが分からないとか、レヴィさんって本当に武士なんですか？ 僕ですら分かりますよ？

それとも、もしかしてレヴィさんって天然さんなんですか？

「どうしました？ 神力と魔力を併せ持つ最強無比の天使の実力は、まだまだこんなものではないでしょう？ わたくしを倒すのではなかったのですか？」

「黙れえっ！」

苦しそうに顔を歪めた天使さんは、それでも息を吐く間もないほどの連続攻撃を放ち続ける。

でも、さっきまでの速さが徐々に失われ始めていた。

当たり前だ。天使さんは明らかに無呼吸で連続攻撃を放っている。そんなの延々と続けるなんて不可能だ。

「もっ、もうやめてくださいっ！　天使さんが苦しそうですっ！　佐丹さんやめてくださいっ！」

声を張り上げた僕をチラリと見た天使さんは、さらに表情を険しくさせて歯を食い縛ると、攻撃の回転速度を無理やり上げて、なりふり構わず猛攻を仕掛ける。

限界だ。いくらなんでも限界だ。このままだと天使さんが倒れてしまう。

「愛する人から心配されて、どんな心境です？　守るのではなかったのですか？」

「おっ、お前は黙れえっ！」

天使さんの大ぶりの右ストレートが、叫びと共に佐丹さんを捉える。いや、捉えたんじゃない、逆に捉えられたんだ。

天使さんの右ストレートをいなしつつ受け止めた佐丹さんは、そのまま天使さんの手首を捻りながら後ろへと回り込む。それでも攻撃を止めない天使さんは、残る左手で肘打ちを繰り返した。

「ぐっうっ」

「肩が外れますよ」

右手を後ろに捻り上げられた状態での肘打ちは、右肩の関節が外れてしまうのも厭わない、まさしく捨て身の攻撃。

不自然に歪曲する右肩。関節の悲鳴が僕の耳にまで届いたような気がした。

そんな捨て身の一撃ですら、佐丹さんは軽くないし、右手と同様左手も後ろに捻り上げる。

「てっ、天使さんをいじめるなあああっ！」

「レヴィッ！ リリスの唇を奪いなさいっ！」

「へ？」

「え？」

駆け出そうとした僕は、佐丹さんの意外な言葉に意表をつかれ、隣に立つレヴィさんを見上げる。そこには僕と同じく意表をつかれて困惑しているレヴィさんの姿があった。

「ぎよ、御意っ！」

「へっ、ちょ、ちょっとなにをするんですかっ？」

右手に刀を握り締めたままのレヴィさんは、瞬時に表情を引き締めて僕の腰に左手を回すと、有無を言わず強引に抱き寄せる。

「す、すまないリリース。犬にでも噛まれたと思ってくれ」

「ちょ、ちよつとやめてっ！ 天使さん助けてっ！ 嫌だっ！ 天使さん以外とキスなんてしたくないっ！」

必死にもがいても意味なんてなかった。力の差は歴然。左手一本で僕を軽々と持ち上げたレヴィさんの、薄桃色の唇が近づく。

「やつ、やめてえっ！ ゆんちゃんに変なことしないでえっ！ お願いだからやめてっ！ ゆんちゃん逃げてっ！ 逃げてええええっ！」

「てっ、天使さん助けてっ！ こんな嫌だっ！ 初めて恋をしたのにこんなの嫌ですよっ！ 天使さん以外とこんなことしたくないっ！ 助けてっ！ 天使さん助けてくださいっ！」

両手でレヴィさんの顔を押しつけようとしても、僕の力ではどうしようもなかった。

初めて恋をしたのに。初めて好きな人ができたのに。

天使さんに恋をした僕と、弱い僕を心配して傍にいてくれる天使さん。

天使さんが僕に恋をしてくれる可能性なんて、天文学的確率だけど、それでもよかった。

キスできる機会なんて永遠にないかもしれないけど、それでもかまわなかった。

レヴィさんは綺麗で格好いいし、女性とキスを試みて何度か思ったことがあるけど、恋をして初めて気がついた。

好きな人じゃないと、こんなにも嫌なものなんだって。

振り向いて天使さんに助けを求めると、両腕を後ろに締め上げられた天使さんが、両肩の関節が外れそうなほどにもがきながら、涙を流して悲痛な叫び声を上げていた。

「というのは冗談です。やめなさいレヴィ」

「御意」

ストンと両足が床につき、頭の上にポンと手が乗る。

「アザゼル様が最も愛したお前を手籠めにするなど、この私がするはずもないだろう。だが一体どういうことだ？ リリスの危機ですら力を奮わないとは。神力も魔力も感じないのは、力を抑えていたせいではないのか？ まるでアザゼル様は力を失ってしまわれたかのようなのだ」

見上げると神妙な面持ちのレヴィさんが、天使さんを見つめながら小声で呟いている。

よ、よく分からないけど、助かったみたいだ。

全身から力が抜け落ち、へなへなとその場に座り込む。

「ゆんちゃんっ!」

天使さんの声がした方に視線を向けると、佐丹さんから解き放たれた天使さんが、ボロボロと涙を零しながら駆け寄って来るのが見えた。

「て、天使さん……」

跳び込んできた天使さんを受け止めようとしたけど、腰が抜けて体が動かない。

僕に跳びついた天使さんは、そのまま僕を床に押し倒した。

天使さんの甘い香り。全身に感じる天使さんのぬくもり。心に広がっていく安堵。

目を閉じて、ただそのぬくもりを噛み締めた。

不意に天使さんの体が離れ、ぬくもりが離れたような不安に襲われて目を開けると、目の前には涙を流して満面の笑みを浮かべる天使さんの顔が見える。

よかった。いなくなってしまったのかと思った。

「怖かったね？ ごめんねゆんちゃん、ごめんね……」

頬に落ちる熱い雫。

僕はこの人から守られている。もっと強くなりたい。もっと強くなって、この人を守りたい。

「こ、こわくなんて……なかったです」

「うそつき……」

再度天使さんの顔が近づき、ゆっくりと瞳を閉じた。

甘い香り。とてもいい香りで、それでいてどこことなく懐かしい。

これが僕を落ち着かせるためだけの行為だとしても、僕にとっては初めて好きになった人との甘く大切な思い出。

「予想はしていましたが、獄界で魂を浄化させず、天界を通すことなく強制的に転生させるなど、如何に強大な力を持つアザゼル様でも不可能。それでもなお転生させるとしたら方法はただ一つ。魂の契約。やはり力の大半を失ってしまわれたんですね」

遠くで佐丹さんの悲しそうな呟きが聞こえた。

ピーチ味でした

魂の契約？ 強制的に転生させる？ 力の大半を失ってしまった？

意味はよく分からないけど、佐丹さんは確かにそう言った。そしてそれは、きっと僕に関係していることだ。

契約って……うん、それは凄く思い当たる節がある。あれだよ、あの契約書にサインしたやつだよ。

署名とか言ってたけど、やっぱり契約書だったんじゃないか。でもなんの契約書なんだろう？

それと強制的に転生させたって、僕は普通とは違うってこと？ 力を失ってしまったって、天使さんが？ どうして天使さんが力を失わないといけないの？

フローリングの床に倒れた僕に、いまだに抱きついていてる天使さん。幸せそうな顔で、瞳を閉じて僕を目一杯抱き締めている。

「ねえ、佐丹さん……」

「はい、なんです？」

「あなたの話を聞かないと、僕達はどうなっちゃうんですか？」

「ゆんちゃんあのね、これにはちよつとだけ込み入った事情が——」

「どうにもならないかも知れません。このまま平穩に過ごせるかも知りません。ですが……」

顔を上げた天使さんが、引きつった笑みを浮かべて僕と佐丹さんの会話に割って入ろうとした。でも佐丹さんは構わず会話を続ける。

「恐らくは——」

「黙れっ！」

勢いよく体を起こした天使さんが、僕達を見つめる佐丹さんを睨みつけた。

部屋中を埋め尽くす張りつめた空気。

天使さんは本気だ。本気で佐丹さんに攻撃を仕掛けようとしている。でも佐丹さんは、そんな天使さんを意に返さないどころか、警戒すらしていない。

それもそうだ。さっきの攻防で、二人の力の差が歴然だと既に証明されているんだから。

天使さんが凄く強いのは知ってる。知ってるけど、でも佐丹さんには絶対に勝てないのも知ってる。

佐丹さんを威嚇する天使さんの手首を掴み、強引に引き寄せて抱き締めた。

天使さんは僕が守る。どんなことをしてでも守ってみせる。

「ゆんちゃんっ！ こいつらの口車に乗っちゃだめだよっ！ ゆんちゃんはあたしが守るからっ！ だから二人でずっとここにいようよっ！」

涙をボロボロと零し、顔を歪めて必死に僕に訴えかける天使さん。

二人でずっと。ああ、嬉しいなあ。そんなことを言われたら、僕は……。

「ねえ、佐丹さん。一つだけ教えてください」

「ええ、なんなりと」

「天使さんも危険に晒されるんですか？」

「ゆんちゃんっ！ あたしのことはどうだっていい——」

「はい、そうです」

天使さんの叫びを遮り、静かに、でもはっきりと佐丹さんは肯定した。

そっか。そうなんだ。

「聞きます……」

揺れる天使さんの青い瞳が僕を見つめ、そして悲しそうに笑うと、そのまま僕の胸に顔を埋めた。

突然現れた二人の女性は、僕達に大切な話があると言った。でも天使さんは追いつ返そうとした。本当なら、僕は天使さんを信じて二人を追いつ返すべきだ。

ごめんなさい天使さん。あなたを信用していないわけじゃないんです。

一度ぬくもりを知ってしまったて、僕は弱くなつてしまいました。もう孤独に耐える自信がありません。

今の僕にはあなたが必要なんです。あなたしかいないんです。あなたを失つたら、僕は生きてはいけないんです。

もし目の前の二人が天使さんに危害を加えるような存在なら、その時は僕が……。

天使さんを抱き締めながらゆっくりと起き上り、佐丹さんを見つめる。

「一つだけ言っておきます。僕はあなた達をこれっぽっちも信用なんてしていません」

僕を見つめ返す佐丹さんは、ちょっとだけ困ったような表情をしたあと、にっこりと笑った。

真っ直ぐ僕を見つめる赤い瞳。やっぱりどうしても悪人とは思えない。

だけど、もし天使さんに危害を加えるような素振りを見せれば、その時は刺し違えてでも僕が天使さんを守ってみせる。

「ネズミだと思って甘く見ないでくださいね」

「ええ、存じております」

僕の瞳を真っ向から見つめ返す赤い瞳に、ほんの少しだけ憐みの色が見えたような気がした。

正面のソファーに座り、真っ直ぐに僕を見つめる佐丹さん。その後ろには、レヴィさんが隙のない表情で立っている。

二人をリビングに案内した時と同じ状況。一つだけ違うのは、ソファーに座る僕の膝の上に跨った天使さんが、抱っこするように僕に抱きついていること。

あれから天使さんは一言も口を聞いていない。

怒ってるのかな？ でもコアラの赤ちゃんみたいに僕に抱きつい

てるんだから、僕を嫌いになったわけじゃないよね？

可愛いなあ。やっぱり天使さんは凄く可愛い。

天使さん、たとえあなたから嫌われたとしても、僕が絶対に守ってみせますから。

「初めに申しておきますが、アザゼル様が取った手段は最良と言えるでしょう」

静かで落ち着いた佐丹さんの声。

「なにがですか？」

「あなたは小日向優であった頃の記憶を持っていますね？」

え？　なんでそのことを？　僕が小日向優だっているの？　僕が小日向優だっているのは天使さんだけじゃなかったの？

じゃあなんで僕をリリスって呼ぶの？　僕が小日向優だっているのなら、リリスって呼ぶのは変だよ。

この体がリリスさんのだから？　じゃあ僕は？

「今は深く考えないで。聞き流す程度で十分です」

まるで僕の心を読んだかのように、佐丹さんが優しく声をかける。

「今のあなたは生まれたばかりの赤子のようなものです。今まで見てきた世界、聞いてきた世界、感じていた世界。それら全てが新鮮

であり、ですが否定されるものでもあります。それはふとした弾みで精神が崩壊してしまう危険を孕んでいます。だからこそアザゼル様はあなたに余計な情報を与えず、落ち着く場所で、二人だけで、ゆっくりと時間をかけて、共に過ごそうとしたのでしょう。どうかそのことを心に留めておいてください」

ゆっくりと紡がれる言葉。その言葉に素直に頷いた。

「では本題に入ります。レヴィ」

「はっ」

僕を見つめたまま、佐丹さんは後ろに立つレヴィさんに声をかけて、レヴィさんは返事を返すと懷から書類を取り出して佐丹さん到手渡した。

「これは世界を表したものです。あくまでも分かりやすく説明するためのものでして、これが正しい位置という訳ではありません。我々が把握している限り世界は全部で五つあり、その事実を理解して頂くだけで結構です」

僕に見えるように書類をテーブルの上に置いた佐丹さんは、五つの円が描かれたページを開いた。

ページの中心に描かれた円。それを上下左右に取り囲んでいる四つの円。

「一つは地上界。今現在あなた方と我々がいる世界です」

そう言って中心の円を指さす。

「その上にあるのが天界。人間はこの世界を天国や極楽と呼びます」

中心の円の上にある円を指さす。

「そして地上界の下にあるのが獄界。人間は地獄と呼びますね」

中心の円の下にある円を指さす。天国と地獄ですか。なるほど、何を言いたいのかさっぱり分かりません。

「左にあるのが冥界。この世界は各世界との狭間に位置しておりまして、死した生物、所謂魂が初めに行きつく世界です。一応円として表してはありますが、実際は違います。たとえるなら洗面器に水を入れ、その中に四つのボールを浮かべます。そのボール以外の水の部分が冥界ということになります」

ああ、うん。ああ、そつかそつか。……洗面器？ ボール？ えーと……。

「えーと、あの、洗面器にボールを浮かべて……」

「左にある円が冥界。それでいいです。深く考えなくて結構ですよ」
苦笑いを浮かべた佐丹さんが、やけに優しく声をかける。

……今僕をバカだと思いましたね？ ぼ、僕だってちゃんと理解してますよ。

あれでしょ？ あの、だから洗面器に水を入れてボールを浮かべ

るんでしょ？ そしたら水の部分が冥界だから……あれ？ じゃあ左の円は何？

「リ、リリス？ あまり考え込まないでこっちを見てください。ほら、この左にある円が冥界ですから。それでいいんですよ？」

子供をあやすようなやけに優しい声が……くう、完全にバカだと思われている。

「わっ、分かってますよっ！ バカにしないでくださいっ！ だったら分かりやすいように洗面器にボールを五個浮かべればいいじゃないですかっ！」

ボールを四つにするからややこしくなるんだよ。五つ浮かべれば分かりやすいじゃないか。

「……そ、そうですね」

あれ？ 佐丹さんがちょっと引いたような……。

「ま、まあいいでしょう。この際、世界が五つだろうと六つだろうと問題ありません。リリスの好きなように考えてください。問題なのは右の円。魔界です」

中心の円の右にある円を指さした佐丹さんは、表情を引き締めて僕を見つめ、それまで無反応だった天使さんがピクリと反応した。

「ちょっと待ってよ……なんで魔界の話なんかするんだよ。今回のことと魔界は関係ないでしょ……」

僕の胸に顔を埋めていた天使さんが、顔を上げると震える小さな声で言葉を発する。

「確証はありませんが、可能性として否定できない情報を掴みました。今回の一件が魔界絡みでないのならば、アザゼル様の行動は天界も獄界も不問にするつもりだったのですから。あなた様の前に現れるつもりも、ましてや邪魔立てするつもりも毛頭ございませんでした」

振り返った天使さんは佐丹さんを見つめ、佐丹さんは天使さんを真っ直ぐに見つめる。

「どういうことか説明しろ……」

「ええ、わたくし達はそのために来たのですから。ご説明致します」

笑みを浮かべて頭を下げた佐丹さんは、顔を上げると表情が一変していた。

「地上界の時間という所の、現在から遡ること一六年前。天界において輪廻と転生を管理記録している“生命の樹”に何者かが不当に侵入し、大量にデータが持ち去られるという事件が発生し、当時職務に当たっていた天使、及び警護に当たっていた天使、総勢五十名が惨殺されました」

ざ、惨殺？ え？ ど、どういうこと？ その事件と僕達と何か関係があるの？

なんだろう、嫌な予感がする。

「生命の樹は天界の最高機密。わたくしは申請すれば閲覧が可能ですが、そのような権限を持っている者は極限られた者のみ。生命の樹は所在すら明かされてはならず、警護も厳重でした。ですが、その何者かは所在を把握していた上に、なんなく逃走に成功しています。そのようなことが可能な者は更に限られてきます」

佐丹さんの目つきが険しくなり、天使さんを射抜くように見つめる。

「何が言いたいのか？ はっきり言えよ」

その視線を真っ向から受ける天使さん。

「そう、たとえば、何者にも属さず、何者にも与せず、孤高と謳われた最強の墮天使ならば……可能でしょうね」

佐丹さんの言葉と共に、一瞬で室内の空気が張り詰める。

「へえ……あたしが犯人だって言いたいわけ？」

み、耳が痛い。室内の空気が急激に張り詰めたせいで、耳鳴りと同時にゾワリとした寒気が襲い、全身に鳥肌が立つのを感じる。

睨み合う二人。このままだとマズい。このままだと天使さんが危険だ。

佐丹さんが指一本でも動かしたら、天使さんを後ろに放り投げる。そのあとは……なんとかするしかない。

天使さんの背中に回した手に力を込め、意識を集中させる。一瞬

の隙が命取りだ。

一緒に逃げられるのならそれが一番だけど、最悪僕が盾になって天使さんが逃げる時間を稼ぐしかない。

頬を冷や汗が流れ、息が次第に荒くなっていく。

「それはあり得ませんね」

大きくため息をついた佐丹さんが、ぽつりと呟く。その言葉と共に部屋の空気が緩んだ。

と、とりあえず大丈夫なのかな？ こ、怖くて心臓が止まるかと思っただ。

「事件が発生する数日前に、何者かが無許可で生命の樹を閲覧しています。ですが天使達に気付かれることなく閲覧することなど不可能。それなのにアクセスした痕跡は確かに残っていました。不思議な話ですね。そのことに関して天使たちは一切を黙秘しました。天使は嘘はつきませんからね」

テーブルの上に置かれた書類を捲り、僕達に見えるように新たなページを開く。

とは言っても全然読めない。あの契約書と同じ文字なのかな。よく分からないけど。

「当時の査問委員会の調書です。職務に当たっていた天使長、ここに記されている名はファリエル。彼女は胸を張ってこう言ったそうです。死んでも言えないと。その姿は威風堂々。その瞳には一辺の

曇りもなかったそうです」

その言葉を聞いて、天使さんの体が微かに震えた。

「最も、彼女のこの発言で閲覧者が誰なのが判明したのですが。彼女はその者を愛していたのでしょう。無論彼女だけではありません。だからこそ天界はこの案件を不問としました。ですが彼女は、いえ、彼女とその部下や警護に当たっていた天使達は、この数日後、惨殺されることになります」

瞳を見開いた天使さんは、書類の開かれたページを見つめる。

「まさか……」

天使さんの小さくか細い声。

「ええ、あなた様が生命の樹を閲覧したあと、何者かがデータを盗み出したということです」

険しい表情で見つめ合う二人。どうしたんだろう。何かとんでもない問題が起きたのかな？

「その後、地上界で魂が消失する事件が相次ぎました。その数は数千にも上ります。天界からの要請もあり、天界と獄界とで特別部隊を組織し、地上界へと派遣しましたが、手がかりを掴めないまま事件は収束しました。とある人物の魂の消失と同時に」

とある人物。そう言った佐丹さんは僕を見つめた。

「小日向優。あなたの魂が消失したと同時に事件は収束したのです」

え？ 僕？ 僕の魂が消失した？ え？ 僕はここにいますけど。意味が、意味が分かりません。

「消失した魂の共通点は？」

天使さんの言葉に、佐丹さんはコクリと頷いた。

「当初は無差別だと思われていましたが、生命の樹の膨大な記録と照らし合わせた結果、ある事実が浮かび上がりました。消失した魂は、なんらかの形で神族と関わりのある者でした。一人の例外を除いて」

親族？ え？ 親族と関わりがあるってなにがですか？

「例外はゆんちゃんか。ゆんちゃんは神族とは関わりがないからね。そいつは勘違いしたってことか……狙いは恐らくゆんちゃんの魂」

「ええ、そうなります」

親族？ えーと、僕は親戚についてはあまり詳しくないです。親戚の人とはあまり会ったことがないですから。

会ったことがあるのは……えーと、そうそう。

「おじさんとおばさんくらいですかね？ おじさんは父さんのお兄さんで、おばさんは母さんの妹さんなんですよ。子供の頃に会ったきりですけど」

僕と親族に関わりがあるとかないとか言ってるし、よく意味は分からないけど、とりあえず会ったことがある親戚を上げてみた。

ジト目で僕を見つめる佐丹さんと、なぜか僕の頭を撫でてくれる天使さん。

真顔で佐丹さんの後ろに立つレヴィさんは、一瞬表情が緩み、口元に拳を添えると咳払いをして真顔に戻る。でもまた緩む。

佐丹さんもレヴィさんも、なぜか僕を可哀想な感じで見つめている。なぜ？

……なにこの気まずい空気？

「ゆんちゃんごめんね。今ちょっと大事な話をしてるから、ゆんちゃんも餡でも舐めてようか。はい、あーん」

どこからともなく巨大な餡を取り出した天使さんが、その餡を僕の口元に近づけて口を開けるように促す。

「あーん」

天使さんから言われた通りに口を大きく開けると、につこりと笑った天使さんが「いい子だねー。ちょっとおとなしくしててねー」と言いながらその餡を僕の口内へと入れた。

「どう？」

「ひよっとおつきいれふ」

いくら巨大な飴だといっても、以前なら普通に食べられた大きさだと思っけど、体が小さくなったんだから口も小さくなってるのか。

口の中が飴で一杯で上手く話せない。

なんとか口の中で転がして、舌で頬の方に押し付けると、頬が異常に膨らむを感じる。

あ、ちょっと楽しいかも。食べきれないくらい大きな飴とか、子供の頃は一度は食べてみたいと思ってたんだよね。

口内に広がる甘い味と香り。これはピーチ味だ。

「美味しい？」

笑顔のまま、首を傾げて聞いてくる天使さん。

「ふあい、おいひいれふ」

甘くて凄く美味しい。それに桃の香りって、なんだか天使さんを連想する。

「ゆんちゃんは素直でいい子だにゃー。もうちょっとだけ待っててにゃ？」

「ふあい」

天使さんの言葉にコクンと頷いて、巨大な飴を口の中で転がした。

友達っていいなって思いました

「話を続けてもよろしいので？」

「いいよ」

佐丹さんの問い掛けに、僕の頭を撫で続けている天使さんが答える。

「天使の惨殺と魂の消失事件が起きたのが十六年前。そこから六年間は特に何事もなく、地上界へと派遣していた特別部隊も手がかりを掴むことは出来ませんでした」

「六年間ねえ……」

六年間という言葉聞いて、天使さんが小さく呟く。相変わらずにこにこと笑って僕の頭を撫でているのに、なぜかその笑顔には違和感がある。

六年間……そう言えばどこかで聞いたような気がする。なんだっけ？

「ええ、そして事件は再び起きました。十年前、獄界で管理していたリリスの肉体が、何者かによって持ち去られました。ですが、当時警備に当たっていたのは蠅騎士団の準騎士が五名」

はえきし？　　這え棋士？　　這いつくばって将棋をする人ですか？

それ王手です！ でも手が届きません！ だったら這いつくばってないで起きてくださいよ！ それはできません！ だって這え棋士ですから！ みたいな？

うーん、なんか違うような気がする。

はえきしってなんなのか凄く聞いてみたいけど、飴が邪魔で上手く喋れない。飴は凄く美味しいけど。

「ベルジ……いいえ、獄王バアル・ゼブル率いる最強無比の蠅騎士団。準騎士とはいえ、その力は一騎当千。その蠅騎士が五名です。蠅騎士を相手にするなど自殺行為以外の何者でもないのは、天界獄界で知らぬ者はいないでしょう。ですが、こともあるうか、その何者かは蠅騎士と交戦することもなくリリスの肉体を持ち出しています。蠅騎士が何者かを素通りさせた？ あり得ませんね」

「へえ……」

含みのある笑みを浮かべた天使さんは、僕の膝の上に座りなおすと佐丹さんを正面から見据える。

「突破するだけならここにいるレヴィでも可能でしょう。ですが交戦せずになると話は違います。しかも、警備を担当していた五名を問い詰めても、知らぬ存ぜぬの一点張り。更にあのベルジが責任は自分にあると言い出す始末。あのベルジが庇うほどの者など、わたくしには一人しか思い当たる——」

「で？ 犯人はあたしだって分かってて、なんでそんな話をするんだよ」

ジロリと佐丹さんを睨める天使さんは、詳細を話せと言わんばかりに視線で促す。

犯人はあたしって……へ？

ちよ、ちよっと待ってくださいよ。

え？ あれ？

……もしかしてこの体は盗品だったんですか？

ええーっ！ それはちよっとマズいですよっ！

ど、どうしよ。どうしたらいいの？ あ、謝っちゃった方がいいんじゃないですかね？

ねえ天使さん……謝っちゃった方がいいんじゃないですかあっ！

「ええ、リリスの肉体を持ち出したのがアザゼル様だということは、ベルジヤ蠅騎士の態度ですぐに分かりました。それはいいのです。問題はその後、リリスの肉体を安置していた“リリスの庭”を何者が襲撃したのです」

佐丹さんの眉間に皺が寄り、室内の気温が下がったような気がした。

天使さんは何も言わず、ただ佐丹さんを見つめている。

それはいいって……お、怒ってるわけじゃないんですか？

さっきまでの張り詰めた空気に似てるけど、何かが違う。上手くは言えないけど、肌がピリピリしないし耳も痛くない。

何かが変だ。

お互いに睨み合ってるけど、感じるのは焦燥感みたいなもの。

「わたくしの過ちです。リリスの肉体が持ち去られたことにより、蠅騎士団が警護するのは不要と考え、ベルジにそう進言したのです。それにより、リリスの庭の警護担当がベルジからルシフに変わりました。その直後のことです」

「襲撃されたって……あんたさっき天使達が惨殺されたって言ったよね？ リリスの庭の警護についてたのは誰だよ……」

天使さんの言葉に、佐丹さんの体が震えた。

「わ、わたくしの過失です。蠅騎士団の警護の任は解くべきではなかった——」

「おいっ！ 誰が警護してたか聞いてるんだよっ！ 答えろインテリッ！」

天使さんの怒鳴り声に佐丹さんはビクリと大きく震え、赤い瞳が揺らめく。

怒鳴り声に驚いてしまった僕は、膝の上に乗る天使さんを抱き締めていた腕が緩み、その一瞬の隙について天使さんが飛び出した。

「ふえんひふあんっ！」

手首を掴んで引き戻そうとしたけど、間に合わなかった。しかも口の中の巨大な飴が邪魔で上手く喋れない。

飛び出した天使さんはテーブルの上に着地すると、ソファーに座る佐丹さんの襟元を掴み、強引に引き寄せる。

「答えるインテリッ！ 誰が警護してたんだよっ！」

再度発せられた怒鳴り声。

「リ、リズです。アシュタロッテの義妹のリズロッテです。それとルシフ直下の兵士が十名……」

佐丹さんの震えるか細い声。そして瞳には涙が浮かんでいる。

てっ、天使さんを止めないとっ！

佐丹さんに掴みかかっている天使さんを止めようと、焦って座っていたソファーから腰を浮かそうとしたら、いきなり肩を掴まれた。

見上げるといつの間にも移動したのか、僕の隣に立ったレヴィさんが僕の肩を掴み、首を横に振る。

……動けない。ただ肩を掴まれているだけなのに、全く動ける気がしない。

手を出さなっこと？ でもまた喧嘩になったりしたら。

「リズって……あのリズ？ あのちびっこリズ？」

「……はい」

天使さんに襟首を掴まれたままの佐丹さんは、小さく返事をする
と、頬を涙が伝っていく。

「……リズは無事なの？　なあインテリッ！　リズは無事なのか聞いてるんだよっ！　答えろっ！」

「隊は……リズロッテを残して全滅。リズロッテも重傷を負いましたが一命は取り留め、現在は回復しております。当時の警護長はルシフ付きの侍女頭であったレオナール。彼女と彼女に従っていた兵士達が……己の命と引き換えに、リズを守ってくれました……」

唇を噛み、震える声でそう言った佐丹さんの頬を、幾筋もの涙が伝っていく。

「レオナール？　レオナールって、確か……」

「はい、アザゼル様は面識がないかも知れませんが、名は聞き覚えがありますでしょう。元蠅騎士のレオナールです。ベルジの命により、幼いアシユとリズの教育係としてルシフの元へと使わされたのです。彼女は戦闘には秀でておらず、蠅騎士団の中でも最弱と言われておりましたが、忠誠心が厚く、己に厳しく、鍛錬を怠らぬ、まさに騎士の鏡でした。その彼女に教育された兵士達もまた、素晴らしい者達でした」

僕の肩を掴んでいるレヴィさんの手に力がこもる。

レヴィさんが僕を止めた理由が分かった。

佐丹さんと天使さん、二人の会話の内容はよく分からない。でも、僕が口を挟んでいいようなものじゃない。

肩に落ちる熱い雫。震えるレヴィさんの手。

顔を上げることができない。天使さんを、佐丹さんを、レヴィさんを見ることできない。

きつとみんな泣いている。

「褒めてあげてくださいませんか？ 彼女たちはリズを守り、尚且つ犯人の手掛かりを掴んでくれました。全身全霊を賭けて職務を全うしてくれたのです。獄界の者達にとって、あなた様に褒めらるることがどれほど誉れ高いことか。彼女達が生きていたなら…… どれほど喜んだ……」

佐丹さんの声には嗚咽が混じっていた。

聞いているだけで泣いてしまいそうな悲しみに満ちた声。

どれほど悲しいことなのか、直接心に伝わってくるような、そして最後まで紡ぐことができなかった言葉。

佐丹さんの襟首を掴んだまま、俯いて何も話さない天使さんもまた、泣いているようだった。

しばらくして天使さんが口を開いた。

「レオノール……レティから聞いたことがあるよ。凄い騎士がいるって。あのレティが言うんだから相当な実力者なんだろうと思ってたよ。そっか、最弱か。でも強かったんだろっね。リスを守ってくれたんだもんね」

いつもの優しい天使さんの声。僕に話かけてくれる時のような、とっても暖かな声。

「……ありがとうございます」

指で涙を拭い、でも赤い瞳からは後から後から涙が零れ落ちる。

「獄界の長として、今日まであなた様とリスを模倣してきたつもりでしたが……やはりお二人のようにはいきませんね。どれほど窮地に陥っても信念を曲げることがなかったあなた様と、どれほど重荷を背負おうと笑顔を絶やさなかったリスが如何に偉大だったのか、今さら気がついてるようでは……お見苦しい姿を晒してしまい。申し訳ございませんでした」

まるで自分を嘲笑うかのように、薄っすらと笑みを浮かべる佐丹さん。

「バカだよお前。リスが凄かったのは認めるけどさ、あたしはやりたいことをしてただけ。リスが獄界を守りたいって言ったから守っただけ。あたしはただリスの傍にいたかっただけ。いつも笑顔で優しくかったリスが大好きだっただけ。はっきり言って、獄界がどうなるうが知ったことじゃなかった。あたしはお前らが考えて

るような偉大な存在なんかじゃない」

「本当に偉大な者は、己を偉大だとは言わないものです。それに、あなた様の偉大さを決めるのはあなた様ではなく、共に戦ったわたくし達です」

顔をくしゃくしゃにして笑う佐丹さん。その佐丹さんの襟首から手を離れた天使さんは、ポンと佐丹さんの頭に手を乗せた。

「戦った……かあ。あんときは酷かったよねえ。魔界に攻められてほとんどみんな殺されちゃってさあ」

「そうですね。確かに酷い状況でしたが、わたくしはあの頃が一番楽しかった」

「楽しかったって……お前バカなんじゃない？ よくあれを楽しかったと言えるね」

佐丹さんの頭をポンポンと叩き、信じられないといった表情で、引き気味にジト目で佐丹さんを見る天使さんと、頭を叩かれ、少しくすぐったそうに、でも本当に嬉しそうに天使さんを見つめる佐丹さん。

「おかしいですね？ 自分でもそう思います。ですが……アザゼル様がいて、その隣にはいつもリリースがいて……」

「そっか、そうだね。あたしの隣にはいつも笑顔のリリースがいたね。あー、まあ確かに楽しくなかったこともないけどさー」

何かを思い出したのか、ちょっと噴き出す天使さん。

「確かに笑えることもいっぱいあったね。せつかくみんなで作戦を練ってるのに、負け戦が花とか吠えながらベルジとそこにいるエセ武士は勝手に切り込んでくし。作戦の意味を考えろってぶっ飛ばしたっけ。それにルシフはリリスに対抗意識を燃やし過ぎて病みっぱなしだし」

僕の隣に立っているレヴィさんは、天使さんの言葉を聞くと真っ赤な顔で口元に拳を添え、咳払いしている。

エセ武士ってたぶんレヴィさんのことですよ？ 負け戦が花って……うわぁ、なんだか言っちゃった感がありますね？

アレですか？ もしかして黒歴史みたいなものですか？

「ふふ、そうですね。それにアシュは頭の中がいつもお花畑でしたから。でもそんなあの子とリリスの無邪気さのお陰で、殺伐とした空気が一気に和んで」

優しく佐丹さんの頭を撫でる天使さんと、まるで子供に帰ったように瞳を輝かせ、身振り手振りではしゃぐ佐丹さん。

「そうそう、それにリリスの天然っぷりも凄かったよねえ。何もない所で転ぶし、方向音痴のくせに勝手に出歩いて帰ってこれなくなるしさ。アシュに花の冠を作ってあげるとか言いだして、延々と作り続けてちよう巨大になったりさ」

次第に二人の笑い声が大きくなっていく。

「リリスは偉大でした。ですが偉ぶる素振りなど一切見せず、いつ

も笑顔で本当に優しくて、わたくし達の母と呼ぶべき存在でした。そんなリリスだからこそ、皆は大好きだったのです。どのような窮地に陥ろうと、あの笑顔を見ただけで心が奮い立った。どのような手段を使っても、あの笑顔を守りたかった」

「そうだね」

楽しそうに会話する二人。僕の知らない人達の話。

そんな二人の会話が、ちょっとだけ羨ましい。

「レティだけはまともだったよねえ」

「本当に、レティだけはまともでしたね」

二人とも視線をそらし、遠くを見つめながら呟き、二人同時に僕の隣に立つレヴィさんを見る。

見上げると、レヴィさんはバツが悪そうに頭を掻いていた。

「たった八人のリリスの団。終わりの見えない過酷な日々……でもアザゼル様がいて、リリスがいて、ベルジがいて、レヴィがいて、ルシフがいて、アシュがいて、そしてレティがいて……。わたくしも、他の皆も、誰一人獄界を守るためになど戦ってはいませんでした。全てを失ってしまったわたくし達に手を差し伸べてくれたリリス。ただひたすらに強かったアザゼル様。お二人の大きな背中を見つめて、ただその偉大な背中に追いつきたくて……」

「そっか……」

「ベルジなんて、あの子はいまだにアザゼル様の背中を追い続けているんですよ。姐さんの強さはこんなものじゃなかったと、姐さんの偉大さはこんなものじゃなかったと言って。獄界最強と謳われるまでになった現在でも、ひたすらあなた様の偉大な背中を追い続けています。本当に純粹過ぎるバカな子で。ルシフはルシフで記憶の中のリリスがどんどん美化していくと言っては暴れ、勝ち逃げするのは卑怯だと言っては暴れて手が付けられません。本当は誰よりもリリスのことが大好きなのに……」

「そつか……」

不思議な光景だった。天使さんは佐丹さんを嫌っていたはずなのに、そんな雰囲気は微塵も感じない。

母親にすぎる子供と、その子供の頭を撫でてあやす母親のような、そんな優しい空気が室内を包んでいる。

本当は凄く仲のいい二人なのかな？ だったらなんで、天使さんはあんなに佐丹さんを敵視していたのかな？

いがみ合って憎しみ合って、でも何もなかったように打ち解けて、笑い合えて。

友達のいない僕には理解できないことなのかな？

天使さんは僕に凄く優しくしてくれる。でも天使さんは僕を友達だと思ってくれてるのかな？ 心の中では世話の焼ける厄介者だと思われてないかな？

分かってる。バカな僕だって、天使さんが僕をそんな目で見てい

ないことくらい分かってる。だって天使さんは優しいから。

でも、そう思えるくらい、今の天使さんと佐丹さんは心が通じ合っているように見えた。

ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、悔しい。

「お前は相変わらず卑怯なヤツだよ。昔話とかさあ」

大きなため息をつき、肩を落とした天使さんは、苦笑いを浮かべる。

「戦は情報が命ですから。それに将を射んとするより泣き落としてしまえ、とリリスから教わったのです。アザゼル様は意外と泣き落としに弱いと」

片目を閉じて僕にウィンクする佐丹さん。

え？　ちよ、なんでいきなり僕に振るんですか？

佐丹さんの言葉を聞いて、嫌そうな顔をした天使さんは、拳で佐丹さんの頭を軽く叩く。

「わたくしが申したではありません。リリスから教わったのです。怒るのならそこにいるリリスを――」

「たとえゆんちゃんが悪くとも、ゆんちゃんを叱るくらいならあたしは誰かに八つ当たりする」

焦って弁解する佐丹さんの頭を、再度叩く天使さん。今度はゴチ

ンと音がした。

ちよつと痛そう。

あの……八つ当たりするくらいなら、僕を叱ってもらいたいんですけど。

「リリースのことはお前達のせいじゃないことくらい、あたしだって分かってるよ。でも獄界に保護されるつもりはないよ。ゆんちゃんはおたしを守る。それだけは譲れない」

笑みを消して、真顔で佐丹さんを見つめながら、そう言った天使さんに対し、表情を引き締めた佐丹さんはコクリと頷く。

「現状では保護したくてもできません。天界と獄界はリリースによって結ばれた和平条約をいまだに守ってはありますが、それは両界の力が拮抗していることも大きいのです。その拮抗状態が崩れれば争いが起きます。もし獄界がアザゼル様を引き入れたとなれば、天界は黙ってはいないでしょう。しかもリリースまで一緒となればなおさらです」

「はあ、天界も相変わらずだねえ。無力なあたしに価値なんてないだろうに」

肩をすくめる天使さんに、首を横に振る佐丹さん。

「いいえ、あなた様のお力は単純な強さなどではありません。絶大な力を持ちながら、一人の少女のためだけに神に背き、そして遙かな時を超えてもなお、その少女を想い続ける一途な心と、その想いを貫く絶対に折れることのない信念。もし絶対に勝てない相手だと

しても、その少女のためならば、あなた様は立ち向かうでしょう。それがあなた様の力。皆が憧れ、皆が目標とし、皆が崇めた勇敢にして孤高の存在。アザゼル様の真の恐ろしさは絶大なるカリスマ性です。そしてそのカリスマ性は、リリスと共にあることで絶対となります。獄界は一瞬にして一枚岩となるでしょう。天界にとつて、これほどの脅威はありません。そしてそれは……魔界も同じです」

「魔界……も？」

魔界という言葉にピクリと反応した天使さんは、佐丹さんに先を続けるように視線で促した。

不可抗力でした

「魔界が最も恐れているのはリリスの復活です」

静まり返った室内に、佐丹さんの静かな声が響く。

「ちょ、ちよつと待ってよ……。リリスの魂はもう存在しないんだよ。それは魔界が一番よく分かってるでしょ？ ゆんちゃんはいりりスじゃない。ゆんちゃんはゆんちゃんなんだよっ！」

全身から力が抜け落ちたように、ペタンとテーブルの上に座り込んだ天使さんは、震える声で佐丹さんに問いかけ、一転して佐丹さんの肩に掴みかかると声を張り上げる。

「魔界相手にそのような詭弁が通用すると本気で思っておられるのですか？ それにリリスの肉体に適合するのはリリスの魂のみ。それはアザゼル様が一番ご存じのはず。そして現にわたくしの目の前にリリスは存在しています」

天使さんを説き伏せるような佐丹さんの静かで力強い声。

「わたくしもこの目で見るまでは信じられませんでした。魔界もリリスが復活するなど思ってもいないでしょう。なにせリリスの魂を消滅させたのは魔族なのですから」

「だったら……。だったらいいじゃんっ！ もうそつとしておいてよっ！ あたしはゆんちゃんと静かに暮らしたいだけなんだよっ！ 天界がどうかっ！ 獄界がどうかっ！ 魔界がどうかっ！

そんなのどうだっていいんだよっ！」

悲痛な叫び声を上げて佐丹さんの肩を揺する天使さん。その天使さんを同じく悲痛な表情で見つめていた佐丹さんは、瞳を閉じ、大きく息を吸い込み、そして瞳を見開く。

その赤い瞳には言い知れない力が宿っていた。

「だからこそ先手を打つのですっ！」

その佐丹さんの力強い言葉に、天使さんの動きが止まった。

「この十年間、我々はアザゼル様の所在を捕捉することができませんでした。あなた様の強大なお力は、いかに隠そうとしても隠せるものではありません。一体どこにおられたのか、それはいまだに分かりません。そしてそれは魔界とて同じでしょう。ですが数日前にアシユの千里眼があなた様を捉えました」

淡々とした口調。でもその瞳はさっきまでと明らかに違う。

「恐らくアシユ以外が補足することは不可能だったでしょう。なにせあなた様は魂の契約により、強大なお力を失っておられたのですから。ですが、我々が接触したことにより恐らく魔界も気づいたはずです。我々が接触しなければ、捕捉するのにかかなりの時間を要したはずでしょう。いいえ、永遠に補足出来なかったかも知れません」

「だったらなんで……なんでわざわざバラすようなことをしたんだよっ！」

「絶対に見つからないとは断言できなかったからですっ！」

天使さんの叫びを掻き消すほどの、佐丹さんの怒声が室内に響き渡る。

「魔界はまだリリスの復活を知り得ていません。ですがそれも時間の問題。いずれ知られるでしょう。それがいつになるかは分かりませんが、ですが、だからといって希望的観測は悲劇を生みます。知れば間違いなくリリスの引き渡しを要求してくるでしょう」

「ふざけんな……」

ポツリと天使さんが呟いた。

その悲しい呟きとは相反して、にやりと不敵な笑みを浮かべた佐丹さんは、小さな、でも底冷えするような笑い声を上げる。

恐ろしい、本当に恐ろしい笑顔。

「……なに笑ってんだお前？　なに笑ってんだよお前えっ！」

怒りを露わにした天使さんは、右手を振り上げて拳を握り締め、そのまま佐丹さんの顔を目がけて振り下ろした。

いけないっ！

「待てリリスッ！」

僕を止めようとしたレヴィさんの手を振り払い、天使さんを止めようと無我夢中で飛び出した。

右手で天使さんの右手を押さえ、左手を腰に回し、強引に引き寄せる。

「ふえんふい——っ！」

ああ、もうっ！ 飴が邪魔で喋れないっ！

吐き出しちゃおうかつ！ でもせっかく天使さんがくれた飴を捨てるのは嫌だっ！

飲み込んじゃおうかつ？

うえっ、だ、だめだっ！ おつきすぎて飲み込めないっ！

「はっ、離してゆんちゃんっ！ こいつをぶん殴らせてっ！」

バタバタと暴れる天使さん。凄い力だ、僕の力じゃそう長くは押さえてられない。

どうしようしょっ？ とにかく天使さんを止めないとっ！

こ、こうなったら手段を選んでられないっ！

「ごめんなさい天使さんっ！

」——っ？」

暴れていた天使さんの動きが止まり、瞳を見開いて僕を見つめる。

僕の唇から伝わってくる柔らかな感触。

振り上げられた右手から力が抜け落ち、見開かれた瞳が次第に閉じていく。

なんて、なんて柔らかいんだろう。

生まれて初めて味わった、女の子の唇の感触。

想像はしてた。想像はしてたけど、僕の想像なんて軽く吹き飛ばすくらい、天使さんの唇は柔らかくて、ちょっとひんやりしていて、それでいて甘い……あ、甘いのは飴のせいかな。

ど、どさくさに紛れて天使さんと……キ、キス、しちゃいました。

じゃなくてっ！ 天使さんの唇を堪能してる場合じゃないっ！
危うく目的を忘れる所だったっ！

舌を使って口内から巨大な飴を押し出す。すると天使さんの唇が開き、飴を吸い込んだ。

よ、よしっ！ これで喋れるっ！ 飴を押し付けちゃってごめんなさい天使さんっ！

どうしても捨てるのがもったいなかったんですっ！

急いで唇を離そうとしたら、ぬるぬるした物体が僕の口内ににゅ

るつと侵入してきた。

「……んっ？ んうっ！」

全身を電撃が走り抜け、僕の意志とは関係なく条件反射で体が仰け反る。

「ぶはっ……な、なに今の？ なに今の物体っ？」

……びっくりするほど気持ちよかった。びっくりするほど気持ちよかったのっ！

なんかぬるぬるしてて、それがにゅるつと入ってきて、それで僕の舌に絡みつこうとして、でもそこで唇を離してしまった。

心臓が破裂しそうなほどドキドキしている。

も、もう一回……今のもう一回したい。って何を考えてるんだ僕はっ！

とても冷静にはなれないけど、何度か深呼吸をして天使さんを見た。

僕に右手を押さえられ、左手で腰を引き寄せられている天使さんは、真っ赤な顔で僕にもたれかかっている。

とろんとした青い瞳と、なぜか唇から舌をペロンと出ている。

それと、薄目を開けてるけど、天使さんの意識は完全に飛んでるみたいだ。

それはそうだ、いきなり唇を奪われて相当ショックだったに違いない。しかも相手は僕だし。

「ごめんなさい天使さんっ！　どんな罰でも受けますっ！　嫌いになられても仕方がないですっ！　でも今は堪えてくださいっ！」

どんなに叱られても、どんなに怒られても構わない。嫌いになられるのは本当は凄く嫌だけど、でも仕方がない。

許してもらえないかもしれないけど、何度でも謝る。もし許してもらえるのなら、どんな罰を受けても構わない。

でも謝るのは後だっ！　今は天使さんを止めるのが先決だっ！

天使さんから視線をそらし、正面に座っている佐丹さんを睨む。

さっきまで不敵な笑みを浮かべていた佐丹さんは、なぜか真っ赤な顔で呆然と僕達を見つめている。

「佐丹さんも佐丹さんですっ！　真面目な話をしてたのに、人をバカにするような笑い声を上げれば天使さんだって怒って当然ですっ！」

ちょっと怖かったけど、どうしても言いたかった一言を言い切った。

僕もやればできるんですからね。怖かったけど。

天使さんに視線を戻そうとしたら、不意に眩しい光と共に、パシ

ヤつと音がする。

音がした方に顔を向けると、中腰になって一眼レフのカメラを構えたレヴィさんが、パシャパシャとシャッターを押していた。

へ？

ちょ、なにしてるんですか。凄く眩しいんですけど。

「ちょ、やめてくださいレヴィさんっ！　なんで写真なんか撮ってるんですかっ！」

「気にするな。写真は趣味なのだ」

レンズ越しに僕を見つめるレヴィさんは、真顔でそんなことを言っている。

いや、いやいやいや、気にするなって言われても凄く気になるんですけど。

なんなんだこの人？　なんだかだんだんインチキ臭い武士に見えてきた。

天使さんを撮られるのが凄く嫌だ。それにレヴィさんの目つきがどうも嫌だ。

真顔なのに、目つきがどうも嫌で堪らない。

天使さんをカメラのレンズから隠すように抱き寄せる。

そこで胸に違和感を覚えた。

視線を向けると、相変わらず真っ赤な顔でもごもごと飴を舐めている天使さんが、両手で僕の胸を揉みしだいでいる。

そう言えば、天使さんは僕のおっぱいを揉むと落ち着くんだった。

こんなんでよかったらいくらでも揉んでください。

しばらくその光景を眺めていたら、ペイツと飴を吐き出した。

あ、もったいない。

「ゆんちやあん」

僕を呼んだ天使さんは、そのまま僕に抱きつき、無駄に大きなおっぱいにむぎゅっと顔を埋める。

いきなり僕に唇を奪われたのに、全然怒ってないみたいだ。

普通なら激怒してもおかしくない。いや、僕なんかにキスされたら、普通は激怒するよ。

いくら優しい天使さんだって、内心では怒ってるよね？ でもそんな素振りは全然見せずに、こうして僕を許してくれる。

なんて……なんて器の大きな人なんだ。

「やっぱり天使さんは優しい人です……」

思わずきつく抱き締めてしまった。

「ふにゅう」

僕の胸の中で子供のような甘い声を上げる天使さん。

ああ、可愛い。ああ、可愛い。もう可愛過ぎてどうしたらいいの
か分かんない。

ずっと、ずっとこうして天使さんを抱き締めていたい……。

その僕の意に反して、天使さんがもぞもぞと動き出した。

ああ、そつか。しまった。ちょっときつく抱き締め過ぎたのかな？

天使さんの顔は完全に僕のおっぱいに埋もれてるし、その上きつ
く抱き締めたりしたら、息が出来なくて苦しいよね？

でも……うー、天使さんを離したくない。でもでも、離さないと
天使さんが窒息してしまう。

後ろ髪を引かれつつも、抱き締めている腕の力を緩めようとした
瞬間、着ている黒いキャミソールの中に天使さんの手が侵入してき
た。

「あれ？　ちよっ？　えっ？」

キャミソールの中を這うように上ってくる天使さんの手。それと
同時に、もう一方の手が僕のミニスカートを捲し上げる。

テーブルの上に膝立ちをした状態で、突然の事態に頭がついていない。

そうこうしている内に、這い上がってくる手がキャミソールを捲り上げてしまい、おっぱいの下の方が見えてしまっている。

しかも元々あまり機能していなかったミニスカートが捲り上げられたせいで、パンツが丸見えになってしまっている。

そうか、そういうことか。やっぱり天使さんは怒ってたんだ。でもいきなり怒ると僕がびっくりすると思って、今まで我慢してくれてたんだ。

これはお仕置きだ。天使さんは僕にお仕置きをしようとしてるんだ。

それで許してもらえるのなら、僕としては全然構わないんだけど、でも……。

正面には真っ赤な顔で僕達を凝視している佐丹さんと、なぜかはあはしながらカメラを構えているレヴィさん。

僕が言えることじゃないのかも知れないけど、出来るならお仕置きは後でして欲しい。

半裸状態を人から見られるのは、ちょっと、いや……かなり恥ずかしいです。

おっぱいは見られてもそうでもないけど、とにかくパンツを見られるのは嫌だ。

「てっ、天使さんっ。ちょっ、恥ずかし——佐丹さんとレヴィさんが見て——あっ」

焦って声をかけたけど、天使さんの瞳は死んだ魚のように光を失い、暗く感情が読めない。

まるで僕の声が聞こえてないみたいだ。

そこまで、我を忘れるくらい怒ってたのに、今まで我慢してくれてたのか。ここは甘んじてお仕置きを受けるべきだ。

でもどうしよう。女の子のパンツを履いてるとか、それだけで死にそうなくらい恥ずかしいのに、それを天使さん以外に見られるのは絶対に嫌だ。

眩いフラッシュと、パシャパシャとカメラのシャッター音が連続で聞こえる。

しゃ、写真を撮られてるっ？ レヴィさんだっ！ レヴィさんが撮ってるんだっ！ 嫌だっ！ 写真は本当に嫌だっ！

ぱっ、パンツを隠さないっ！ あれっ？ 天使さんの手が邪魔でスカートが下がらないっ！

「てっ、天使さんっ。あっ、あとでじゃダメですかっ？ キスしたことを怒ってるんですよっ？ どんな罰でも受けますからっ、あとで——ちょっ、嫌だっ！ パンツは見られたくないんですっ！ やめてくださいレヴィさんっ！ 写真を撮らないでくださいっ！」

泣きたい。恥ずかし過ぎて泣きたい。

鏡を見ないと自分が女の子になたってどうしても思えない。自分が女装してる変態としか思えない。

その上、女の子のパンツを履いている所を写真に撮られるとか、うう、死にたい。

「写真……？ はっ！ あたしなにしてるのっ？ なんでゆんちゃん
んが泣いてるのっ？ ……誰だ。誰がゆんちゃんを泣かしたーっ！」

瞳に光が戻った天使さんが、我に帰ると驚愕した表情で僕を見つめ、雄叫びを上げる。

な、泣いてません。僕は泣いてません。泣いてなんかいないもの。

ちゃんと泣かずにお仕置きを受けるもの。

2000万画素でした

よろよろとその場に立ち上がった天使さんは、息を荒げて周りを見回す。

その隙に乱れた服装をそそくさと直した。

うう、恥ずかしくて死にそうだった。

獣じみた眼光で辺りを見回していた天使さんは、いまだにシャッターを切り続けているレヴィさんに気付くと、一足飛びで跳びかかる。

「なにやってんだお前―っ！ ゆんちゃんを撮るな―っ！」

「あいやお待ちをつ！ これをご覧くださいっ！」

サツと片膝をついたレヴィさんが、迫りくる天使さんにカメラの液晶画面を向ける。

へえ、あの一眼レフカメラってデジカメだったんだ。

空中でクルリと一回転して、ストンと床に着地した天使さんは、レヴィさんが差し出しているカメラの液晶画面を覗き込む。

「……え、エロい。これはエロいっ！ エロいけどちょっと可愛いっ！」

「本日最高の一枚にございます。後ほど現像して献上致しますゆえ、よしなに」

二人して画面を覗き込みながら、ひそひそと小声で会話している。

その二人の会話を、ソファーに座ったまま聞き耳を立てていた佐丹さんは、天使さんの意識がカメラの画像に集中していることを横目で確認して、チラリと床を見る。

佐丹さんが見つめる先には、さっき天使さんが吐き出した飴が床に転がっていた。

そしておもむろに着ているスーツの内ポケットからハンカチを取り出し、床に落ちている飴をサツと拾うとハンカチに包み、そつと内ポケットにしまう。

そっか、佐丹さんは綺麗好きなのか。確かに飴は放っておくとベタベタしますからね。

わざわざ拾ってくれて、ありがとうございます。

一連の流れるような動作を感心しながらジッと見ていたら、僕と目が合った佐丹さんは真っ赤な顔で咳払いをすると、何もなかったかのように立ち上がり、「リリスは何も見なかった。いいですね？」という言葉を残してスタスタと歩いていく。

そしていまだにひそひそ話をしている二人に近寄ると、その場にしゃがんだ。

何も見なかった？ え？ どういうこと？

……はっ！　そうかつ！

床に落ちた飴を片づけるのは女性のたしなみとして当然。何もわざわざ人に言うことでもない。って佐丹さんは言っただ。

凄い。古き良き大和撫子みたいな人だ。見習わないと。

「こ、これはまた可愛らしくも妖艶というか、艶めかしいというか。以前のリリスにはなかった新鮮さがあります。この恥らう表情がまたなんとも」

「でしょでしょ？　ちょうエロ可愛いよねっ？　ねっねっ？」

「不詳このレヴィ、渾身の一枚にございます」

佐丹さんが加わり、三人で寄り集まってひそひそと会話を始めた。

僕だけ仲間外れですか。そうですか。まあ、ぼっちには慣れてますから別にいいですけど。

「ひ、引き伸ばしとかもできるの？」

「さ、さすがはアザゼル様。引き伸ばしとは素晴らしい考えです」

「えへへ、まあねー」

感心したように佐丹さんが天使さんを見つめ、天使さんは頭を掻きながら照れたように笑う。そして期待を込めた瞳でレヴィさんを見ると、レヴィさんはコクンと頷いた。

「お任せ下さい。無論可能にございます」

「よ、よろしく」

「承知」

キラキラと輝く天使さんの青い瞳。その期待が込められた瞳を真っ向から受け止め、何かを決意したかのようにレヴィさんが再度頷いた。

「あ、あの……」

見つめ合う二人の間に、軽く手を上げた佐丹さんが恐る恐る割って入る。

「なんだよインテリ」

「そ、その……わ、わたくしにも一枚頂けないでしょうか？」

「だめ」

「うう」

ガックリと肩を落とした佐丹さんは、顔を両手で隠して泣いている。

な、何を話してるのかな？　なんだか淒く楽しそうなんですけど。

ぼ、僕も混ぜってもいいですかね？

「あ、あの、どんな写真なんですか？　僕も見てもいいですか？　そっちに行ってもいいですか？」

テーブルから降りて近寄ろうとしたら、三人が僕を見て焦りだした。

「かつ、隠せっ！　ゆんちゃんが見たがってるよっ！　速く隠せエセ武士っ！」

「い、急ぎなさいレヴィ！　リリースがこちらに来てしまいます！」

「しょ、承知！」

天使さんがレヴィさんの頭をポカポカと殴り、佐丹さんが僕を見ながら挙動不審になっている。そしてレヴィさんが必死にデジカメを操作しているけど、ここじゃよく見えない。

ち、近寄ったらダメなのかな？　でも仲間に入りたい。僕も一緒にお話ししたい。

怒られるかも知れないけど、意を決して恐る恐る近寄ってみたら、いきなり三人が立ち上がった。

ひいつ、怒られるっ。

「画像はこれだ。見てみるといい」

僕にカメラをさし出すレヴィさん。

あれ？ 怒ったわけじゃないのかな？ 画像を見せてくれるんですか。

あー、びっくりした。

液晶画面を覗きこむと、ソファーに座る黒髪の女の子が写っていた。

この子が僕なんだよね？ やっぱりいまいち実感がわかない。

それはそうと、おっぱいとかパンツが写っちゃってる画像はないのかな？ おっぱいはともかく、もしパンツが写ってる画像があったら消して欲しいんですけど。

でも、デジカメとかどうやって操作するのか分からない。

「あの、僕、デジカメの操作とかよく分からないです」

「ここの十字ボタンの左側を押すと画像を閲覧できるのだ。私が操作するから見てみるといい」

そう言っつて、レヴィさんが僕に画面を見せたまま、ボタンをピコピコと押す。

次々と変わっていく画像。写っているのは僕と天使さんばかりだ。

あ、この天使さん可愛い。この写真欲しいなあ。

「こ、この天使さん可愛いです」

「これか？ 分かった、任せておけ。後ほど現像してやろう」

「うわ！ あ、ありがとうございます！」

やったあ！ 天使さんの可愛い写真をもらえる！ 宝物にしよう！

その後も色々な画像があつたけど、結局僕のおっぱいとかパンツとかが見えている画像は一枚もなかった。

ああ、よかった。

「ちょ、ちょっと、まさか消してないよね？」

「大丈夫です、ご心配には及びません。レヴィは恐らくバックアップを取っております。消したのか隠したのかは分かりませんが、問題ないでしょう」

天使さんと佐丹さんが、なにやらひそひそと会話をしている。何を話してるんだろ？

まあいつか。恥ずかしい写真はなかったし。

「あっ！」

うわっ！ びっくりしたっ！

いきなり天使さんが大声を張り上げたせいで、ビクッとしてしまった。

「そう言えばお前っ！ あたし達の居場所をバラしといて笑っただろっ？」

「また突然話が戻りますね」

佐丹さんを睨む天使さんと、ため息をついて、でもにやりと笑う佐丹さん。

「これが笑わずにいられますか。なにせ我らは既に先手を打っているのですから」

「へ？」

きょとんと佐丹さんを見つめる天使さん。その姿を見た佐丹さんは、さらに楽しそうに笑う。

「あなたがリリスの肉体を持ち出した際、我々はリリス復活を予期しました。ですが、リリスが復活するなど常識では考えられないその後、レオノールが何者かと交戦した際、相手に手傷を負わせました。その血液を分析した結果、魔族のものであると判明しております。リリスの復活などあり得ない。だが現に魔界が動いている。なれば先手を打つ必要がある！」

佐丹さんが視線で合図をすると、頷いたレヴィさんが懷から布を取り出し、その布を勢いよく広げる。

ちょっと気になったんですけど、レヴィさんの懷って色々なものが入ってるんですね。

広げられた白地の大きな布の中心には、剣を象った桃色の百合の

紋章が描かれていた。

「この旗を覚えておいででしょう。百合の紋章はリリスを意味します。リリス亡き後、解体されてしまった一リリー・マーテル（大いなる母の軍）。それが復活したリリスの名の元に再集結致しました。魔界など恐るるに足らず！」

「それ……連合軍の旗じゃないか」

瞳を見開いた天使さんは、その旗を懐かしそうに眺めている。

「そうです。たった八人で結成されたリリスの団。いつしか団は獄界の最大勢力となり、更にリリスによって結ばれた天界との和平条約により、リリスの団は一時解体され、天界獄界の総力を結集した過去に類を見ない最強無比の連合軍、リリー・マーテルが発足」

「お前まさか……最初から」

「この十年間、我々がただ指をくわえていたとでもお思いですか？ リリスの庭での一件の直後、早急に天界との協議の場を設け、リリスが復活するとハツタリをかましてやりました。その甲斐あって、天界も迅速に対応してくれました。もしリリスが本当に復活すれば、天界はリリスと獄界との繋がりを恐れるでしょう。なれば連合軍を発足させてしまえばいい」

にやりと佐丹さんが腹黒い笑みを見せる。

「ハツタリってお前……もしゅんちゃんが転生してなかったら、極刑ものだよそれ」

佐丹さんと同じく、にやにやと薄ら腹黒い笑みで旗を見つめている天使さん。

その二人を見て、旗を掲げているレヴィさんもまた、にたりと嫌らしく笑った。

三人して腹黒オーラを噴出している。ちょっと怖い。

「時にはハツタリも肝心。これもリリスに教わったことですの」

肩をすくめた佐丹さんは、にっこりと笑い、僕を見ると片目を閉じてウインクした。

だからなんでいきなり僕に振るんですか。僕はハツタリとか無理ですよ。

それどころか、普通にコミュニケーションをとれるかも怪しいのに。

「リリーって意外と腹黒かったもんね」

そう言つて、佐丹さんを見た天使さんは、どこか懐かしむように、それでいて凄く可愛らしい笑顔で笑った。

「ええ、清廉潔白では生き残れる時代ではありませんでしたから。人のためなら平気で嘘をつく。必要ならハツタリもかます。それでいてあの笑顔を作る。だからこそリリスは偉大なのです」

「似てきたね……」

「え？」

佐丹さんを優しく見つめる天使さんが、ポツリと呟いた。

「サタン……お前はあの頃のリリーにちょっとだけ似てきたよ。あたしから八つ当たりされるのが分かって、でも言い訳しないであたしを説き伏せて。危険を犯してまで天界にハツタリをかまして。リリーの方が全然、もうほんと全然凄いいけど、でもちよつとだけ似てきたよ」

その天使さんの言葉を聞いて、佐丹さんの肩が震える。

「わ、わたくしは……それ以上の贅辞を知りません。少しだけ、泣いてもよろしいでしょうか？」

ポタポタと床に落ちる雫。佐丹さんは満面の笑みで、そして顔をくしゃくしゃにして泣いてた。

「どんなことがあってもリリーは泣かなかったよ。まだまだリリーの背中はずいぶん、サタン」

「……はい、リリスの背中はずいぶん遠いものです。ですが、わたくしは確かにその偉大な背を目にしました。どれほど遠くとも、この目にはつきりと焼き付いております」

一歩、また一歩と天使さんに近づいた佐丹さんは、両膝を床について天使さんに抱きついた。

なんだろう？ どうしてだろう？ 勝手に涙が溢れてくる。

腕で涙を拭つても、僕の目から涙がとめどなく溢れた。

「リリース、泣きたい時は泣けばいいのだ」

ふわりと何かが僕を包み込む。

それはレヴィさんが掲げていた旗だった。

「何も恐れることはない。お前の元にリリース・マールが集結する。最強無比の連合軍だ。天界からは大天使長を筆頭とした天使連隊。獄界からはバアル・ゼブルを筆頭とした蠅騎士団と、ルシフェルを筆頭とした後方支援連隊。そして連合軍総司令官としてフルーレティが既に就任している。無論私も蠅騎士団の切り込み隊長として加わる」

僕を後ろから抱き締めるレヴィさんが、真顔でなんかわけの分からないことを言ってる。

「どさくさに紛れてなにやってんだお前——！ 死んでろエセ武士——！」

跳び上がった天使さんが、レヴィさんの顔面に渾身の右ストレートを叩き込む。

「ぐはあっ！ だが後悔はないっ！」

鼻血を噴き出しながら吹き飛んだレヴィさんは、壁に衝突してそのまま床に叩きつけられたけど、なんだか満足した顔をしている。

あまりダメージはないみたいだ。頑丈な人ですね。それはどうで

もいいけど、殴られて満足するとか、もしかして……。

レヴィさんってなんだか怖い。

「ねえゆんちゃん」

床に着地した天使さんは、振り返って僕を呼んだ。

「は、はい。なんですか？」

ドキッとした。真っ直ぐに僕を見つめる天使さんは、凄く凛々しくて格好良くて、とても綺麗で。

なぜか恥ずかしくて顔が熱くなっていくのを感じる。

「昔の仲間が助けに来てくれるって。だからさ……ここですっと一緒にいようね。ね、ゆんちゃん」

そう言っ天使さんはにっこりと笑った。

「は……はいっ！　ずっと一緒にいたいですっ！」

ずっと一緒にいようね。その言葉がただ嬉しくて、どうしようもなく嬉しくて。

だから自分が出せる一番大きな声で返事をした。僕もずっと一緒にいたいって思ってるって、そう天使さんにちゃんと伝えることを願って、返事をしたんだ。

大富豪でした

静かな室内。時計の秒針の音だけが、心地良くカチコチと響いている。

さっきまであんなに騒々しかったのに、ここに佐丹さんとレヴィさんがいたのがまるで嘘みたいに静まり返っている。

あの二人と天使さんの間には、昔何かあったみたいだ。

よく分からないけど、でもたぶん、それはきっと、僕の体の本当の持ち主であるリリスさんと関係してるんだと思う。それはなんとなく分かる。

理由は分からないけど、天使さんは佐丹さん達と会いたくなかった。本当は凄く仲良しなのに。

そしてそれは佐丹さん達も同じだったような気がする。

佐丹さん達も、できることなら天使さんをそっとしておきたかった。そう思ってたような気がする。

だって、天使さんを見つめる佐丹さんとレヴィさんの赤い瞳は、凄く懐かしそうで、でも凄く悲しそうで寂しそうだったから。

凄く仲良しなのに、とても大切なのに、会いたくないってどういう感情なんだろう。

僕にはよく分からない。

でも、少なくとも天使さんと佐丹さんは心が通じ合うほどに相互を理解し合っているように見えた。

昔を思い出して語り合う二人の表情は、暖かくて優しくて、そして楽しそうで、ちょっと羨ましかった。

『リリーに似てきたね』

そう佐丹さんに笑顔で言った天使さん。

佐丹さんはずっと泣いていた。嬉しいのか悲しいのか、それすらも分からないくらい、顔をくしゃくしゃにして子供みたいに泣いていた。

美人が台無しになるような泣き顔だったけど、でもなぜか凄く綺麗だった。

そんな佐丹さんを、天使さんは娘を見るように優しく見つめていた。

本当に嫌いなら、あんな笑顔も、あんな優しい瞳で見つめることも出来ないんじゃないかな？ それに本当に会いたくないのなら、天使さんはここにはいないんじゃないのかな？

天使さんは見つかるのが分かってて、それでもここにいたんじゃないのかな？

逃げ回ることだって出来たんじゃないのかな？ 隠れることだっ

て出来たんじゃないのかな？

それをしなかった天使さんは、ひょっとしたら、もしかしたら…
…佐丹さんを待ってたんじゃないかな？

それは僕の勝手な考えだけど、なんとなくそんな気がする。

そして、佐丹さんは天使さんから拒絶されるのが分かってて、それでも会いに来た。

天使さんと僕を守るために。

僕に出来るかな？ 大切な人から拒絶されると分かってて、それでも会いに来れたかな？

たぶん出来ない。僕には無理だ。拒絶されるのが分かってて、それでも言い訳一つせずに会いに来るなんて、僕には出来ない。

だって…僕は天使さんから嫌われたくないから。

佐丹さんって強い人なんだなあ。

それにしてもびっくりした。

レヴィさんが部屋の壁に旗を張り付けたのを確認した佐丹さんは、一旦引き上げることを僕達に告げた。

そして、僕がもらった名刺の裏には、地上界に集結した連合軍と

かいつのこの本部の所在が記されてるから、都合がよければいつでも遊びに来て欲しいって言われた。

言われてすぐに名刺を確認してみたら、名刺の裏に描かれた簡易的な地図と住所。それと……。

——ホテル・リリーマール——

そう言えば佐丹さんもレヴィさんも、リリーマールがどうのって言ってたけど、あれってホテルの名前だったの？

住所を見ると、僕の家からそんなに遠くないみたいだけど、リリーマールなんて名前のホテルは聞いたことがない。そんなホテルあったっけ？

まあ、ホテルなんて僕とは無縁だから、僕が知らないだけかも知れないけど。

二人が泊まつてるホテルかな？ うん、たぶんそうだ。

まあ、佐丹さんは気品があつたし、佐丹さんは真面目そうだったし、佐丹さんはお金持ちそうだし、というより、ヘルズ・コーポリションっていう会社の会長さんだから、たぶんお金持ちだ。

もしリリーマールが高級ホテルだったとしても、それほどびっくりはしない。

そう、普通のホテルじゃなくて、高級ホテルでもびっくりはしない。

お金持ちなら、高級ホテルに宿泊しても当然と言えば当然じゃないのかな？ 僕はお金持ちじゃないからよく分からないけど。

宿泊しているのなら何も問題はない。そう、宿泊しているのなら名刺の裏に書かれたホテルの説明には妙な引っ掛かりを覚えた。

一階 受け付け並びにロビーその他

二階から四階 天界用連合兵士及び侍女宿泊フロア

五階から十階 獄界用連合兵士及び侍女宿泊フロア

十一階 天界用来客並びに来賓宿泊フロア

十二階 獄界用来客並びに来賓宿泊フロア

十四階 天界用連合幹部宿泊フロア

一五階 獄界用連合幹部宿泊フロア

十六階から二四階 指令室並びに作戦・戦略用会議室 その他各職務用フロア

地下一階及び地下二階 バー並びに娯楽施設

―― 最上階並びに地下三階 アザゼル様・リリース専用フロア

えーと、んー、これって……え？ あれ？

もしかしてホテル全てが佐丹さんのものなの？

佐丹さんって、もしかして……お金持ちを通り越して大富豪なのかも知れない。

うん、まあいっか。深く考えないようにしよう。

気になるのは最上階と地下三階だよね、やっぱり。

最上階って見晴らしが凄いだろっなあ。行ってみたいなあ。

いつでも遊びに来ていいって言ってたし、今度天使さんと一緒に
行ってみたい。

でも、それはいい。びつくりはしたけど。

本当にびつくりしたのは二人の帰り際、佐丹さんがいきなりレヴィ
さんの顔を平手打ちにしたこと。

『レヴィ、あなたの命は既にわたくしが貰い受けています。あなたの
死に場所はわたくしが決めます。わたくしが死ねと命ずるまで、
あなたは何があろうと死んではなりません。勝手に死ぬことなど、
このわたくしが絶対に許しません』

そう、佐丹さんは赤い瞳に涙を溜めて、震える声を押し殺して淡
々と語っていた。

きつとレヴィさんが切腹しようとしたことを怒ってたんだ。

それはそうですよ。切腹なんてしてはいけません。

でも、それもいい。佐丹さんが怒っていた理由を知ってるから。

問題はレヴィさんだ。

怒られたら反省しないといけないのに、レヴィさんは笑ってた。凄く嬉しそうに笑ってたんだ。

顔に平手打ちを喰らって怒られたのに、反省するどころか笑うって……いくら頑丈だからって、叩かれて笑うって……。

やっぱりレヴィさんはなんだか怖い。

目を閉じて耳を澄ますと、時計の秒針の音に掻き消されてしまいそうなの、とても小さくて可愛い寝息が隣から聞こえてくる。

目を開けて隣を見ると、ソファアに座る僕に寄りかかり、気持ちよさそうに眠っている天使さんが見える。

金色の綺麗な髪。折れてしまいそうなくらい細い体。そして初雪のように白くきめ細やかな肌。

疲れたのかな？ さっきまで大暴れしてましたもんね。

寝てしまって全身の力が抜けたのか、着ている白いワンピースの肩がずり落ちそうになっている。

チラリと見える小さな膨らみ。

ヤバイ。ヤバイですって。天使さんは警戒心がなさ過ぎです。

僕だつて一応は男なんですよ？ 男はみんな狼だつて言うじゃないですか。僕は狼ほど強くはありませんけど。

いいとこ豆柴くらいかな？

いや、豆柴だつて本気になると結構強い。決して侮れない。

なるべく天使さんの胸元を見ないように目線をそらしながら、そつと手を伸ばしてワンピースを直す。

見てない見てない。僕は何も見てない。……ちょ、ちょっと見えちゃったけど、事故だよな、うん、事故事故。

違います。違ふんです。

見ようと思ってみたんじゃないものっ！ ワンピースを直そうとしたら見えちゃったんだものっ！ 見ないと直せなかったんだものっ！ 嘘じゃないものっ！ 本当だものっ！

……ごめんなさい、嘘です。

見たいって思いましたっ！ チラッと見てしまいましたっ！ 煩惱に負けましたっ！

うう、僕のえっち。

そ、それはそうと、毛布とか、せめてタオルケットくらいは掛けてあげたいけど、せつかく気持ちよさそうに寝てるのに、僕が動いたら起きちゃいそうだしなあ。

うーん、このままでも大丈夫かな？ 部屋の室温は快適だし、風邪は引かないと思うけど。

でもちよつと心配。

再度チラリと横を見ると、小さな寝息を立てている桃色の唇に釘付けになる。

焦って視線をそらそうとしたけど、ダメだ、目を離せない。

プルンと潤った可愛い唇。あの禁断の果実に……僕はキスをしたんだ。

うう、頭から、頭から煙が出そう。

あの時は無我夢中だったけど、でも覚えてる。

ちよつとひんやりしてて、そして物凄く柔らかかった。

そして……にゆるって、にゆるって僕の口の中に入ってきた物体。

頭が真っ白になって、背中がゾクゾクして、指先からつま先まで痺れるような、今まで味わったことがない快感が全身を駆け巡った。

……も、もう一回したい。

ゴクリと唾を飲み込む。

天使さんはハーフなのか、それともまるっきり外国の人なのか。

いやいや、佐丹さんの話だと、天界がどうの獄界がどうの言つてたし、洗面器に水を入れてボールを浮かべた世界から来たわけで。

ようするに、人間じゃないって感じ？ んー？ まあ、それはどうだっていいけど、どっちにしても天使さんしてみたらキスは挨拶みたいなものであり、だから僕がキスをしてても天使さんは怒らなかったのかも知れないわけで。

ちょっと待って。え？ じゃ、じゃあ、天使さんは誰とでもキスをするの？

で、でもでも、天使さんが誰とキスしようが僕に何かを言う権利はないわけで。

……そんなのやだ。天使さんが誰かとキスするなんて想像したくない。

で、でも、やっぱり僕がどうこう言う問題じゃない。

苦しい。胸が締め付けられるように苦しい。上手く呼吸ができて、頭の中がモヤモヤして、どうしたらいいのか分からない。

あまりの苦しさに胸に手を添える。

手から伝わる柔らかな弾力。

胸元に視線を移すと、着ている黒いキャミソールを押し上げる二つの大きな膨らみ。

そうか、そうだった。僕は女の子になったんだっけ。気を抜くと

すぐに忘れてしまう。

胸に添えた手から伝わる心臓の音。

ドキドキが伝わってくるけど、このドキドキは嬉しいのドキドキじゃない。

不安のドキドキだ。

何を考えてるんだ僕は。天使さんが傍にいてくれる、それだけでいいじゃないか。それだけで十分幸せじゃないか。

けどどやっぱり嫌だ。天使さんが誰かとキスするなんて嫌だ。自分勝手なのは分かってるけど、嫌なものは嫌だ。

考えたくない。天使さんが誰かとキスするなんて考えたくもない。

目を閉じて呼吸を整え、頭に浮かんだ嫌な妄想を掻き消す。

最悪だ。僕は天使さんを独占したいと思ってる。天使さんに依存し過ぎてる。このままだと気持ち悪がられるかも知れないし、ウザいって思われるかも知れない。

気をつけないと。

しばらくしたら、ちよつと落ち着いてきた。

大きく深呼吸をして目を開けると、再度隣で眠っている天使さん

を見る。

金髪碧眼なのと絶世の美少女という点を除けば、どこにでもいる普通の小さな女の子にしか見えない。

起きている天使さんは元気で明るい天使。寝ている天使さんは小さな可愛い天使。

僕だけの天使。そう、心の中でだけ思ってもダメですか？

心に広がる満足感と、ちょっと寂しいような不思議な気分。

どうして寂しいんだろう？

佐丹さんとレヴィさんが帰ってしまって、賑やかだったのが急に静かになったから？

うーん、それもあるだろうけど、なんとなく違う気がする。

佐丹さんはいきなりお風呂に入って来るし、天使さんと佐丹さんは喧嘩するし、レヴィさんはいきなり切腹しようとするし。

レヴィさんは最初から最後まで変だったけど。

凄く怖かったしびっくりした。

でも……でも凄く嬉しいこともあった。

何も取り柄がなくて、性格も暗くて、人と上手く話せなくて、不器用で、臆病で、それに頭も悪くて。

そんなどうしようもない僕に、天使さんは言ってくれたんだ。

ずっと一緒にいようねって。

あの時、僕はきつと笑ってた。嬉しくて、嬉しくて嬉しくて、どうしようもなく嬉しくて、勝手に涙が溢れてきた。

僕は何も持つてはいないけど、天使さんに何もお返しできないけど、だから精一杯の声で返事をした。

僕の気持ち、ほんの少しでも伝わってくれることを願って。

寂しいことなんて何もない。だって傍に天使さんがいるんだから。

だったらどうして寂しいの？

分かってる。どうして寂しいのか、本当は分かってる。

僕はきつと……楽しかったんだ。

ずっと一人ぼっちだった僕は、こんなに騒がしくて賑やかな場所とは無縁だった。

学校は賑やかだったし、笑い声もたくさん溢れてた。友達同士で騒いで、たまにいきすぎて喧嘩したりして、そして仲直りしてまた楽しそうに笑う。

でもそこに僕の居場所はなかった。教室にいても、そこに僕はいなかったんだ。

誰も僕を見てはくれなかった。

そんなの当たり前だ。だって僕は自分からその中に入ろうとはしなかったんだから。

寂しいくせに自分から声をかける勇気がない。泣きたいのに泣く勇気もない。笑いたいのに笑い方を知らない。

どんな顔をして話かければいいのか？何を話せばいいのか？

何も取り柄がないから、話題がないから、そう自分に言い聞かせてたけど、そんなのはただ逃げてただけだ。

周りが僕に壁を作ってたんじゃない。僕が壁を作ってその中に閉じこもって、縮こまって、目を閉じて、耳を塞いで、逃げてただけだ。

そんな僕に天使さんは手を差し伸べてくれた。僕を見てくれた。話かけてくれた。笑いかけてくれた。

そこに変な二人組がやって来て、僕をリリスさんだと勘違いして、いきなり大騒ぎして。

そうだ、やっぱり凄く楽しかったんだ。

僕はここにいる。僕はちゃんとここにいるって、初めて思えたよ
うな気がした。

でも、不安なこともある。

天使さんが見ているのは、本当に僕なのかな？ 天使さんが見ているのは、僕じゃなくてリリスさんなんじゃないのかな？

天使さんと、それと佐丹さんとレヴィさんにとって、リリスさんが本当に大切な人なのは僕にも分かる。

天使さんはどうして僕なんかのリリスさんの体を与えたんだろう？

考えても答えなんて出ないよね。

なら天使さんに聞いてみる？

それは嫌だ。聞きたくない。聞くのが怖い。

もし仮に、リリスさんの体に適応する魂なら誰でもよかった、っ

て言われたらどうするの？

ううん、もし仮にじゃない。たぶんその可能性が一番高い。

それに佐丹さんが言ってた。リリスさんの肉体に適合できるのは、リリスさんの魂だけだって。

僕の魂は偶然にもリリスさんの体に適応してしまった。リリスさんの魂でしか適合できないはずの体に、なぜか僕の魂が適合してしまった。

きつと凄く低い確率なんだろう。ううん、低いなんてものじゃない。だって佐丹さんはあり得ないって言ってたもの。

もしかしたら奇跡なのかも知れない。

天使さんはどうしてもリリスさんに会いたかった。でもリリスさんはもういない。それでも天使さんは探した。探して探して、そして……。

偶然にもリリスさんの体に適応できる僕を見つけた。

やっぱり聞けない。聞くわけにはいかない。

聞いて言われたらどうするの？ 天使さんから“誰でもよかった”って言われても、僕は笑えるの？

笑えない、きつと笑えない。聞きたくない。そんな言葉は聞きたくない。

聞いたって、たぶん天使さんは“誰でもよかった”なんて言わない。だって天使さんは優しいから。

天使さんの優しさに甘えて、僕はまた逃げるの？ 聞きたくないことから耳を背けて、また逃げるんだ。

ごめんなさい。でもやっぱり嫌だ。僕は天使さんを失いたくない。天使さんが見ているのは僕だって、そう思っていたい。

あはは、なんだこれ？ 僕は利用しようとしてるの？ 僕はリリスさんの体を利用して、天使さんの心を繋ぎ止めようとしてる。

ごめんなさい、本当にごめんなさい。許して欲しいだなんて言いません。

このまま知らない振りをしていれば、僕は幸せだ。天使さんは僕を見てくれる。話かけてくれる。笑いかけてくれる。

幸せだ。なんて幸せなんだろう。僕は幸せだ。僕は……僕だけが。

僕だけが幸せ。ダメだ、そんなの絶対にダメだ。そんなことは許されない。

天使さんはきっと許してくれる。臆病な僕を許してくれる。

天使さんは僕に色々なものをくれた。僕がリリスさんじゃないこ

とを、一番よく知っているはずなのに。それなのに天使さんは……。

いいの？ それでいいの？ 天使さんの優しさに甘えて、天使さんの暖かさに包まれて、僕だけが幸せで、それで本当にいいの？

そんなの許さない。僕が許さない。

「なればいいんだよ。そうだ、僕がリリスさんになってしまえばいいんだ……」

リリスさんの体に適応できたこと。これが僕に与えられた唯一の才能。

ならリリスさんになってしまえばいい。

殺そう。僕は僕を殺してしまおう。小日向優であった僕を殺してしまおう。

僕はリリスさんになる。なってみせる。それは単なる模倣でしかないのかもしれないけど、でもなってみせる。

でも、リリスさんを模倣することは、結果として天使さんを傷つけてしまうかもしれない。

見た目は紛れもなくリリスさんなのに、でも中身はリリスさんを模倣した僕。

大切な人を失って、その大切な人とそっくりな別人が目の前にいたら、それって地獄なんじゃないかな。

それにリリスさんを模倣することは、リリスさんを冒瀆する行為だ。しかも天使さんを傷つけて、余計に悲しませることになるかも知れない。

分からない。どうしたらいいの分からない。

「ゆんちゃんはゆんちゃんだよ。ゆんちゃんはゆんちゃんのままでいていいんだよ」

……え？

不意に僕の耳に届いた天使さんの優しい声。

「お、起きてたんですか？ それとも、僕が起こしちゃったんですか？」

瞳を閉じたままの天使さんは、僕に寄りかかりながら首を横に振る。

「起きてた。ごめんねゆんちゃん。こうしていると、優しいゆんちゃんはどこにも行かないと思って」

そう言つて、天使さんは僕の手に手を重ねると、優しく握り締めてくれる。

僕は優しくなんてないです。臆病で卑怯なだけです。逃げてばか

りの卑怯者なんです。

それに……天使さんの優しさを独り占めにしたいなんて考える最低なヤツなんです。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい。」

「僕はどこにも行きません。ずっと天使さんの傍にいます。天使さんが許してくれるのなら」

「そっか……」

消え入りそうな小さな返事。

僕の腰に手を回した天使さんは、僕の胸に顔を埋めて抱き締めてくれる。

「僕は……僕ではリリスさんにはなれませんか？　僕がリリスさんに――」

「リリーはもういないんだよ」

僕の言葉を遮る天使さんの静かな声。

「あたしはね、ゆんちゃんの考えてることがなんとなく分かるの。はつきりと分かるわけじゃないけどね、でも分かるの。嬉しいとか、悲しいとか、辛いとか。そういつたゆんちゃんの感情があたしには分かるの。それはね、あたしとゆんちゃんの魂は繋がってるから」

繋がってる？　僕と天使さんの魂が？

例え話なのかな。ごめんなさい、よく分かりません。

こういう時、頭の悪い僕は理解できなくて悔しい。本当にごめんなさい。

僕でも理解できるのは、天使さんの声が優さに包まれてるってこと。それはちゃんと分かってます。

暖かなぬくもり。離したくない。このぬくもりを失いたくない。

もう無理だ。もう孤独には耐えられない。このぬくもりを失うわけにはいかない。

このぬくもりを守るためなら、僕は……。

「ゆんちゃん、嘘つき……」

ポツリと呟かれた悲しそうな言葉。

え？ 嘘つき？ 僕は……僕は天使さんに嘘をついたの？

「てつ、天使さん。僕は天使さんに嘘なんかついて——」

「ゆんちゃんさ、あたしとインテリが睨み合ってた時さ、あたしを後ろに投げて盾になろうとしたでしょ？ ちゃんと分かってるんだよ。どこにも行かないって言ってさ、そうやってゆんちゃんもどこかに行こうとするんだよ。あたしを置いて、どこかに行こうとするんだ。だからゆんちゃんは嘘つきなの」

「でっ、でもそれはっ、それは天使さんが大切だからっ！　嘘じゃないですっ！　僕はどこにも行きませんっ！　ずっと天使さんの傍にいたいですっ！」

僕はどこにも行くつもりなんてない。ずっと天使さんの傍にいたい。嘘なんかじゃない。

ただ……ただ、天使さんを守りたかっただけなんです。

僕の胸に顔を埋めていた天使さんは、顔を上げると僕を見つめる。

「ちょっと昔話をしようか」

青空のように真っ青で、純粹で、でも、海の底のようにとても深くて綺麗な蒼。

その瞳が真っ直ぐに僕を見つめる。

「遠い昔の……嘘つきな女の子のお話」

そう言って、天使さんは悲しそうに笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3755x/>

女の子になりました 改訂版

2011年11月12日00時40分発行